

『この身の申すことをきいて下すつたか。あのやうに無禮なことを申上げたのに、それさへ御叱りもなく、この愚な身の言ふことをきいて下すつたか——』鎌田はまたわつと聲を擧げて泣いた。

二九

かれ等はまた歩み續けた。

雪はさつき程ひどくはなかつたけれども、それでもまだ小止みにならうとはしなかつた。風はをりをり鐵片のやうな冷たい雪をかれ等の顔に吹きつけた。夜は既にあたりに迫つて来て、すぐ前に聳えてゐる山の影も、向うにぼんやり連つてゐる林も、次第にその心細い暗い空氣の中に包まれて行つた。

それ以來義朝は何も言はなかつたけれども、頼朝のことは絶えず頭に絡み着いて忘れられなかつた。さつき鎌田が言つたやうに、何うかしてあとを追つて来て呉れ、ば好いが——生きて居さへすれば、敵に捕はれずに安全でさへ居れば、それは青墓に行くことは知つてゐるのであるから、あとからでもやつて来るであらうけれど、この風雪では、それも晝でなく夜では、とても生きて居られやうとは思はれなかつた。義朝は絡み着いて来るいろ／＼な幻影を、そこに雪の中に倒れて凍えて死んでゐるさまを、または誰かそこらにゐる村の人達に捕へられて敵のもとに伴れられて行つてゐるさまを、否、幼いけれども伶俐で、聰明で、行末にも望みをかけてゐた最愛の子をさうした眼に逢はせたのも皆なその身がわる

かつたといふことを——否、さつきはそれと口に出しては言はなかつたけれども、それを言つては却つてその身が斬られるやうに辛く感じられるので口まで出かゝつたのをそのまゝ押へて了つたけれども、保元の時に、船岡の麓で斬つた乙若や龜若や今若の言つた言葉が、『兄上は何うしてさうつれないのやら……？ 何故にこの弟達の命乞ひをして下されぬのやら……？ 今に、今に、力になるものをかうして斬られたのを悔まれる時が来るに相違ないのに……』と言つた言葉が、今でもはつきりと思ひ出されて来るのを、否、それと共に父の爲義の血に塗れた首の眼の前にもちらついて来るのを、かれは何遍暗い暗い心持で振拂つたか知れなかつた。義朝は黙々として歩を續けた。

しかし、かうした暗い幻影の中にも、闇の彩か何ぞのやうに、をり／＼青墓の延壽のことが浮び出して來ぬでもなかつた。さつき自害を思ひとゞまつたのも、さう言へば、實は鎌田にとめられた以上に、その延壽の悲しげな面影にとゞめられたと言つて好かつた、折角、此處まで來たのだ……。兎も角も大炊や延壽に逢つてからのことにしよう。かう思つたことをかれは繰返した。と、かれの眼の前には、今から二年前に見た青墓の賑かな夜の街のさまが、大炊の家の帳臺のさまが、結び燈臺のもとに大勢遊女の集まつて來てゐるさまが、はつきりと繪か何ぞのやうに浮んで見えた。義朝はかれ自からの心と體とが、死の暗い影と歡樂の明るい影とで緋い雜ぜられた繩でぐる／＼と幾重にも堅く縛られてゐるやうな氣がした。

それは夜になつてから少くとも一時ぐらゐる経つてからのことであつた。突然、先頭に立つた佐渡式部大輔が言つた。

『あれは灯では御座らぬか?』

『どれ? 何處に?』

義平は言つた。

『お! 今、ちよつと見えなくなつたが……』かう言つて佐渡はじつと見詰めて、『そら見えたで御座らう?』

『灯だ! 灯だ!』

喜ばしさうに義平は言つた。

『何ぢやと? 灯が見える?』義朝も近寄つて來た。

そこにやつて來た鎌田も言つた。

『あ、たしかに灯だ——』

しかし、その灯は林にかくれてでもゐるのか、それともその近くに樹でもあつて、それが動くために、そのためにさういふ風になるのか、それともまた低く這つてゐる雲や霧のためにさういふ風になるのか、それは何方だかはつきりとはわからなかつた。けれども兎に角それは、風雪の中に明滅してゐる

灯であるといふことだけはたしかになつた。

『しかし滅多には近寄れぬぞ。』

『左様で御座るとも……。用心して行かねばなりません。折角これまで參つて、こゝで敵の手にかゝつたりなどしてはそれこそ死んでも浮ばれませぬ?』

鎌田はかう言つたが、その灯の何であるか、農家の灯であるか、それともまた小關を固めた番小屋の灯であるかをたしかめるために、徐かにそつちへと近寄つて行つた。義朝達は五六間あとから續いた。

段々近寄つて行くにつれて、それは一軒の小さな家屋の窓のやうになつてゐるところに竹の小簀があつて、まだすつかり雪に埋め盡されてゐない一竿の竹が風に動く度に、その窓の内の灯がかくれたり見えたりしてゐるのであるといふことがわかつて來た。別に番小屋らしいものでもなかつた。

鎌田はあとに戻つて來て言つた。

『大事なさゝうです?』

『百姓家か?』

『さうらう御座る……』

『村があるのか?』

『村かも知れませぬ……。しかしそこには小さな家が一軒あるだけで御座るか? 路をひとつきいて

見ると御座らう？」

『さうだな？ それには、皆な入つて行つては、先でおどろくといかぬ。鎌田、そなたが行つて、様子をさぐつて見よ？』

鎌田は再びその灯の方へと行つた。

あとに残つた一行が見てゐると、鎌田が行つて案内を乞ふ氣勢がすると同時に、今まで見えてゐた窓の内の灯影がほつきり無くなつて、今度はそれが前の入口の障子に浮び出すやうに映つた。やがて中から主人らしいものが出て来て、鎌田と何か言つてゐるのが此方まできこえて来た。

雪はまだ降つてはゐるが、それでもいくらか小降りにはなつて来てゐた。

やがて鎌田は戻つて来た。

『よくわかりました——山に迷つたので御座つた。小關はもうずつとあとになるといふ話で御座る……？』

『あとに——？』

『それでは、もう通つたので御座るか？』と平賀と佐渡は異口同音に言つた。

『何でも、小關はこの向うになつてゐるといふ話で御座る……藤川の手前からぐつと山の中に入つて了つたらしいのです……。此處は伊吹といふ村のすぐ上のところだといふことで御座る……』鎌田はか

う言つて、『何も別條はないやうであるほどに、何でも、樵夫夫婦が住んでゐるらしい……。ひと休みして参りませうか？』

『大事なかな？』

『大事なやうです——』

かう鎌田が言ふので、兎に角ついて行くことになつた。一行はぞろ／＼とそのあとから續いた。

暫らくした後には、かれ等はその整はない惨めな姿をその薄くぼんやりした小さな灯のもとに見出した。主人の樵夫は奥から櫓を一かゝえ持つて来て、それを半ば消えかゝつた圍爐裏の中に入れた。

やがて奥から主婦らしい五十近い女も出て来た。かれ等は不意の闖入者——ぞろ／＼とあとから續いて入つて来た闖入者に對しても、別にあやしいと思つてゐないらしかつた。かれ等は鎌田の言つたことを信じた。北國道をやつて来て、雪に迷つて、何うにもかうにもなくなつたといふことを信じた。

『何しろな？ この吹雪だでな？ 山かせぎするものでも、こんな日は家に蹲踞んでゐるだでな。』かう

樵夫夫婦は親切に言つて呉れた。圍爐裏の櫓はやがてパチ／＼と音を立て、燃え出した。

櫓火の燃え出すにつれて、取亂した一行のさまが一層はつきりとなつた。沓が半ば破れて辛うじて歩いて来たやうなものもあれば、鎧直垂が裂けて袖が半ばちぎれてゐるやうなものもあつた。中でも朝長のさまは惨めであつた。朽葉色の直垂はところ／＼泥に塗れ、兜下の烏帽子は夥しく濡れ、沓も途中で

捨てたので、華奢な足首がそこから赤く半分ほど見えてゐた。歩いてゐる中は、それでも氣が張つてゐると見えて、疵の疼痛もそれほどではなかつたけれども、かうして少しでも落附いてゐると、ズキ／＼と脈を打つて痛んで、腰をかけるにも、體を半分曲げなければならなかつた。それでもかれは齒を喰ひしぼるやうにしてそれを堪へた。鎌田の訊いた時には、『少しは痛いけれど、大したことはない……』と朝長は答へた。

圍爐裏の周圍に皆は集まつた。暗い義朝の顔に竝んで、鬚の深い何方かと言へば輪廓の丸く小さい鎌田の顔があり、それと對して、大きな力の張つた義平の顔が赤く焚火の中に浮び上つた。平賀は大きな掌を、佐渡は濡れた直垂を火に翳した。かれ等に取つては、この圍爐裏の榾火は、何んなに難有かつたか知れなかつた。生命を救はれたと同じであつた。

義朝の烏帽子の襷にたまつてゐた雪の塊があたりの暖かさに解けて、バラ／＼と圍爐裏の中に落ちた。かれは今でも雪の中に迷つてゐる頼朝のことを頭に浮べてゐた。

『えらい雪ぢやつたな？』平賀が佐渡に言つた。

『本當だ……。雪といふものがこんなにひどいとは始めて知つた——丸で、一時は眼もあけられないくらゐだつた……』

『何しろあの時は何うなることかと思つたな？』

『本當だ……。風がひどかつた——』

その傍に腰をかけてゐた金丸はしかし黙つて暗い顔をしてゐた。かれは頼朝を見失つたことについて深く責任を感じてゐた。頭の殿に對しても、鎌田に對しても、すまないやうな氣がしてゐた。何んなに風雪が烈しかつたにしても、何故あの時ももう少しあとまで戻つて見なかつたらうなどと思つた。

『こゝは、いつでも、こんなに雪のひどいところかな？』

かう平賀に訊かれた主の樵夫は言つた。

『今日はひどいな。こんなことは、一年の中に、一度か二度しかありやしねえだ。それに、昨日の朝も降つたで、えらく積つてゐるたでな？ 北國道を來るのは、えらかつただな……』

『これから先も深いかな？』

『何處に行くぢやか知らねえだが、もうこんなことはあんめい……。野上の方に行けば、そんなに雪は深くはねえ筈だ……。いつも雪の深いのは、北國道だけだ。何んせ、この伊吹といふ山はえらい荒山だ。吹雪いたと來たら、何んな樵夫も獵人も皆な引込んで了うでな。』

こんな話を平賀達がしてゐる間に、義平と鎌田とは、二語三語主婦に話しかけて見たが、此處ではとても食ふものが得られないといふことがわかつたので、かれ等はもういくらも残つてゐない袋に入つた糲を出して、それを沸え立つた釜の中に浸けた。

『よく持つて御座るな?』

佐渡は鎌田に言つた。

『式部殿はもう持つては御座らぬか?』

『持つてゐない?』

『平賀は?』

『この身はある……』平賀は腰を探つて二袋出した。

『此處からはもう近いから、持つてゐるだけ出して、皆なして食はうではないか? ひもじうては何うもならぬ……』

かう言つて鎌田は各自の糶をあつめて、それを皆な釜の中に浸けた。そして沈まぬやうに袋の糸を長い箸に結び附けた。

主の樵夫はかうしたさまをじつと見つめるやうにしてゐたが、突如どしどしに言つた。

『おめえさま方にきいたらわかるかも知れねえな? 京では、昨日とか合戦があつたらうが? 本當かな?』

皆なは思はず顔を見合せた。

『そんなことをわしもちよつと聞いたがな?』

それをまぎらすために、鎌田はかへつて此方から問ひかへすといふやうにして、主の樵夫の顔を見た。

『おめえさん方はそれでは京から来たんぢやねえのかな?』

『いや——』

『何處から来た?』

『北國から尾張の熱田のお宮に參詣しようと思つてな。それでかうして揃うてやつて来たのぢや……こんなにからい雪とは思はないでな?』

『北國は雪は深いぢやらうな?』

『柳ヶ瀬まで来るのが骨ぢやつた——』かう鎌田はでたらめを言つたが、更に『それで何うした? 京の合戦とは、それは何ういふ合戦ぢやな?』

『何でも源氏と平家との争ひだといふことだ——。何アにな、夕方にな、京から走つて来たものがあつたとかで、それから聞いたのをまた聞きした?』が、何方が勝つたかと思つてな?』

『ふむ、さうか、また平家と源氏と合戦したのか? ふむ。』鎌田はかう言つたまゝ、黙つて了つた。これは煮えた糶を釜から出して、それを皆なにひと袋づゝ渡してやつた。

義朝は何も言はなかつた。その一袋の糶を手にとつて、黙つてそれをむしやむしやと不味さうに食つ

た。あまり頼朝のことを考へた故か、頭が何となくぼんやりとなつて了つた。さつきこの樵夫に情を明かして、頼朝を探して貰はうかと思つたが——その言葉が既に口から出ようとしたが、それを言ひ出さないで好かつたと糍を食ひながら義朝は思つた。(それにしても、今時分は何處かで凍えて死んでゐるか、それとも敵に生捕られて縄目の恥を見てゐるか、それともまた、そこらの樵夫にでも助けられて生きてゐるか——)しかもそれはとても望まれぬことだつた。あの凄じい風雪では、凍えて死んで了つたのが一番實際であるらしく覺えた。何か言はうとしたが、かれはそのまゝそれを押へて了つた。

『野上までは、こゝからまだ餘程あるかな?』

暫くして義朝はかう主の樵夫に訊いた。

『いくらもねえな、もう此處からこのすぐ下が伊吹の村だで、それから十町もあるかな?』

『そんなに近いのかな?』

『わけはねえよ、もう。それに野上に行けば、雪もぐつと少くなるでな、わけはねえよ。』

その言葉に皆なは俄に勇み出した。野上がそんなに近いとはかれ等は今まで夢にも思つてゐなかつたのである。尠くとも一里や二里はあると思つてゐた。野上! そこを通り越せばあとは府中から青野ヶ原、それから青墓まではいくらもありはしなかつた。それにあそこからは海道だから、雪が何んなに深く積らうとも、またどんなに烈しく吹雪かうとも、歩くに困るといふやうなことはないに相違なかつた。

義朝さへも元氣になつた。

『朝長、そなたは、糞沓をはくが好いぞ! 何アに、はいたことがなうても仔細はない——。金王

丸、そちは大夫進に糞沓をはかせてやれ!』

『承りました』

さう命ぜられた金王丸は始めて生き返つたやうにして立上つた。

尿をしに外に出て行つた鎌田は、『雪も大分小降りになつた。好い鹽梅だ! これなら、もう案ずることとは御座らぬ。』こんなことを言つて入つて來た。

三〇

雪でひどい目には逢つたけれども、一方から考へれば、却てそのために途中咎められずに此處までやつて來ることが出來たとも言へた。馬で通つては、晝間では、小關の方を通るにしても、とてもかう容易には出て來ることが出來なかつたに相違なかつた。否、小關は何うやら彼うやら通ることが出來たにしても、海道を、人通りの割合に多い海道を鎧兜で押し通ることはとても難しかつた。『それはさうですな。矢張夜にならなければ此處は通れませぬ……。結句馬や物の具は、何處かにあづけて、暗くなつてからやつて來るより他爲方がありませんでしたらうな。』竝んで歩きながらこんなことを鎌田は義朝に

言つた。

何と言つても、かれ等の目ざして来た土地が近くなつて来たといふことが——兎に角そこに行けば二日二晩碌に眠りもせず働いて来た疲勞をも休めることも出来るといふことが、温かい湯にも柔かな夜のものにもあり附くことが出来るといふことが、尠からずかれ等を勇気づけた。かれ等は灯のぼつくと見えてゐる伊吹の集落を通つて、いくらかひろくとした田圃の中をそのまゝ、野上の方へと歩を運んで行つた。

橋を渡つて少し行くと、向うに大きな幅の廣い道が、かれ等の歩いて行く路と丁字形を成してずつと長く東西に續いて行つてゐるのを見た。積つた雪も此處等では纔かに足の踝をかくすぐらなるものであつた。

『あ、こゝから海道だ！』

『あ、もう大丈夫だ！』

かれ等は異口同音になつかしさうに言つた。

義朝は感慨無量だつた。かれ等は何遍この海道を通つたらうか。かれは少年時代にも通れば、大きくなつてからも通つた。父の爲義が青柳の庄の領主であつた時には、こゝから少し行つたところを府中まで出て、それから青野ヶ原をすつと向うの方まで行つた。その時分がかれに思ひ出されて来た。かれは

若い十二三のかれが、丁度左衛門佐ぐらゐるの年恰好のかれが、その時分ゐた猪飼の彌平太といふ老功の家來に供をさせて、鹿毛の馬に鞭を當て、こゝらあたりを通つて行つたことを思ひ出した。あの時分はのんきだつた。何も思つてはるなかつた。嫉妬だとか、勢力争ひだとか、争鬭だとかいふものが、君と臣との間にも、親と子との間にも、決定的に惡魔的に存在してゐるようなど、は夢にも思つてゐなかつた。かれは慘めな氣がした。

野上の宿はやがてさびしい家並と闇を劃つてゐる屋根とところどころにぼつり／＼ついてゐる灯とを持つてあらはれて来た。まだ戌の刻を少し下つたばかりなので、酒を賣る家などはまだ起きてゐて、女達が拍子を取つて鄙びた唄をうたつてゐるのがそれとはつきりきこえた。雪は八分通り止んで、今では雪片が風花でもあるやうにチラ／＼落ちてゐるばかり、路の右の方には、美濃の中山つゞきの丘陵がすぐその近くまで暗くその裾を落して來てゐるのが見えた。

何とも言へず暗い心持がまた義朝の胸に押し寄せて來た。しかもそれはさつきのような佗しい消極的のものではなくて、烈しい強い自暴自棄的のものであつた。かれは頼朝のことを考へて赫とした。また常磐と三人の子供のことを考へて赫とした。意氣地なくかうして遁れ來たことに對しても、かれは一種の憤怒を感じた。石にでも頭を打つけて死んで了へ！ といふやうな氣がした。青墓に行くにしても、何の顔下けて大炊に逢はれよう！ といふ氣がした。

一行は野上から府中の人家の竝んでゐる街道は通らずに、かねて知つてゐる小道をそのまま、青野ヶ原の方へと出て行つた。

鎌田は言つた。

『しかし、油断はなりませぬな、氣をつけて行かなければなりませぬな？』

『それはさうぢや……』

『何に致せ、あそこは源氏に縁故のあるところとして誰しも知つてをりますから……。京の合戦のことが知れて居るとすれば、何んなものがそこに待つてゐないとも限りませぬからな？』

『京の合戦のことは、もはや何のくらのまで知れてゐるような？』

義朝は訊いた。

『されば……』鎌田は考へて、『この身はもはやあら方は知れて居ること、思ひますが——何しろ、あんな山の中の樵夫ですら、合戦のあつたことは存じてをりますので御座るから……』

『さうぢやつたな？ あの時ははツと思つたな？』

『何に致せ、あんなところで存じて居らうとは夢更知りませぬから……』

『沙汰人のところには、もはや大抵わかつてゐるような？』暫らく黙つたあとで、かう考へるやうにして義朝は言つた。

『まア、さう思はねばなりませぬな？』

『さうすると、街道からはうかくと入つては行けぬな？』

義朝には、さうしたことも苦勞にはなつたが、それ以上に、大炊や延壽に顔を合はせることについて一種の不安を感じ出して來てゐた。かれは平生から何方かと言へば神経質で、小さなことが氣になる方であつたけれども、しかも今日ほど胸がいやにざわつくやうな騒がしさを感じたことは稀であつた。保元の時に、大炊の弟の内記政遠が院方に屬して討死してゐることなども、今に當つてかれの胸にはつきりと浮んで來た。かうして落武者になつて戻つて行つては、大炊は、果して何んな顔をして迎へに出て來るであらうか。たとへ延壽がゐるにしても、以前のやうに喜んで迎へて呉れはしないやうな氣がした。青野ヶ原はやがてひろくとしてかれ等の前にあらはれて來た。雪はもはや全く止んだ。かなり深く積るには積つてゐるけれども、あの山の中の雪とはとてもくらべものにならないほどサクサクしてゐた。夜は眞暗で、しんとして、渠等はそのあたりに見出さなかつた。

『それでは裏道に行くことに致しまするか？』原の中ほどに來た時かう鎌田は義朝に言つた。

『さうする方が好いな……。』義朝はかう答へて、『あの山添のお宮のあるところがあるが、あそこを行

く方が好い?』

『路はわるいで御座らうな?』

『それはわるいかも知れぬが、あれが一番安心だ。あそこなら、裏からすぐ入つて行くことが出来るでな?』

『あの橋のところが何うかと思ひますが……』このあたりのことをよく知つてゐる鎌田は、かう言つて考へて『しかし、あそこが一番好いで御座らう? あそこを参りませう?……但しかうして大勢して揃つて行くのは何うかと思ひますな。もう、此處まで來たので御座るから離れ離れになつて行つても好いわけで御座るな?』

『さうだ、それが好い……』

元氣よく義平は言つた。

で、佐渡と平賀、義平と朝長と金丸、かれ等はかう二手にわかれて右の間道を行き、義朝は鎌田と二人で裏の山に添つた道を行くことになつた。

やがて原の中ほどなところへと來た。何でもそこらあたりから左に曲つて、五六町ほど行つて、川に架けた橋をわたつて、突當つてからずつとその山に添つて行くやうにその路はつけられてあつた。晝間ならば、その突當つた山の脊に松の行儀よく並んでゐるのが、繪巻でも見るやうにくつきりと晴れた空

にあらはれて見えてゐるのであつた。

『あゝ此處だ!』

眞暗な闇の中にかれ等は容易にその岐れ道を見出した。

『それぢや用心して行け!』

義朝と鎌田とは、雪を踏み分けて左の道を取つた。

暫く來たところで、

『それで、殿は何うなさります?』

『何を?』

『知多に行く方が好くはないかとも思ふので御座るが——?』

『あ、そのことか?』義朝はかう言つて、『今も考へてゐるのだが、海道は行けぬかな……?』

『とてもむづかしいと思ひますが……?』

『海道は行けぬにしても、せめて熱田には寄つて行きたいと思ふが……?』

『それはな……』

鎌田は首を捻つた。

『難かしいかな?』

『何うも熱田はちよつと難かしいと思ひまするがな?』考へて、『矢張、あそこはあのまゝ、そつとしてお置きになる方が好くは御座りませぬか。あそこは敵も目をつけて居りませうから、求めて危いところに近寄つて行くやうなものでは御座りますまいか?』

『それも考へては居るが?』

『それで、あそこから海道をお出でにならうといふお考へですか?』

『いや、さうでもない。あそこから、信濃に入つて、御阪を越したら何うか? とも思つてゐるのだが――』

『それよりは、知多の方が好くは御座りませぬかな? あそこなら、何うにでも出来ますから、馬でも物の具でも、あそこなら借りることが出来ますから……。あそこで様子を見て、疲勞を治して行けたら、熱田の方にもお出でになるがよし、行けなければそのまゝ、海をわたつて三河の方にお越しになる。さうすれば、東國はもうわけはありませんから――』

『さうぢやな? それも好いな?』

『さうする方が好いと思ひまするが……』

かれ等の前には、その時小やかな瀬の音が聞えて、ところ／＼洲を成して雪の積つてゐる中を、幾筋にもわかれて水の流れてゐるのが微かながら闇にもそれと見え出して來た。果して鎌田の言つた通りで

あつた。橋が落ちてゐた。かれ等は立停つた。

あれかこれかと迷つたが、兎に角雪明かりをたよりに水の瀬を渡ることにした。義朝はそれでも何うやら斯うやら向うに上ることが出来たけれども、鎌田は三筋目の瀬を飛び損じて、ばしやッ! といふ音をあたりに立てたが、そのまゝ、身を屈めて暫しはそこをまご／＼してゐた。

『何うした?』

『杓を流して了ひました――』

『それはいかぬな? そこらにないかな? ありさうなものぢやが――』

鎌田は猶頻に搜してゐたが、やがて思ひ切つたと云ふやうにして岸の方へと上つて來た。

『あつたか?』

『いや――流れて行つて了ひました。でも、もうわけはありません。跣足でも大丈夫で御座る……。』

『跣足ではたまらぬな、本當にないかな?』

『松明でもつけて搜せば、あるで御座らうけれど――?』

鎌田は路まで上つて來て、いくらか濡れた直垂下の袖を絞りながら、『殿は大丈夫で御座つたか?』

『この身は大事ない……。指貫が少し濡れたぐらゐなものぢや……。』

で、二人はまた歩き出した。此處等あたりも、雪は降るには降つたにしても、さう大して積らぬらし

く、畠の黒い土がところどころに見えてゐた。かれ等は官の華表のあるところへと来て、丘の裾をぐるりと廻つて、用水のために湛えられてあるらしい小さな池の縁をたどるやうにして向うに行つた。

灯がチラ／＼と見え出して来た。それは始めは曉の星のやうであつたが、田圃をひとつ越した頃から、低くはあるが黒い檜皮葺の屋根などがそこに此處に重なるやうに見え出して——雪明りの中に割合にはつきりと見え出して、築土の崩れから、入口の扉から、またはところ／＼の窓から灯の明るく洩れて來てゐるのをかれ等は眼にした。かれ等はそこに、明るい結び燈臺の下に、女が拍子を取つて唄つたり踊つたりしてゐるさまを、または女が酔つて男の膝に凭れてその黒髪を亂してゐるさまを、帳臺の中央まで銚子を持つて行つて男女の戯れてゐたりするさまをはつきりと描き出して見ることが出來た。亥の刻も少し下つてはゐるが、しかもかうした色街に取つては、決して遅い時刻ではなかつた。その時分からでも、街道をぞめて此方に入り込んで來る客はいくらもあつた。

かれ等二人はやがてその身を家屋と築土との間に見出した。そこからずうと曲つて行く狭い通りの中に見出した。離れがあつたり築土があつたり入口の低い扉があつたりする路の上に見出した。否、ある離れの戸の隙からは、灯が微かに洩れて、何か樂しげに男女の戯れて笑つてゐる聲の洩れて來るのを耳にした。やがてかれ等は此處では一番長者らしく築土を大きく取廻した邸の裏門のやうなところに来て立留つた。

鎌田は一二間先に歩いて行つたが、ちよつと門を押して見て、すぐそこから引返して來た。

『閉つてゐる？』

『えゝ。』

それではと言つて、今度はその長く取廻した築土を此方に少し引返して、その通りを更に細い徑へと入つて行つた。今度は義朝の方が先に立つた。少し行くと、小さな門があつて、そこにぐりがある。

義朝はそれを押して見た。矢張鍵がかゝつてゐた。

しかしかれ等は失望しなかつた。家人の住まつてゐるところがそこから近いのをかれ等はよく知つてゐた。鎌田はそのくゞりの戸を軽く二つ三つ叩いた。

鎌田の叩く手には次第に力が入つて行つてゐた。

『誰もゐないらしいか？』

『いや——灯は見えるので御座るけれども、何うしたのか？』

『もう少し大きう叩いて見よ？』

『でも、餘り大きうは——？』

鎌田は猶ほ叩いた。

突然、灯も何も動いては來ずに、闇の中に人の來た氣勢がした。

『誰だ——』

かう内から男の聲がした。

『明けろ、そつと明けろ！ 明ければわかる？』

『誰だか？ お名乗めされ？』

『お、そなたは早太ではないか？』

内でも驚いたらしく、

『それでは……もしや……京からお出なすつたのでは？』

『さうぢや、さうぢや、殿ぢや——』

門のくゞりを明けるより先に、その男の慌て、奥に入つて行く氣勢がした。早太は驚いたらしかつた。

『愚かな奴だ……。先きに内に知らせに参りよつた……』

『早太か？』

『さうで御座る……』

『あれはしかし正直者ぢや。昔からる僕ぢやで、あれならば安心して居られる！』

鎌田は何か言はうとしたが、そのまゝ黙つた。かれは空を仰いだ。そこには星が一つ二つかゞやいて光つてゐた。

『お！ もはや晴れた。意地のわるいもので御座るな？』

『本當ぢやな？ あそこで雪に逢ひさへせねば、このやうな惨めな眼を見ずとも好かつたものを！』

やがて中庭を此方へとやつて来る人の氣勢がして、鍵をガチャガチャやつてゐる音が、くゞりが明くと同時に灯があたりを明るくして、松明を持つた早太を先に大炊が慌たゞしけにそこに顔を出した。

『殿とな？』

大炊はあたりを見廻した。

鎌田は近寄つて行つた。大炊はそれに眼をとめて、

『お！ 鎌田どの！ さては、まことであつたか？ 殿は？』

『大炊！ 久しかつたな？』

義朝は近寄つて行つた。

『まア、殿！ まことで御座つたな？ 何うなされたかと思つて、何のやうに案じましたことやら？』

今も今、そのお噂を申して居つたところで御座りました……『氣をかねるやうにあたりを見廻したが、何となく慌たゞしけに、小聲で鎌田に向つて、『もう少し前にも、沙汰人が來よつてな？』

『沙汰人が？』

鎌田も義朝もぎくりとした。

『そのため、一層いろ／＼のことが案じられてな……。それでも鎌田どの、よう殿を伴れて来て下された。まア、そんなことよりか何んなにかお疲れで御座つたらうに——。いかに沙汰人がまるつたとは申せ、大炊の家は大炊のもの、殿に心配をかけさせは致さぬほどに……。さア、こちらへ——？』
かう言つて大炊が先に立つた。早太は内に入ると、そのまゝ元のやうにしつかりとくゞりの鍵をかけた。

鎌田は大炊と竝んで歩きながら、

『そのやうに早く、此方までも知れたので御座るか？』

『鎌田どの、それは案ずるには及ばぬ！　しかし、いろ／＼な噂でな？　殿は討死なされたといふ噂でな？　始めの中はこの身も延壽も何のやうに案じたか？』かう言つたが後を振返つて、『早太、こら、灯を先へ持つて参らぬか？』早太は後から急いでやつて来て松明を振翳して先に立つた。

一方にちよつとした中庭が見え、松が見え、池水の光つたのが見え、奥に灯のついた入口が見えて、そこに近づいて行つた時には、半身は此方に見せて柔かな黒髪の上に灯の餘光を波立たせつゝ今年二十七になる延壽がわく／＼してそこに立つてゐるのが見えた。

『まア、まア、大變で御座りましたな……。その代り此處に來た以上、もう案じることは御座りませぬ。』

かう大炊は言つたが、『こら、誰ぞるぬか、誰ぞすゝぎを持つて來ぬか？』

延壽は入口にその全身をあらはした。何方かと言へば瘦削であつたが、そのすらりとした背の高い姿は、常磐の肥えて豊頬なのに比して、また違つた美しさを持つてゐた。早太の翳した松明の灯が、その白い顔を、髪を、肌をくつきりとあたりに見せた。

『まア、殿！　何うしたらよろしいで御座りませう？』

延壽は唯かう言つたゞけであつた。かの女は唯わく／＼した。

『まア、それでも此處まで來た！　やつと來た！』

縁の上にとつかと腰を下しながら義朝は言つた。

『本當にやつと來ました！　えらい雪で御座つた——』

鎌田は大炊と延壽の方を向いて、

『まア、ゆつくりあとで話しますが、それはえらいことで御座つた。よくかうして無事に此處まで來たと思はれるくらゐぢや……。それに雪さへ降らねばよかつたのに、えらい雪で馬も物の具も捨てねばならぬやうな始末でな——』

『馬も物の具も……』

『此方に来れば、さうひどくはないのぢやけれど、あの伊吹の山の中は、それはえらい雪で、一寸先

も見えぬくらの吹雪で……。そのため佐殿は行方がわからなくなれましてな？」

『佐殿が……。それは、まア……。しかしあとからお出ではなりません？』

『それが何うだかわからぬぢや。山の中で凍えて死んだらうと思ふのぢや。』絶望したやうな調子で義朝は言つた。

『其様な事は御座りませう。』

『いや——それは望まれぬことぢや。』

『この身も、あとからお出でになると思ふので御座りませう……。』

傍から鎌田が言ふと、

『いや、駄目ぢや——』

かう言つた義朝は急に感傷的になつて、『大炊どの——こんな風になつてお目にかゝらうとは思はぢやつたな？』

『まア、殿が？』

大炊は笑つて手で押へるやうにした。

『大炊どの、何も言はずに堪へて呉れ。かういふことになるとは思はぢやつた。これも故殿の酬いぢや。』

『まア、そのやうなことは、あとでゆつくり伺ひまするほどに……。』大炊はまた手で押へて、『それよりも早う御足を——。こら、何うしたか？ すゞきを早う持つて來ぬか？』

奥から慌て、一人の婢が桶に湯を入れて持つて來た。と、一人の方の婢は入口のところに盥を出して、それをそのまま、受取つてザアとそこにあげた。湯氣が白くあたりに漲つた。

『さア、殿！』

延壽が近寄つて、行藤を取らうとするのを、さうはさせまいとして二人の婢が右と左とから義朝に取つくやうにした。

『殿には、この身が——この身がするほどに、そちたちは鎌田殿の御足を……。』

さう言はれて、婢達はそのまゝ、鎌田の方へ行つた。延壽は義朝の傍に身を寄せて、その泥に塗れた行藤を取りに懸つた。

三三

いつも通る室ではなしに、大炊達の平生居間にしてゐる北の方の室へと請ぜられて、始めて呼吸がつかれたやうな心持になつたが、しかも大炊の話の細かに聞いている中に、その置かれてゐる位置の決して安全でないといふことが次第に痛切にかれ等にもわかつて來た。『ですから、何んなに案じてゐるか知れ

はしませぬ……。今日はもう気が氣でなく一日暮したので御座ります……。』かう大炊は小聲で言つた。

その話すところに由れば、京の合戦の模様の知れて来たのは、今日の巳の刻の頃で、その時、大炊は居間で年の暮の金の勘定をしてゐた。そこに弟の鷲栖玄光がやつて来た。そして、『姉上！ 大事ぢや』と言つた。平生から姉をおどかすことを面白がつてゐる弟のことだから、また、何かつまらぬことを大袈裟に言つてゐるのだと思つて、相手にせずを爲かけた用事をしてゐると、『姉上、本當に大事で御座るぞ！ 源氏が平家に打負かされて、殿は御討死かも知れぬ！』かう言ふので、たちまち大騒ぎになつて、かの女も延壽もそれからは殆ど物事が手につかなくなつたといふことであつた。そればかりではなかつた。町ではもし義朝が生きてゐるなら、源氏に縁故のあるこの大炊の宿に屹度落ちて来るに相違ないと睨んでゐるらしく、沙汰人達が度々やつて来ていろいろなことを調べて行つたといふことであつた。否、府中からも、平家方の人達がこの町にこつそり入り込んで来てゐるといふ事であつた。『よく誰にもとがめられずにお出になられた……。？ それといふのも、裏から來られたし、夜だから、好かつたのぢや……。』かういふ風に大炊は言つた。

それにしても、大夫進や源太達は何うしたらう？ 次第に義朝にはさつき別れた人達のことか心配になつて来た。

『まぢがひはあるまいな？』

『大丈夫で御座りませう？ 源太どのがついて居られるほどに——』

『でも……。』

『それではちよつとこの身が見て参りませうか？』

『滅多なことをして、却てあやしまれるやうなことがあつてはなりません。この身の方から見せにやりませうか？』大炊も鎌田の立つて行つたあとを追つて向うの方へ行つた。

『まア殿！』延壽は義朝のすぐ前のところに來て坐つて、『何んなに心配致しましたらう？ もはや討死でもなすつてゐたらと思つて、食事も喉には通らぬほどで御座りました——』

義朝は明るく美しい顔と白い肌と房々した髪となつかしい呼吸をそのすぐ前に感じながら、しかも暗い佗しい心持から脱却して來ることが出来なかつた。

延壽にしても、いろいろなことが胸の先まで込み上げて來てゐるのであつたけれども、しかもその重つて集つて來る思ひを、さまざまな思ひを、何う話し出して好いかわからないといふやうに、半ば低頭き、半ば義朝の方に斜に視線を送りつゝ、しかも悟かしさうに體を揺かして黙つてゐた。義朝は微かに溜息をついた。

と、延壽はじつとその横顔を見詰めるやうにした。

室の隅にある方の結び燈臺の灯が、隙間から洩れて入つて來る夜風にチラ／＼と揺いた。

『夜叉は何うした?』

だしぬけに義朝は言つた。

『もはや休みましたが、起して參じませうか?』

『いや、それには及ばぬ。折角休んだ者を起すには及ばぬ。明日もあるほどに——』かう義朝は言つたが、また暫し押黙つて、辛うじて言ひ得たといふやうに、『もはやそなたにかうして逢へようとは思はぢやつた……。かうして逢ひ得ただけでも、この身は満足ぢや。』

延壽は喜ばしげに顔を上げて、かうしてお目に懸れて、何んなに嬉しいか知れないと言つた。十に八九は御討死と思はねばならないといふ此處等あたりの噂に何れほど嘆いたか知れないと言つた。常磐どのは何うなされたか、今頃は敵の手に生捕れて憂目を見てゐるゝであらうと思ふとも言はれない氣がしたと言つた。延壽は義朝の顔を眺めながら、さもくその辛さと悲しさを思ひやるやうに靜かに小聲で話した。

義朝はまた義朝で、その眉を、その髪を、その美しい笑顔を、その白い肌を眼にしたいがために——否、さうはつきりと感じてゐたわけではないが、兎に角それに引寄せられるやうにして此處までやつて來たことを頭に繰返した。六條河原で馬の首を北に向ける時にも、大原路をすつと奥深く落ちて來る時にも、千束がけで山徒に道を塞がれた時にも、底の方に谷川の鳴つてゐるさびしい山村を驅けて通る時にも、堅田で伯父義隆の首を湖水に沈める時にも、夜深く守山の宿を通る時にも、伊吹の麓で恐ろしい吹雪に逢つた時にも、頼朝を見失つて、絶望して自ら刃を肌當てしようとした時にも、いつもこの延壽の面影がはつきりと頭に浮んで來たことを繰返した。そなたに逢ひたいばかりにこゝまで生き延びて落ちて來た——義朝はさうは言はなかつたけれども、しかもさうした心持で胸が一杯になつた。

暫らくしてから義朝は訊いた。

『大炊はこの身のことをわるう言うて居つたぢやらうな?』

と、延壽は耳を疑うやうに、

『何うして、御座ります?』

『でも、わるう言うて居つたらう。保元の時のことを言うて居つたらう?』

『いゝえ、そんなことは少しも……』

延壽は眞面目に、まともに義朝の顔を見るやうにして答へた。

『父親や同胞を斬つた酬いぢやと言うては居らぢやつたか?』

『何うして、そのやうなことをお訊きなさります? 母はそのやうな母では御座りませぬ。殿のおん

身に萬一のことかなければ好いと申して、何れほど案じてゐたかわかりませぬ。』

『でも、碓伯母のことや、乙若や、龜若のことを申して居つたらう?』

『殿！ そのやうなことは申して居らぬと申しますのに……。何うしてさういふことをお訊きになります。砧伯母のことは悲しんではをりますけれど、もはやそれは過ぎ去つたことでは御座りませぬか。母は殿をそのやうに思つては居りませぬ……』

『でも、いろいろなことを思つて居るぢやらう。あの時、この身が院方にまるつたら、源氏がこんなことにならなかつた！』と思つてゐるぢやらう。『義朝は急に赫としたやうに、『何も彼もこの身の失敗ぢや。この身の不運ぢや。親や同胞の罰が當つたのぢや。』

義朝はじつと一ところを見詰めたまゝ、齒を食ひしぼるやうにしたが、その次の瞬間には、半ば起した身を元のやうにして、『しかし、これも皆なこの身がわるいのぢや。平家に欺かれたのぢや——』延壽がそこに坐つてゐるのも眼に入らぬやうに、ひとり言のやうに言つて右の手を頬に當てた。眼には涙がたまつた。

延壽の眼には、いつもと違つて真面目な、暗い顔をした、さうかと思ふと、焦燥とぢき怒りつほくなつてゐる義朝、一年前に逢つた時とは丸で別な人かと思はれるほどそれほどわるくやつれて、しかも瘤の高くなつてゐる義朝、否、時には深い考へに沈むやうにじつと頭を傾けたり、また時にはつとめてその深い淵から浮び上つたやうに頭を擡げて昂然とするやうな義朝が映つた。今でも悲憤の涙が新しく全身に漲つて來るらしいのが、傍に侍してゐるかの女にもよくわかつた。そこに婢達が行器や銚子を運ん

で來た。

いつもならば、酒を五六杯も參ると、好い機嫌になつて、唄の拍子を取るものを大勢呼んで騒いだりするのが例であつたが、今日は盃を重ねれば重ねるほど佗しい暗い悲しい心持になつて行くらしかつた。流石の延壽も何う慰めて好いかわからないやうな氣がした。

盃を持つたまゝ、義朝はいきなり頭を左右に強く振つた。

『何うかなさりましたか……？』

『いや……』

何かつゞけて言ふかと思つたのに、何も言はずにそのまゝ黙つて今度は深い溜息を義朝はついた。

突然、入口の方から人の入つて來る氣勢がした。義朝は半ば身を起した。

鎌田を先に佐渡と平賀とが入つて來た。

『お！ その身達か？ 誰ぢやと思つた！』

取上げた佩刀をそのまゝ、下に置いて、『何うした？ 何事もなかつたか？』

『別に變つたことも御座りませぬ。鎌田は義朝の前に來て坐つた。』

『大夫進も、源太も、皆な變りはないか？』

『別に咎め立てもせられなかつたさうで御座ります……。しかし注意は致さなければなりません。こ

のあたりでも、いろ／＼取沙汰いたして居るさうで御座りますから……』

『何う取沙汰をしてをるぢや?』

『殿の落ちられたといふことが、もう此處へは傳はつて參つてをります……。そして落ちられた方には、此處には必ず立寄らるゝと申して居るさうで御座ります……』

かれ等は顔を見合せた。此處には長居は出来ないといふ暗示が言ひ合せたやうにかれ等の頭を通つて行つた。

『源太も大夫進も此方にはやつて來ぬか?』

『非常に疲れて、向うで、足を濺いで上に上ると、もう歩くのがいやだなど、申されてをられました。もはや、今夜は殿には御目にかゝれないから、この身よりよろしう申してくれとのこと御座りました……。それに、大夫進どのは、疵が痛むなど、申してをられました!』

『わるいかな?』

『まだこの身は見も致しませぬが、大したことでも御座りますまい。』

義朝からさゝれた盃を受けて延壽に酌をして貰つて、

『いや、もう澤山!』

『それでも、鎌田どのは、よう殿を伴れて來てたまうた!』

顔に美しい愛嬌を漲らせるやうにして延壽は言つた。

『殿は! 殿は! 却々力が御座るでな……。引ッ張るのは容易では御座らぬ! これ御覽なされ!』

鎌田はかう言つて腕を捲つて見せた。右の腕が一ところ蚯蚓腫になつて赤く爛れてゐた。

『伊吹では、もう何うしようかと思ひましたぞ! 殿は何うあつても御自害なさると申すし、雪は降るし、寒さは寒し……。これは刀の鏑の先がギウ／＼當つたのでこんなになつたので御座る……』

『一通りの骨折ではなかつた——?』

『此處にお伴れ申すのには、それは延壽さまのお方もあつたでせうが、この身がもしるなかつたら、殿は何うなつたかわかりませぬな!』こんなことを言つて、鎌田は波々と酌をして貰つた盃の酒をぐつと飲み干した。

そこに大炊が三人の遊女を伴れて入つて來た。大炊の話では、若い曹司達は非常に勞れてゐて夕食を濟ますとそのまま、そこに倒れてぐつすり寝込んで了つたので、帳臺にお伴れ申すやうにあとのものに命じて來たといふことであつた。大炊はせめて義朝達を慰めたいと思つた。さう思ひ屈してばかりゐずに、元氣を振り起させて、もう一度再學を圖らせたいと思つた。かの女はつとめてその惨めな敗戦のことには觸れないやうに全く別なことの方に話を向けた。昔、鎌田の馴染んだことのある遊女の話なども後には持ち出した。

『もはやこの身は御免を蒙つて先きに寝ます——』
鎌田は立上つた。

『まア、好いぢやありませんか。昔の話だもの、何もそんなに氣にしなくとも……』大炊は笑ひながらそれを引留めた。

『いや、もう本當に眠い……。何しろ勞れたですから……。それに、もう今夜は遅いでせう？ 子の刻をとくに廻つて了つたで御座らう——』遊女達も一緒になつて頻りに引留めるので、爲方なしに鎌田は元のところに腰を下して、『殿も、もうおやすみになつてはいかゞで御座るか？ 殿もお勞れになつたでせうに？』

『まア、もう少しそこに居れ！』

義朝は莞爾しながら言つた。佐渡や平賀も此方に来て酒を飲んだ。

大炊が来てから、義朝はいくらか元氣がついて來たらしく見えた。いくら考へたつて爲方がない……。かうかれはその念頭に簇り集まつて來るさまざまの雜念を拂ひ捨てた。(まア、酒でも飲め!) こんな風に自暴自棄的にかれは思つた。傍にあつた大盃を取つて、それに波々と酒を満たさせた。

『殿! そのやうに召上つてよろしいのですか?』
後にはそこに侍してゐた延壽すらかう小聲に言つて氣を揉むやうになつた。

遊女達は拍子をそろへて唄をうたつたり、唄ひながら扇を取つて舞つたりした。あとからまた三人ほど遊女がやつて來た。

義朝は頻に盃を重ねた。否、酒でも飲まなければ、女にでも戯れなければ、この苦しさはとても忘れられないといふやうに見えた。かれは黙つてゐたけれども、黙つて聞いてゐたけれども、しかもその話を——右衛門督が六條河原で斬られたといふ話を歴々とその眼の前に見た。その身が現にそれを見てゐるかのやうに鮮かに、はつきりと。——かれは神經的に頭を左右に振つた。

慘めさがまた押寄せて來た。さうして飲み干さなければならぬ酒も、さうして舞はなければならぬ遊女も、またさうして黙つて坐つてゐなければならぬその身も、否、そこにある行器も、盃も、几帳も、何も彼も慘めに見えた。

『鎌田、もう疲れた! 休まう!』かう言つて義朝は立上つた。延壽があとから續いた。

三三三

義平は帳臺に入つたまゝ、すぐ高龕を立て、眠つて了つたけれども、朝長の方は、股の疵がわるく痛んで、ズキ／＼して、そのため體にも熱が出て來たやうに思はれて、ぐつすり寢込んで了ふことが出來なかつた。かれは何ぞと言つては眼を覺した。さつき裏の方で遊女達が手拍子をそろへて舞つてゐる時に

も、また遠く離れた町の街道に添った屋敷の方で、何か客が大きな聲を立て、喚いてゐる時にも、奥の酒宴が済んで、鎌田達が酔つた足取で、何か言ひながら小菰の傍を通つて行く時にも、いつも眼を覺して、寝返りを打つたり溜息をついたりしたが、それと雜り合つて、山の中に失はれた頼朝の凍えて死んでゐる姿が見え、その身がまだ幼い頃、よく抱いて暖かい懐の中に入れて呉れた母親の姿が見え、續いて、築土に身を凭らせて、髪を亂してしたゝかに泣いてゐる玉藻の姿が見えたが、その時には、悲しい今の現がはつきりとそこに繰返されて、不合せであつたお互ひの短い戀が繪卷でもあるやうに美しく楽しく展けられて見えた。そしてまたかれはうとくした。

鎌田は長い廊下を向うに行つたところに寝てゐるが、その室からも、その向うになつてゐる佐渡の室からも、女の笑ふ聲が微かに洩れて聞えて、をり／＼結び燈臺の灯が夜風に揺いた。大炊は平賀にも同じくさうした相手を伴はせたのであつたけれども、『イヤ、この身はそれどころではない……。眠い、眠い、もう眠りさへすれば好いのぢや。女子どころぢやない……。』かうかれは言つて、女が強い帳臺の中まで入つて來たにも拘らず、何も彼も頓着しないといふやうにしてすぐつすりと寝込んで了つた。金丸丸はさういふ人達とは離れて、何方かと言へば二人の曹司の室近くに寝てゐた。かれはぐつすりと一度眠つたが、ふと尿のつまつたのに眼が覺めて、何うしても堪へられないので、そのまゝ起きて、小菰の向うにある廁の方へへ行つた。その時は遊びに來てゐる客も皆なそれ／＼の慾望を満して眠つて了

つたらしく、あたりはしんとして、唯、隙間洩る夜風が灯の影をチラ／＼させるばかり、手洗水の置いてある小菰の間から見た夜空には、星影がキラ／＼と煌き、庭には雪が白くそれと敷かれてあるのをかれは眼にした。

用をすまして此方に来て、再びその帳臺の置いてある室に入らうとしたが、その時かれは曹司達の眠つてゐる室の方で、ふと微かなうめき聲を耳にした。かれは何うしたのかと思つた。寢惚けて何か言つてゐるのかとも思つた。かれは靜かにそつちへへ行つて見た。やがそれは大夫進の帳臺から洩れて來てゐるうめき聲であるといふことがわかつた。かれはそのまゝ、その傍に近寄つて行つた。

『何うかなさりましたか？』

『うむ——』

『何うかなさりましたか？』

『金丸丸か？ 何でもない——』

朝長は初めて悪夢からさめたやうにして言つた。

『疵が痛みますか？』

『少し痛むが——何でもない——今、この身は何か言うたか？』

『いゝえ、何にもお言ひにはなりませんねが——唸いてゐられた。』

『何うも、體があつうていかん？』

『困りますな？』

金王丸は帳臺の中まで顔をさし入れた。

『結び直して、水でひやしてさし上げませうか？』

『いや、それには及ばぬ——休んで呉れ！ この身も寝て居つたのぢや。明日になつてから、何うにでもするから？』

朝長がかう言ふので、金王丸は此方へと出て來た。かれは朝長とは仲好しで、此處まで來る間にも、絶えずその力になつてやつてゐるが、否、落伍せず此處まで來られたのは、半ば金王丸の力であると言つて好かつたが、藤壺の玉藻のことなどもいくらかは知つてゐるので、一層同情の念がかれの胸に湧き上つた。《疵が大事にならねばい、が——歩めぬやうにならねば好いが》こんなことを思ひながら、しかも何うすることも出來ずに、金王丸は再び自分の室の方へと戻つて來て寝た。

三四

この二人の曹司達の眠つてゐるところから小蔀に添つて、廊下を少し行くと、こんなところにと思はれるところに室があつて、そこに義朝と延壽とは寢てゐるのであつた。

義朝は表の室から此處へやつて來たが、始めの中は、矢張暗い佗しい顔をしてゐるが、急に思ひ返したといふやうに生々した態度になつた。尠くともこの室からは、あらゆるものが、あらゆる心勞が、あらゆる苦痛が、またあらゆる危難が一時全く遠ざけられて行かねばならなかつた。《何うでも好い、何うにでもなれ！ 何うせ一生は誰でも死ぬのだ、五十歩百歩だ。既に、昨日六條河原で死なうとしたのを、兎に角、此處まで生き延びて來たればこそ、かうしてかの女にも逢へたのだ。逢へただけでも優曇華が咲いたと思はねばならぬのだ。明日は何うなるかわからない。宿のものが大勢寄せて來るかも知れない。しかし、そんなことは何うでも好い。今夜だけは——今夜だけは》さう思ふと、義朝はせめて女の髪に、肌、唇にでも、その苦しい自暴自棄な心持を寄せて行かなければならぬやうな氣がした。

かれは京に置いて來た常磐の體をこの延壽に比べて考へて見た。それは無論、常磐の方が好いには相違なかつたけれども——あの常磐を京に置いて來たことを考へると、體中が赫とするやうな衝動を感じたけれども、しかも、この延壽の體にもかれは深い愛着を感じてゐないことはなかつた。靜かな眼、すらりとした後姿、房々した髪、さういふものが、かれの身を蔽つた時には、かれは疲れ切つたその體が更に深い深い谷に墜ちて行つたやうなを感じた。眼の前には黄い埃が舞つた。

今は千波姫の慘たらしい首も、雪の中に失はれた頼朝も、常磐に伴れられて大和へ行つたであらうと思はれる牛若や、今若のことも、その身が慘めな落武者であるといふことも、明日は何うなつて了ふか

わからない身であるといふことも、あの伊吹の雪の中で馬や物の具を捨てた時、惨めであつたといふことも、何も彼もかれの頭の中から消え去つて行くのを感じた。かれはをりをり深い女の溜息を耳にした。

暫らくしてから、かれ等はこんな話を取換した。

『朝餉の間に、殿もるらせられたのですか？』

『さう……』

『中宮さまのおつきの方達では、さぞ美しい方がお出で、御座りましたらう？』

『あゝいふところの女子は、下々のものとは違つて、美しいものぢやな……。髪が美しいものぢやな……』

『右衛門督といふお人は中宮さま……』

半ば言ひかけて延壽は止した。

『そんなことは出来ぬがな？　しかし、あの右衛門督も、一時でも、あゝした真似をしたから好いと言はねばならぬな？』

『殿は？』

かう訊いた延壽の言葉には、いくらか笑つたやうな調子が雜つてゐた。

『この身はそんな真似はせぬが、右衛門督のは、見てもゐられないくらゐぢやつた……。そして、その女房の中には、くれなるといふのがゐて、それが朝に晩に右衛門督の世話をしをつたが！　あの時から之はとても駄目ぢや。こんな男と事をひとつにしたのは、あやまりぢやつたと後悔した……。』考へて、『しかし。もう、あの男も斬られてもうこの世にはゐぬのぢや！』

『まア、そのやうなことは考へずに……。それよりも、殿は恙がなうて、源氏再興の旗をあげて下され！　その時は、この身のやうなものでも、京へ伴れて行つて、常磐どの、やうにして下され！』

延壽はかう言つて亂れた黒髪を義朝の胸に當てた。

三五

義朝は非常に疲れてゐたけれども、何うしてか容易に眠られなかつた。かれは女の髪と肌と白い顔と微かな呼吸とを傍に感じつゝ、絶えず寢返りを打つたり、溜息を吐いたり、天井にチラチラと映る結び燈臺の灯影をじつと見詰めたりなどした。そして、女の髪に何も彼も忘れて了つたさつきとは違つて、また種々な雑念や妄念が巴渦のやうに混亂して簇つて來るのを感じた。かれには今までの境涯が、張り詰めてばかりやつて來た境涯が、自分自身でも何が何だかわからなかつたやうな境涯が、繪卷でもひろけたやうに、またはいくつもの光景を一つ一つ重ねでもしたやうにはつきりと映つて見えた。そこにも

かれがる。あそこにもかれがる。女を弄んでるかれもれば、齒を喰ひ切るやうにして、骨肉同胞を斬つたかれもる。長い間平家を憎み通しに憎んで来たかれもれば、腹立しけに右衛門督を鞭で打つたかれもる。かれはまた溜息をついた。暗い暗い氣がした。

突然、その深夜の闇の空氣を破つて、何か人の喚く氣勢がした。かれははつとして耳を欬てた。それは自分の身の上に振りかゝつて来た何事かではないか。宿の沙汰人達がそれと知つて家の周圍を取巻いたのではないか。否、大炊がかうして落着かせて置いて、それとひそかに宿の沙汰人達に告げたのではないか。かれは半ば身を起した。

今は遠いけれどもその喚く聲は段々宿の方から此方の方へと近寄つて来るやうに思へた。

寢返りを打つたと思つた延壽が、すぐ起上つて、驚いたやうに、半寢ぼれた眼をこすつた。

『何うなすつた？ 何かあつたので御座いますか？』

『あの聲は何だ？』

義朝はそれを指すやうにした。延壽も眼を大きく見張つた。

『あの聲？』

『何かあれば、宿の沙汰人が大勢人を集めてるのでないか……』

延壽はじつと聞耳を立て、ゐるが、

『何でも御座りませぬ？ あれは酔うた人が騒いでるので御座ります……』

『さやうかな？』

『さうです……。たしかに、さうです？』

『いつもあのやうなことがあるのか？』

『酔うた客は、あゝやつて、夜中騒いでゐることがよく御座りますから！』それとわかつてやつと安心したといふやうに延壽はほつとして、『何うしたのかと思うた……。だつて、ひよいと眼を明くと、殿が怖い顔をして起きてゐるでは御座りませぬか。この身は何うしたのかと思うた？』

義朝はまだ安心がならないといふやうにして耳を欬てた。

『案ずることは御座りませぬ……。大丈夫、酔うた客！』延壽はもう一度聞耳を立てたがすぐ止して

『あれからずつと起きてお出で、御座りましたか？』

『何うも眠れないでな。』

『起きて——もう一度起きて、酒なりと獻じませうか？』

『酒は欲しくない？』

義朝はにつこりした。薄暗くはあるけれども、帳臺の中までさして來てゐる燈臺の光が、髪を亂してゐる女を限りなく美しく見せた。かれの心の底には、この世のものではないやうな、心も魂も全く爛れ

て了ふやうな歡樂と悲痛との光景が映つて通つて行つた。かれは女を堅く抱き擁めた。

三六

あくる朝と言つても、最早巳の刻に近い頃だつた。晴れて薄日がさしてゐるたけれども、まだ雪が降り足らなかつたといふやうに、山際はどんよりと曇つて、雪を載せた高い山々が、養老山脈の上に遠く連つてゐるのも、いつものやうにはつきりと見えてゐなかつた。

昨夜おそくまで酒宴を開いた室で、鎌田と大炊とは、火桶を前にして、頻に何か話してゐた。一行の中では、鎌田が一番先きに起きた。先づ朝の身じまひをして、ちよつと曹司達のゐる室を覗いて見て、何の變つた事のないのをたしかめて、それから義朝の室を覗いて見ようとしたが、殿は疲れてゐるだらうから、もう少しそつとして置く方が好いと思つて、そのまゝ靜かに此方へと出て來た。

大炊は婢達には命ぜずに、自分で朝の盃を運んで來た。

『早くお目覚めであれば好いと思つて待つて居つたぢや?』

『何うかしましたか?』

鎌田は眼を睜るやうにして言つた。

『何アに、何でも御座らぬが、何うなさるかと思つてな?』

『この身達が?』

『さう——』大炊はそつと顔を寄せて『何しろ、こゝは海道ぢやでな。昨日は、殿にはさうは言はずやつたが、とても長うは落着いてはゐられまいと思つてな?』

鎌田は點頭いて見せたが、『何かこの身達が此處に落ちて來たことがわかるといふやうな?』

『いや、それは、今はまだないがな? 宿には、平家のものも随分入つて來てゐるやうぢやで——』

大炊はかう言ひかけて鎌田の耳に口を寄せて、何かこそくと二言三語話した。

『ふむ?』

鎌田も首を傾けた。

『それが果してさうぢややら、何んぢややらわからぬけれども——いろく遊女にきいて居つたといふでな? 今夜、奥に客があつたらうとか何とか言つてをつたといふでな——?』

『侍かな? その客は?』

『商人に化てはゐるさうぢやけれども、どうしても侍ぢやとそこに出了た遊女が言つてゐた——』

大炊は言葉を途切らせて、少時考へるやうにして『そればかりではない。宿の沙汰人なども、頻に此方を疑ひの眼で眺めてゐる!』

『それはさうぢやらう?』

『何しろ源氏に縁故の深いこの大炊のやどぢやでな……』鎌田の前にある盃に酒を注いで、『それで、何ういふ風な話になつてゐるぢやな?』

鎌田は首を傾けて深い考へに沈んだ。

大炊は言つた。

『殿は熱田に行くつもりかも知れぬが、それは徒勞ぢや。とてもあそこには好う行かれはせぬ。それに、あそこでは、保元この方、殿に對して、あまりに好い心を持つては居らぬ……』

鎌田は點頭いて見せたが、『殿は、しかし、出来るなら、熱田にもちよつと寄つて、それから信濃の方に行きたい腹はあるらしい。しかしそれは何うも出来まいと思ふのだが、この身は今、知多の内海に行くが一番好いと思つてはゐるのだが——?』

『それが好いな——』

大炊は半ば考へるやうに言葉を長く引張るやうにして言つた。鎌田は續けた。

『殿にもそれと勸めては置いたが、まだはつきりときまつたわけでも御座らぬが——この身はそれより他、安全な道はないと思ふが、何うぢやらう? その時には、こゝから舟で下らうと思ふのだが、その舟はあるだらうか?』

『それはある!』

かう大炊は言つた。

『船はあつても、一緒に行つて呉れるものがなくては困るが、誰ぞあるまいか?』

『それはないことは御座るまいが、それよりも、川を下るとしても、途中に番所がありはしませぬか?』

『それはあるかも知れぬ——』

『何でも、途中に、船をあらためるところが出来たとか玄光が話してゐましたが——』大炊は考へて『しかしさうするより他には好い考へも御座るまいな?』

『何うもそれが一番好いやうだ——』鎌田は盃を口に當てながら、『驚栖はゐますか?』

『居ります……』

『驚栖は行つては呉れまいか?』

『それは行かぬことは御座りますまい。あれなら、あそこいらのことはよく知つてゐるし、萬事に都合が好いかも知れませぬ……。さうぢや、それは好いことを思ひついた。玄光に案内させるが好い……』

大炊は室の入口のところまで立つて行つたが、そこで婢を呼んで、驚栖の玄光が來てゐるなら、ちよつと來るやうにと命じて、其まゝ元のところへ引返して來て坐つた。

『それにしても、一緒に行くものは、成るだけ小勢にせねばならぬと思ひますが——?』

『それはさうとも……』

『今の同勢では、知多にわたるには、ちと多勢すぎると思ひますが——』

『それはさうだ。』

鎌田も考へて、『それは、殿もさう考へて居られること、思ひます。知多にわたるには、何うしても三人か四人でなければ眼に立つ……』

『それにしても、大夫進どの、疵は何うで御座るか？ 昨夜少し痛んだやうな話で御座つたが——』

『それは少しも存ぜぬ……。さつき、起きた時に、ちよつとのぞいて見たが、別にそのやうこともなく、よく眠つて居られたが？』

『あけ方に、あの金丸丸といふのが起きて来て、よべは痛んで困つたに由つて、少しひやして上げるのだと申して、水を取りに來られたが——あの疵は大事ないで御座らうか？』

『あれにも困ると思つて居るぢや——あの曹司ひとりぐらゐは、こゝで見續いで呉れることは出來ぬかしら？』

大炊は首を傾げるやうにした。

『困るかな——』

『ひとりぐらゐならば、何うかなるかも知れませぬけれども……何にせよ、それはえらう眼をつけら

れてゐるので御座るで——』

『困つたな——』

鎌田も腕を組んだ。

そこに大炊の弟の鷲栖の玄光が、袖を括つた狩衣に四布の指貫といふ姿で、長い刀をさして入つて來たが、そのまゝそこに來て坐つて、丁寧の色代した。鎌田もこの前一二度逢つて話をしたことなどあつて、互によく知り合つてゐるのである。

『久し振ぢやつたな——』

かう鎌田は言つた。

『もう少し此方に寄れや——。そちに頼みたいことが御座るさうぢやで——』大炊は玄光がすつと近く躰り寄つて來るのを待つて、『それもさうぢやが、何か事はなかつたか？』

『別に——』

さうは言つたものゝ、何處かに暗い影のひそんでゐるのを見て取つて、大炊は重ねて、

『何かあつたのか？』

『何うも沙汰人のところでは、殿の落ちて來られたのを知つてゐるらしい……』
玄光は少しく首を傾げるやうにした。

『何とか言つてるやつたか?』

大炊は訊いた。

『何とも言ひはしませぬけれど、この身が入つて行くと、わるく隠し立てをしたり、じろぐと顔を見たり何かする、何うも變で御座るな?』

『それは、そなたから何かさがし出さうとして、それでさういふことをするのではないか?』

『それもあるにはあると思ふが、何うもそればかりでは御座らぬやうぢや……』玄光は考へて、『昨夜、宿の方から入つて來た人達が、沙汰人に見られはせぬかと思ふのぢやが——?』

『そんな風が見えるかな?』

『それは、さう思はれたとて構はぬが、宿の者だけなら、たとへ殿が此處に來たことがすつかりわかつてゐても、手出しはさせぬが、唯、府中から平家のものが押し寄せて來はせぬかと思つて——』

『さうぢや、それが案じられるぢや。』大炊は言つた。

三人は暫く黙つた。鎌田は右の頬に手を當て、深く考へ込んだ。

『あ、さう言へば、そなたを呼んだのは他でもないが——』大炊は口を弟の耳の傍に持つて行つて、その話をして、『何うだらう? 舟はあるかな?』

『舟はある』

『しかし、舟番所を通れるかな?』

玄光は考へて、『舟番所は論なう固めて居るな? あそに平家のものが五六人ゐるでな? 旨く通れば通れないこともあるまいが、晝では少しむづかしい御座らうな?』

『夜ならば?』

鎌田は訊いた。

『夜なら、通れぬことも御座るまいとは思ふが……まごぐしてをれば、あやしまれるで御座らうな?』

『そなたにひとつ案内をして貰ひたいといはるゝのぢやが——?』

『知多へ?』

『本當に頼みにしてゐるのぢやが——』鎌田も傍から口を添へた。

『よろしう御座る——』玄光はやがて決心したといふやうにして、『大殿のおんためなら、何事も厭ひはしませぬ……。夜ならば、何うにか彼うにかまぎれて通りぬけて行けぬことも御座るまい……?』

『それは忝ない——早速頼みをきいて貰へて、これで心を安うした。その身に案内して貰へばそれこそ一番心が安いからな? 殿もそれときかれたなら、さぞ喜ばるゝことで御座らう……?』鎌田はその喜びのしるしにその傍にあつた盃を取つて玄光にさした。

大炊は酌をしながら、

『番所はひとつしかなかつたかね?』

『さうで御座るな……? 折戸をさへ越せば、あとはあつたにしても、何でもないと思ふけれども—』

『川を突當つて曲つたところに、何とかいふ番所があるといふではないか?』

『多度山のお宮にお参りに行く船附で御座らう? あそこは何でも御座るまい……』盃をぐつと呷つて、それを鎌田の方へと戻しながら、『兎に角、折戸の番所さへ通れば、あとは案じないが……』

『船頭は?』

『それはいくらもある。』

『それでは、話がきまつたら、そなたに頼むからね?』

『承知いたしました——』

そこに、奥から義朝が出て来た。あとから延壽が続いた。

鎌田と大炊が席を譲つて、義朝と延壽とが代つて竝んで坐つた。延壽は早く起きて、身じまひをしたと見えて、髪にも櫛の齒のあとが滑らかについてゐた。田舎にはめづらしい艶やかさで、眼のきれの長いのも、眉が刷毛で掃いたやうなもの、襟筋の長く白く延びてゐるのも、あたりに際立つて美しく見え

た。

玄光をすぐ眼に留めた義朝は、

『お! そこにゐるのは、鷲栖ではないか?』

『丁度、折よく参りました——』

大炊は言つた。玄光はそのまゝそこに平伏した。

鎌田は傍から川を下る話を持ち出して、都合に由つては、玄光に案内を頼まねばならぬことなどを言ふと、義朝は調子よくそれを受け取つて、

『それは御苦勞ぢやな?』

『殿はいつも御機嫌うるはしく拜しまして……』玄光は頭を擧げて、義朝の方を向いてかう言つたが、あとは言はずに、そのまゝに平伏した。

『さう叮嚀なことはいらぬ!』

義朝は心やすけに、かう手で持ち上げるやうにして、『それにしても何年目になるか? そちに逢つたのは、保元のすつと前ぢやでな? 忘れもしない、熱田から戻つて来る時に、あの街道でそちと一緒になつて、黒田から洲の俣を通つてこゝまで来たことがあつたが、あれきりぢやな。此頃は姉御のところに常に來てをるのかな?』

『いや、昨日此方にまゐりまして……？ 何かお役に立つ事でもあらばと存じまして……』

『や、さうだったか。それは難有かつた——。何かにつけてまた世話になることがあるぢやらう？』

『このやうなものでは御座るが、何か御役に立ちますれば——？』

そこに、婢達は二三人で大きな臺盤を運んで来て、それを義朝と鎌田の前に据ゑた。これから本當の酒宴にならうとするのであつた。婢達はあとからあとへと行器や高杯や銚子などをそこに持つて来た。

『一つ差さうか？』

義朝はかう言つて盃を取つてそれを玄光の方へと出した。

躍り寄つた玄光は、いかにも忝ないといふやうにしてそれを受取つたが、大炊が酌をしたのをぐつと飲み干して、そのまゝそれを義朝に返した。今度は延壽が銚子を取つた。

その時、奥の方から大勢の聲音がして、それに伴れられて、來年は十二になるといふ夜叉姫が綺麗に可愛ゆく粧はれて入つて来た。

『お！ 姫が——』かう言つて延壽は立つて行つた。

夜叉姫は母親に纏はるやうに、またはこはくしながら父親の方を見るといふやうに、頻りにきまりをわるがつてゐるが、大炊が立つて来て、無理に義朝の方へと伴れて行つた。

『殿！ 見てやつて下され！ こんなに大きくなりましたぞ！』

大炊の言ふまゝに、夜叉姫は丁寧に頭を下けた。

『お！ これは大きくなつた？ これも祖母御の骨折ぢやらう？』

『え、もう、この頃では母さまよりも祖母の方が好い言うて、毎夜抱かれて寝てゐるでな？』

義朝も流石に莞爾笑ひながら、すぐその傍に来て坐つた夜叉姫の頭を撫でたりなどした。延壽もやがてそこに來て坐つた。

不意に義朝の胸には、六條の館で首にして持つて來られた千波姫のことが思ひ出されて來た。かれは暗い暗い心持になつた。かれはそれを面にあらはさないために、つとめて盃を呷るやうにした。

其處に早太がやつて來て用事があるといふしるしを見せたので、玄光はそのまゝ急いで出て行つた。

義朝と延壽との間に坐つた夜叉姫は、何遍となく母の顔を眺めては、何か要求があるらしい態度を見せた。それは何か父親に訊いてくれといふのであつた。今朝から頼んで置いたのといふのであつた。後には母親の膝を指で突いたりした。

『姫は何うしたの？』

それを見兼ねたといふやうにして大炊は向うから口を挿んだ。

『何でもないのです……』延壽はわざとそれを打消すやうにして、此際、そんなことは訊かれないといふやうな態度を示してそれを押へた。

『でも——』

姫はまた指で突いた。

『何ぢやな?』

遂には義朝もかう言つた。

『何でもありは致しませぬ?』

『でも、何か訊きたがつてをるではないか? お土産か? お土産なら、今度は持つて来ぬほどに——』

—その代りに、この次ぎに来た時に、澤山に澤山に持つて来てやるほどに?』

『いゝえそんなことではないので御座ります……』

これは延壽だ。

『土産でもない? それでは何ぢや?』

『それでは申上げませうか……』延壽は漸くその氣になつたといふやうに、『殿! これを申上げては却てお心持わるうならせられはせぬかと案じられますけれど……姫があまりに申しますほどに……。それは、他では御座りませぬ、この姫は今朝目が覺めて、父上が御出になつたといふことを聞いた時から、佐殿のことを申してをるので御座ります。佐殿は何うしてお出でにならなかつたかつて?』

『あ、それを言つてゐるのか? 此姫は?』

大炊は半ば笑ひかけながら言つた。

『……?』義朝は何か言はうとしたが、しかも言はずに、そのまゝ夜叉姫の頭を撫でた。一座は暫し言ひ合せたやうに黙つて了つた。

夜叉姫は何か返事がありさうなものと思つてそれを待つた。しかし誰の口からもその答へは出て來なかつた。

『父上、佐殿は?』

遂に思ひ切つたといふやうにして姫は訊いた。

『……佐殿は……佐殿は少しおくれた。雪の中で……。しかし、おくれてもその中にはやつて來るぢやらう、』義朝は胸が一杯になつて來たらしく、そのまゝ言葉を留めたが、すぐ思ひ返して、『さうぢやな? 五年前に逢つたきりぢやのに、それでもよくおぼえてをつたぢやな?』

『この姫はな……?』かう大炊は笑ひながら、『平生でもそのことを申してをりました……。京に行けば、兄がある! その兄がもう立派な武士になつてゐる。いつ此處にお出でになるやら? ツて、口癖のやうに申してをりました……』

『よう待つてゐた。佐殿も喜んで御座らう? その中、來る。必ず來る——』

義朝は言つた。

『本當に、佐殿が？ 今日か？ 明日か？』姫は嬉しうに小躍した。義朝はまたその頭を撫でた。玄光が再び入つて来て、そのまゝ、づかづかと大炊の傍に行つた。そして何か一言二語その耳に囁くと、二人はそのまゝ、慌てたやうに向うの方へと出て行つた。義朝も延壽もそのあとを見送つた。

何事か起つたといふ豫感が鎌田にも義朝にも逸早く感じられた。鎌田は何う思つたか、『もはや午の刻は過ぎた。佐渡や、平賀を起して參らう？』と言つて出て行つたが、義朝には危険が既にその前に襲ひかゝつて來てゐるやうな慌たゞしさが感じられた。

三七

まだそれほど形勢が不穩になつたといふのではなかつたけれども、府中にゐる平家方の人達と宿の沙汰人達とが、義朝の落ちて來たのを知つて、何かしようとしてゐるのは確らしいので、かれ等は一刻も早く此處を落ちて行くのが一番安全だといふことになつた。

朝長も、金丸も出て來た。一行はさつきの室とは違つた奥の一室に集まつて、婢達を遠ざけて、額を鳩めて頻に相談した。

兎に角、一時此處で皆な別れ別れにならなければならなかつた。『何うも致し方がない。とてもこれでは、一緒に行かれない。かう詮議が難かしくは——』かう義朝は溜息を吐くやうにして言つた。

『それで、何うなさる？ 殿は？』

平賀が問うた。

『何うも致し方がない、この身は熱田に行きたいと思ふのなれど、こゝですら、かう詮議が厳しうては、とてもそこには行けさうにもない。止むを得ぬで、先づ鎌田の言ふやうに——』

『知多へ？』

平賀は引取つて言つた。しかしかれは首を傾げるやうにして、『あそこなら、あやまちはありませんまいがな？』

『あそこなら、海道からは遠く離れてはゐるし、田舎ではあるし、少しは落着くことも出来ると思ふが——』

『それはさうで御座るが——？』平賀は傍に鎌田がゐるのでいくらか躊躇して、『しかし、あの長田は、この身も一二度逢うてよく存じて居りますが、落人をかくまうやうな人で御座るか何うか？』

『それは案じない……』

かう鎌田は傍から言つた。

『それは鎌田殿がゐるから案ずることは御座るまいが。……いやさう申しては甚だ相すまぬが、あの長田親子は、金持で野心の多い人達で御座るで、唯、それが案じられますが——』

『それはこの身がついてゐるほどに心配は御座らぬ。』

『いや、殿すら、それを御承知ならば、何もこの身がさし出がましくお留め申すわけでも御座らぬ。』
平賀は義朝の決心の既に牢として抜くことが出来なくなつてゐるのを見て、『それでは、この身は此處でお別れ申して東國に下りまするほどに、またあちらにてお眼にかゝるか、さうでなければ、再び御上りなさるゝ時、またお供にまゐることには致しませう……。それにつけても、おん曹司達は？』

『お！ そのことぢや。そつちから先にきめてかゝらねばならぬぢや……。』義朝は朝長の方を見て、

『大夫進！ 何うちや、疵は？』

『痛むには痛みますれど、大事御座りませぬ？』

『昨夜はつよく痛んだといふことではなかつたか？』

『……痛むには痛みましたが——』朝長は何かつゞけて言はうとしたが、しかも父親の威を怖れたといふやうにして黙つて了つた。

『それでは、源太！』義朝は今度は義平の方を向いて、『源太は飛驒から信濃に行つて、あのあたりの源氏をあつめて、山道を攻め上るやうにいたすが好からう？』

『承りました。』

義平は元氣よく言つた。

『朝長は信濃から甲斐に入つて井澤、猪俣の勢を催して、富士を越して、車返しから駿河の方へと出てくるやうに致せ！ さすれば、この身は、おそくも來ん年の正月の内には海路を三河にわたつて、そこから鎌倉の方へと戻つて行つて、夏にならぬ中に、きつと上つて來るほどに、平家を平らけずには置かぬほどに——好いか、源太も大夫進もわかつたか？』

『承りました……。』

かう二人の曹司は頭を下けた。

『それでは、一刻も早う此處を立去る支度をするが好からう？ 金王丸はこの身萬事につけて不自由なれば、その世話をするためについて來よ。式部どのは……。式部どのは……。？』かう言ひかけて義朝はその言葉をとゞめた。

京に生立つた佐渡式部大輔重成は、義朝との多年の好誼を忘じかねて、艱難を凌いで、此處まではついて來たけれども、二人の御曹司達とすら別れ／＼になる今の時に際しては、何處までも義朝のあとについて行くといふわけにも行かなかつた。さうかと言つて、東國に下つて行つたにしても、その世話をして呉れるものもありさうには思へなかつた。平賀は何處までもその身と一緒に下りませ！ 決してあしうは致すまじと言つて呉れたけれども、さうかと言つて、無遠慮にそれについて行くわけに行かなかつた。

『式部どのは、平賀、見續いでやつて呉れ……』
かう義朝が言ふと、

『いや、この身はもう少し考へさせていたゞくことに致します……東國に下つてもよろしいけれども、妻や子も京に残してあることで御座れば、いつまでも遠く離れてゐるわけにもまゐりませぬ。一度は兎に角、様子を見に京にも上らねばなりませんから、こゝで時を待つことに致しませう?』

『でも、それは亂暴ぢや……。京に上るのは亂暴ぢや。捕はれに行くやうなものぢや。この身も一緒に伴れて行きたいは山々なれど、何にせよ、この詮議では? 一人でも減らさねばならぬ場合ぢや……まことに氣の毒だが、平賀について、一時東國に下つては呉れぬか?』

流石にひとり佐渡をのけ物にすることについては、義朝も一種の氣の毒さを感じずにはゐられなかつた。

『まア、そのやうに御案じ下されずとも、この身などは何うにでもなりますほどに……』佐渡は元氣よく笑つて、『それよりも御曹司達の出立を見送つて、頭の殿の出立を見送つて、それからのことに致すで御座らう?』

『本當に式部どには申譯が御座らぬ!』

『そんなことは御座りませぬ……』

佐渡は莞爾してゐた。

そこに、さつき支度をするために出て行つた二人の曹司は、徒歩の扮装を整へて入つて來た。烏帽子に刀、指貫を裾短に括つて、いかにも効々しい旅の姿をあたりに見せた。朝長は疵が痛むかして、少し足を引くやうにしてはゐるけれども、それとて大した障礙にはなりさうには見えなかつた。かれ等は一日、二日路の間は一緒に歩いて、飛驒と信濃のわかれ路まで行つて、そこから各自に志すところに向つて行くといふことであつた。

『それでは、行つて参じまするほどに、父上は御機嫌好う、東國にてまた御目もじ仕るまで、御無理なされぬやうに——』

『あ、もう行くか? 大夫進も大事ないか?』

出て行くあとからかう義朝は聲をかけた。

金王丸も、平賀も、鎌田もその出て行くところまで送つて行つた。

金王丸は流石に朝長と別れを惜しまずにはゐられなかつた。その疵のことも心配になつた。で、出口のところ、それとなく小聲で訊くと、『なアに、何うにかなるだらう? 痛いには痛いけれど……』かうつとめて平氣を粧ふやうにして言つた。

街道の方に出て行つては、見咎められる恐れがあるといふので、裏の出口——昨夜義朝達の入つて來

た裏の出口から小門をあけて、築土づたひに畠道の方へと二人の曹司は出て行つた。義朝は延壽や、大炊や、鎌田や、平賀達と俱にそこに来て見送つてゐるが、その姿の見えるたのもほんのわづかの間で、やがては築土の向うへと隠れて見えなくなつて了つた。あとは残つた雪のぬかり道に午後の薄日が微かにさしわたつてゐるばかりであつた。

『まア、お二人で——』

かう言つた延壽の眼からは涙がほろ／＼と落ちた。

三八

『何うした？』

鎌田が向うから戻つて來たのを見て義朝は心配さうに訊いた。

『式部が殿の身替りになるつもりで御座りませう？ ある民家から馬を引出して乗つて參りました。』

『それで群集は何うした？』

『本當に、殿！』と思つたと見えて、皆な向うの方へ式部や、平賀を追うて參りました。』

『もはや、宿のあたりには、大勢人は居らぬか？』

『居りませぬ……皆な向うに參りました。』

それは二人の曹司達が別を告げて出て行つてから一時とは經つてゐないほどのことであつた。かれ等は既に出發の準備に取りかゝつてゐた。かうした詮議の嚴しいところは一刻も早く立去らなければならぬと言つてゐた。平賀や、佐渡などは既に行膝を穿き藁沓をつけてゐた。そこへ早太が慌て、飛び込んで來た。大炊も顔の色を變へて入つて來た。宿の者どもが府中から來た平家の一類とひとつになつて左馬頭が落ちて來たのを現に見たといふので、大勢して此處に押寄せて來たといふのであつた。『さア、殿！ 此方に御出なされ』かう言つて、大炊は大騒ぎをして誰にも容易に入つて來られないやうな奥まつた一室へと義朝を伴れて行つた。耳を欬てゝゐると、成程群集はその近くにやつて來たらしく、入らうとするのを、さうはさせまいとして、喚いたり、叫んだりしてゐるのが手に取るやうにはつきりと聞えた。義朝の傍に侍してゐた延壽の顔の色も見る見る變つて、『何うしたら好いでせう？』と言つてわくわくしてゐた。

義朝にしても、心を轟かさずにはゐられなかつた。いよ／＼最後の時が來たかと思つた。しかし、何うせ死ぬのなら、あの伊吹の雪の中でひとり死ぬのよりはまだ増だとかれは思つた。『よし、その時は、潔よく、切り死をしてやらう。思ふ存分、相手に目にも見せて、そして最後に、この延壽を手にかけて、かへす刀で潔よく腹かき切つて失せてやらう！ 源氏の大將がその溺れてゐた女と一緒に死んだといふことを後の世まで残してやらう？』かう皮肉に思ひながら、刀を提げて時の迫つて來るのを今か今

かと待つた。今か——今か、と。ところが、何うしたことか、わツといふ聲がきこえたと思ふと、群集は一齊にそこから表の方へと出て行つた。

大炊が入つて來ての話では、丁度その時、そこに行跡を着け藁沓を穿いた佐渡と平賀がるたので——二人が慌て、宿の方へと出て行つたので、それを義朝と思つたと見えて、押し寄せて來た群集は、皆なそつちへと出て行つて了つたといふことであつた。『まア、それは好かつた——』延壽はほつとしたといふやうに溜息ついた。

『鎌田も一緒か?』

いくらか心配になるといふやうにして義朝は訊いた。

『鎌田どのは、一緒では御座らぬが——あとから様子を見ると言うて出て行かれました。』

しかしこのまゝでは濟むまい。群集は一時はさう思つたにしても、すぐさうでなかつたことを知つて、再び引かへして來るであらう。その時こそは、もはや遁れようとしても遁れることは出来ないであらう。とても式部や鎌田に欺かれて引込んで了ふやうな群集ではないだらう。こんなことを思ひながら、義朝もじつと耳を欬てゐた。

『これは事なうすみさうぢや? 好い鹽梅だ——』暫らくしたあとで大炊はかう言つて立上つた。

『案じない? 母上?』

延壽も母親のあとについて、小部を明けてあたりを眺めた。そこに鎌田がやつて來たのであつた。

『式部が馬を引出して飛乗つて行つたと言つたな?』

『さやうで御座ります……』

『金丸は?』

『澁谷はぢきそこになりました。宿の方へは参りませぬ……』

義朝はじつと考へてゐたが、

『それで、何うぢや……。式部がさうして一時まぎらして呉れた間に、この身達も落ちねばならぬのではないか! ぐずぐずして居れば、再び押寄せて來られるのではないか?』

それには鎌田もはつきりとは答へられなかつた。

『しかし、今すぐお出ましにはなりませんまい……。』大炊が傍から引取つて、『今すぐお出ましになるのは、猶ほ危なう御座りませう……。先づ一刻、こゝにぢつとしてお出でなさいませ。その中、玄光もまゐりませうから——』

『さうなさいませ! 滅多なことをなさいませな!』わく／＼しながら傍から延壽も言つた。

大炊は猶聞立耳をしてゐるが、今度は別の入口の方へと行つて、あたりのさまを眺めた。しかしそこからは何の物音もきこえては來なかつた。

『大事ならしい……』いくらか心を安んじたといふやうにして大炊は元の席に来て坐つた。

『それにしては不思議なことぢやな?』

『本當で御座ります。これも正八幡の御稜威でがな御座りませう?』

延壽は合せた。

『本當にさうぢや。神の力でもなうては、とても、このやうなことはあるまい。』義朝は延壽の方を見て、『それでも好いことをした。先に源太や大夫進達を出してやつて! もう餘程参つたぢやらう?』

『本當にさやうで御座りました……。御曹司達がまだお出でになれば、一層御心痛をなさらねばなりません。』

『あれ達さへ無事でをれば、この身はたとへ失ても源氏を興すのには事を缺かぬでな……?』

言葉とは違つて、さう言つた義朝の調子は輕かつた。

『殿!』

延壽は笑つた。(源氏は興るのに差支は御座るまいが、殿にもしものことがあつては、この身は、この延壽は——?) さうは口に出しては言はなかつたけれども、さうした氣分がその艶やかな笑ひの中にはつきりと出てゐた。義朝もいくらか寛いだやうにして笑つた。

『鎌田——』

義朝は暫らくしてから、かう呼びかけて、『それで、何う致す? 今夜まで待つか?』

『何うしても、さういふことになるかと存じます……。それにしても驚栖はまだ戻つて來ぬかな?』

一切、あれに任せておきましたか?』

鎌田は立つて向うの方へと行つて、小藪のところから戸外を眺めた。大炊も立つて行つた。未の刻過ぎの静けさが一しきりあたりを領した。何處か遠くで雞犬の聲がのどかにきこえた。

『あ……』

そこに立つてじつと戸外を見てゐた鎌田は、かう言つて、そのまゝ此方へと入つて來た。

『何うした?』

『驚栖がやつて参りました。』

『あ、來たか?』

義朝も始めて安堵したといふやうな調子で言つた。

やがて入口の方から、歪んだ烏帽子に大刀を帶し、指貫の裾を高く括つた驚栖玄光の丈の高い大きな姿がつかゞ入つて來た。かれはいきなり義朝の前に平伏した。

『大殿! 式部どのは大殿に代つてあつぱれ潔よく討死をなされました!』

『討死?』

義朝も鎌田もそれと聞いて流石に身を乗り出さずにはゐられなかつた。

『そしてそれは何處でぢや?』

『あの式部殿は、初めから大殿の身代りになられる覺悟がちゃんときまつてゐられたので御座る! 宿を出ると——』かう言つて玄光は言葉を留めて、『いや、宿まで出るのだつて、大變で御座つた。意氣地のない宿の沙汰人どもは、あれが左馬頭ぢや、左馬頭ぢやと言つて、あとをついて行くには行くが、滅多に手出をしては、音にきこえた大剛のものゆゑ、いかなる眼に逢ふやもわからないと、誰一人打手に向つて出るものもない。それでゐて、それ逃すな、逃すなと申して、二三間あとからぞろぞろついて行くばかりでは御座らぬか? 臆病ものどものやることは見て居られませぬな?』

『平賀も一緒か?』

今度は義朝が訊いた。

『平賀どのも俱に御座りました。式部どのは、宿を出てしまつて、少し行つた所に、そら姉上と——』大炊の方を見て、『あそこに、右側に、一軒、貧しい百姓の家が御座りましたらうが?』

『平太の家か?』

『さうく、平太と申しましたな。額に大きな瘤のある爺のゐる? あの家の前に来て、そこに既に馬のゐるのを見て、式部どののは急いでそこに入つて行かれて、それを借りると言つて、すぐ引出して乗

られました——』

『あとからついて行つた大勢はそれを見てゐたのか?』

鎌田は訊いた。

『見てゐました。黙つて見てゐました。意氣地のないものどもでは御座りませぬか。それに、平賀どのに對しては、初めから雑卒と思つて眼を呉れてをりませんので、そこに立つて見てゐるのも、いや、そこに傍道のおつたのを幸ひにすんぐ向うに行つて了ふのも知らずに見て居りました。すると、式部どののは、初めからその覺悟であつたので御座りませう? 馬に跨るや否、大音聲で、この身こそは、源家の大将左馬頭兼播磨守源義朝ぢや、時運非にして、今が最期の時となつた。われと思はんものは、寄つて来て打取れ! と大刀を抜いて呼はれました。……』

『ふむ——』

義朝はさも感嘆したといふやうな調子で言つた。

『しかし、皆なおそれをなして誰一人それに出合ふものは御座りませぬ。唯、わいぐ騒いでゐるばかりで御座りました——』

『それで?』

『あの長い路を、ずつと赤坂の方近くまで參りました。しかも何うにもならないので御座ります。勿

論、子安の森まで参る中には、遠矢にかけようとするものも御座りましたが、出来るならば、生捕りにしたいなど、申すものもありましたし、また中には、あの勇ましい大將を遠矢にかけるは、あまりに武士の法を知らないものだなど、申して、たうとう子安の森まで参りましたが、さういつまでもあとのみつけては居られませぬので、平家のもの達が先に立つて、刀を抜きつれて向つて行きました。式部どのは、今を最期と縦横に蹴散らし、斬散らし、大勢でも容易にそれに打勝つことが出来ませぬでしたが、遂には手疵を負はれたと見え、横面から血が流れて、惨めなさまとなられましたので……それで覺悟を致されたと見え、馬から下りて、刀を杖つきながら、再び大音響で、左馬頭義朝運拙くて、今が最期なるぞ。よく見置きて、後の世の物語にせよ。わが手にかけてたりなど、申して争ふなと言うて、大殿の身代りであるのがわからぬやうに、先づ面の皮を削られ、それから腹を十文字に掻き切つて失せられました。それを見た時には、流石は源氏の大將の最期ぢやと申して、誰も感じ合はぬものは御座りませぬでした……』

義朝は萬感胸に迫るといふやうにして頭を振つた。

『可哀相なことをした——』

暫らくしてから義朝は言つた。

鎌田もじつと深く感慨に沈んでゐるが、やがて玄光の方を向いて、

『それで、何うした？ 沙汰人達はそれを、本當にしてもどつて行つたのか？』

『さやうで御座る——』玄光は得々して、『式部どの、思ひ通りに、てつきり大殿と申して、その首を持つて宿の方へ戻つて参つたので御座る。いや、さつき、そこで様子をき、ますと、これからすぐに府中まで持つて参つて、今夜にも京に上せて恩賞に預かると言うて騒いでをりました。愚かなものどもでは御座りませぬか。』

かう言つて玄光は大きく笑つた。

『それでも、府中に参れば、殿を見知つてをるものが御座りはせぬか——？』

『いや、それは案じないことで御座る。それがしが見て居つたところでは、式部どのは、誰が誰だかわからぬやうに全く面の皮を削られました。少しぐらゐる大殿を存じて居るものが首實驗をしたところで、決して見あらはされることは御座りませぬ。それはたしかで御座る。あやしいと思ふものはあつても、それをさうでないときめるものはないにきまつてをります……。それに宿の沙汰人たちは、たしかにそれだと思つて安心してをりますから、案ずることは御座りませぬ……。本當に弓矢神の助で御座る——』

『式部どには氣の毒であつたが、殿には——』

延壽も初めて胸を撫で下すやうにした。

『それで、平賀は何うした?』

義朝は思ひ出したやうにして訊ねた。

『平賀どのは? さて何うなされましたか? それにまぎれて、少しも存じ居りませぬ……?』

『式部がその厩から馬を引出した時に傍道にそれで行つたと申したが、それきりあとは知らぬと言ふのか?』

『さやうで御座ります……』

義朝は鎌田と眼を見合せたが、『まさかに平賀はそのまゝ東國に下りはすまいがな? 何うしをつたか?』

『その中、歸つて參るで御座りませう。あのまゝ東國に下るやうなことは御座りますまい。』鎌田はかう言つたが、再び玄光の方を向いて『それで出發の都合は何うなつたか? 夜になつてから、こつそり此處を立つ方が好いと思ふが——』

『その方が宜しう御座りませう……』

玄光は少し考へて、『しかし、赤坂からでは目に立ちますゆゑ、これから、南に一里半ほど下つたところに靜里と申す舟附が御座りまするほどに、その下のところに船の用意を致させておきませう? いづれこの身がお迎ひには參じまするが……』

『亥の刻ごろか?』

『それより少し前でも宜しう御座りませう?』玄光は立上つて、『それでは、その用意を?』

『いや、待て? 舟の用意はまだ早い……。一献差さう——こら女ども、酒を持つて來ぬか?』

かう義朝に言はれて、大炊も延壽も立つて行つた。何もくよくよと思つて見たところで爲方がない……。今日も幸ひに危ないところをのがれた——これで舟に乗りさへすれば、あとはその途中舟番所があるばかりで、知多まではわけはない。そしてそこに行き着きさへすれば、物の具や馬を借りるにしてもわけはない。これは何うやら、無事に東國まで落ちて行けさうだ。『鎌田、これからひとつ元氣をつけようではないか……』かう言つて義朝は膝を乗り出した。

やがて臺盤が婢達の手によつて運ばれて、行器や銚子や高杯などがその上に竝んだ。遊女達もやがよぞろよやつて來た。酒宴は始まつた。

三九

二人の曹司は海道を通らずに、そのまゝ川を渡つて、神戸から北方の方へと出て行つた。朝長も始めは元氣で、何うかと思つて心配した義平すら、『歩けるぢやないか? 案ずることはないぢやないか?』と言つてゐるが、それもほんの僅の間で、神戸から美江寺へ行く途中で、最早痛くつてとても歩けない

といふことになつた。朝長は路傍の草の上へべつたりと腰を下して了つた。

『何れ見せろ！』

戻つて来た義平はかう言つて、指貫の括りの紐を解いたが、『うむ！ これはひどい！』かう思はず言つて顔をしかめた。右の股のあたりが一面に太く腫れて、矢を抜いたあとが石榴のやうになつて赤く爛れてゐる。熱も夥しく出てゐるらしく、顔の色なども悪く赤くなつてゐた。

『此處等も痛むか？』

そつと義平が疵の處から餘程離れてゐるあたりを押して見たのにも『あゝ痛い！』と叫んで朝長は飛上るやうにした。度々張つた膏藥などは何の役にも立たないらしかつた。

『因つたな！』

かう義平が言ふと、

『源太どの、かうやつて放つて置いて行つて下され！ この身は何うなつても構はぬほどに——。かうしてまご／＼してゐるところに、沙汰人でも通りかゝるとこの身ばかりではない、源太どのまで敵の手に捕へられるやうなことになるから……』

『それでは、こゝから青墓へ戻つて行きやれ！』

『この身は何うなりともするほどに、源太どの、行くところへ行つて下され……。さうでない、と、

父上に申譯がない——』

『でも、そちを此處に一人放つて置くわけには參らぬ。一體それでは何うするつもりぢや——？』

『……？』

朝長は悲しくなつて来たといふやうに、低頭して額に手を當てた。

『何うもやむを得んぢやで……。残念ぢやが、青墓へ戻れ！ あそこへ戻れば、大炊たちが何うにかして隠まつて置いて呉れる。そして、少しして、ゆつくり出て来い……。それが好い、それが好い。さうきまれば此處から青墓までは、いくらも來てるぬで、この身が送つて行かなくとも、ひとりで戻れやう？』

『……？』

朝長は益々悲しくなつて来たといふやうに、おい／＼聲を擧げて泣き出した。

『な？ さうしろ？ それより他に、しやうがないから……。』義平はもう一度疵口を見て、『これは痛い……。とてもこれで歩いて長い旅などは出來ん。歩けば歩くほどわるくなる……。一體無理をしたからな……。な、さうする方が好い？ な、大夫進！ わかつたか？』

朝長は容易にその泣くのをやめなかつた。

元のやうに疵口を布で巻いて、強いて立たせて、指貫を穿かせて、その紐を括つてやつて、『それで

は、この身が送つて行つてやらうか？」

朝長は頭を左右に振つた。

『それぢや、ひとりで戻れるか？ うむ？ こら？ 大夫進？』

『戻れる……』朝長はかう微かに言つたけれども、もうどうしても行かれぬ！ これから先きには一歩も行かれぬ！ と思ふと、これまで堪へに堪へて来た艱難が、苦痛が、辛勞が、堰を破つた瀧津瀬のやうに漲つて来て、體も、魂も、何も彼も、このまゝ押し流されて了ひさうにかれには思はれた。かれは顔を兩手に當て、泣きつゝけた。

『うむ？ こら？ さうするか？ さうするなら、安心して此處から別れて行くが——』義平は朝長の顔を覗き込むやうにした。

それには答へずに、朝長は猶子供のやうに歎けけた。野には薄日がさして、向うに百姓の麥を踏んでゐるのが、操人形のやうに動いた。

『それでは歸るな？……歸られるな？』

義平は暫らくしてからかう言つた。猶ほ歎けけてゐたけれども、それでも朝長は軽く點頭いて見せた。

『それが一番好い。歸つてゆつくり疵を治すが好い。そち一人ぐらゐは、あそこでも何うでもして呉

れる。疵を治してゆつくりと出て来るが好い……。本當は送つて行くと好いんだけど、二人で行くと、却つて目に立つからなア』

朝長はまた點頭いて見せた。

『それでは好いか？ 父上にもよう言うて呉れ！』

義平は別れを告げて十間ほど向うに歩いて行つたが——その揉烏帽子に兩刀を帶した姿が薄日のさし添つた野道にくつきりと見えてゐるが、何う思つたか、やがてまた引返して来て、

『送つて行つてやらうか？』

『いや——ひとりで歸れる……』

『でも……案じられるでな？……』

『大丈夫だ……。本當に一人で歸れるから。』

朝長はもう歎けけては居なかつたので、義平もいくらか心を安んじたといふやうに、

『それでは健やかにしてをれ？ この身は行くが、好いか？』

『兄上も、健やかに——』

また朝長の聲が曇つて来た。義平はそれを勵ますやうに、

『武士はそのやうに女々しうてはいかぬぞ。何アに、別れたとて健かでさへあれば、ぢきまた東國で

逢はれるではないか。それに、來年の夏を待たず、東國の兵共を引連れて、京に上ることが出来るぢやないか。慥くことなど少しもない？ 好いか？ それでは？ 本當に歸るのだぞ！』

今度は義平も決心したといふやうに、別れを告げずに、そのまゝ向うへと行つて了つた。朝長が見てゐると、その後姿に午後の薄日がさして、樹も林も人家も何も無いひろい野に次第に小さく小さくなつて行つたが、唯一度振返つて見ただけで、遂にそれが見えなくなつた時には、何とも言へない悲哀が再び朝長の胸に押上げて來て、その泣く聲がさびしい冬の野の空気を揺かした。それは傷ついて飛べなくなつた小鳥か何かのやうであつた。朝長は泣いて泣いて泣き盡した。

しかし、いつまでこんなにしても爲方がないと思つて、漸くかれが身を起したのは、それから半時ほど経つた頃であつたが、その時には、畠で麥を踏んでゐた人の姿も、既にすつと遠く向うの方へと行つて了つてゐた。朝長は痛いのを強いて堪へるやうにして、跛を曳き曳き歩き出した。

最早かれはさつきのやうには泣かなかつた。かれは玉藻のことを思ひ出してゐた。それは思ひ出して見たところで何うにもならないやうなものであつたけれども、それでもそれを思ひ浮べただけでも、現在の苦痛と辛勞とからいくらかでも浮び上つて來ることが出来るやうな氣がした。つゞいてかれはあたりを見廻した。何といふ荒涼としたさびしい光景だらう？ 京に育つて田舎といふものを本當に見たこともないかれの眼には、あたりの野も、山も、川も、道路も、畠も、ところどころにぼつねんと立つて

ゐる草葺の家屋も、ひろく東南に向つて遠く開けてゐる空も、その空の此方に障壁のやうに連つてゐる山脈も、すべて親みのない、すさまじい、佗しいものとして映つた。そしてそれと同時に、京の町の賑かな家並や、壺裝束をした女や、藤壺の中のでやかな光景などが、一層色濃く心の中に展けられて見えて來た。朝長は何とも言はれない慘めさをその身に感じた。かれは跛を曳きながら、やつとの思ひで、さつきわたつた川のところまでやつて來た。

かれは川原の大きな石に腰をかけて、申の刻すぎの薄日のチラ／＼と瀨に碎けるのを眺めながら、向うから揉烏帽子や、托鉢僧を乗せた一隻の渡舟の此方へと近寄つて來るのを待つた。

船頭の手にした水馴棹から餘沫が散つて、次第に渡舟は此方へと近寄つて來たが、やがて岸に着くと、そこからぞろ／＼と人が下りた。その中で、近所の百姓らしい男が托鉢僧に何か頻に訊いてゐるが、急に『それぢや、あれがその源氏の大将かな？』さも／＼驚いたやうに問返した。

『さうだ……あれが左馬頭だ……。あの十文字に腹かき切つたのが？』

『ふむ——』

百姓は感じたやうに言つたが、『えれえもんだな？ 武士といふものは？ 見事な最期ぢやつたぜ！』

『おぬしも見てたか？』かうもう一人の方の百姓が言つた。

『何しろ、源氏の大将だでな……』托鉢僧は舟を下りて向うに歩きながら、『でも左馬頭と言へば大し

たものぢやつたに……。こんな田舎で、あゝして死なうとは思はなかつたらう……。武士と生れた以上、合戦に負ければ、これも止むを得ないが——』

この會話を耳にした朝長ははつと思つた。その話では、父上は腹かき切つて失せられたといふことであるが、それは本當か。僅か一時か二時の間に、さういふことがその方面では起つてゐたのか。かう思ふとかれはじつとしてゐられないやうな氣がした。もし、それが事實だとすれば、青墓に戻つて行くといふことは、死の顎あごに向つて入つて行くやうなものである。その身とても何うなつて了ふかわからないのである。また、向うに行つた義平にしても、さうしたことが父上にあつた以上、東國へ下つたとて、何の役にも立たないことである。しかし朝長は何うすることも出来なかつた。いくらやきもき思つたところで爲方がなかつた。それよりもかれはその身の落武者である事を人に知られないやうにとめなければならなかつた。かれは黙つて川は越したが、海道は避けて、さつき通つた林に添つた道に向うへ行つた。幸にそこらには誰もかれを見咎めるものはなかつた。かれは一步步歩いては休み休んではまた一步步歩いた。あるところでは、仰向けに草の上に倒れて、長い間そこから身を起さうとはしなかつた。

父上——自害——腹を十文字——さうした考へが絶えず朝長の疵の疼痛に雜り合つた。このやうにして生きてゐるくらゐなら死んで了つた方が好いとかれは思つた。

突然、そこに誰かがやつて來た氣勢がした。愈々捕はれの運命！ かう思つたかれは、屠所の羊のや

うに、または狙上の魚のやうに、なまじいに何ものをも見まいとじつと眼を閉かいでゐると、いきなりその足音は近寄つて來て、

『お！ 御曹司では御座らぬか？』といふ聞き馴れた聲を耳にした。

かれは思はず眼を開いた。そこに、平賀四郎義信が立つてゐた。

『お！ 平賀？』

朝長は喜ばしげに言つた。

『御曹司は何うなされた？ 源太どのと御一緒に出發せられたのでは御座らぬか？』

『疵が痛うて、行かれぬで、こゝまでひとりで戻つた——』朝長は身を起して、

『それはさうと、父上は御自害——？』

『そのやうなことは御座りませぬ。』

『でもそこで専ら噂して居るやうぢやが——』

『それなら御安心あれ！』平賀はかう言つて、『さつき、そこで、式部が殿の身代りになつて、集つて來たものを欺くために自害し申した。それを申すので御座らう？』

『それでは、父上は？』

『大事御座らぬ。』

朝長の顔には急に喜悅の色が上つた。

『それでは、噂だけぢやな?』

『さやうで御座ります……。式部が身代りに立つたので御座る。』

『それにしても式部は氣の毒だつたな。』朝長は暫らくしてかう言つた。種々なことが混雜とかれの頭に雜り合つた。

朝長は言つた。

『それで、そなたは、よく此處まで落ちて參つたな?』

平賀はその時の話をした。義朝が鎌田と一緒に知多へ行く決心をしたので、式部と一緒に此方に落ちて來ようとしたとき、そこにその群集が集まつて來たといふことなどを詳しく話してきかせた。

『それでは、父上はつゞいて落ちさせたのではないか?』

『いや、まだ落ちられはせぬと存じます……。無論、青墓にゐられます……。』

『それで、そなたは何うするのぢや?』

『この身はこのまゝ東國に落ちて參つても宜しいのでは御座るが、まだ本當におわかれを致したわけでは御座らぬゆゑ、もう一度あとに戻つて、御出發になるのをお見とゞけ申して、それから東國へ下らうと存じてをたつたので御座ります……。しかし、今はまだ明るい。宿の近所を歩いてゐると、折

角式部が身代りになつて退散させて呉れた宿の沙汰人だちにまた目にかゝるおそれが御座るほどに、此處等でもごんくしてゐて、夜になつたら、そつともどつて行かうと存じてをりましたので御座ります。

そこに、ふと見ると、こゝらあたりに見かけない人が倒れてゐる。はてな! と思つて來て見ると、御曹司であつたので御座ります……。』

『それは好かつた……。それではそちも戻るのぢやな。』朝長はかう安心するやうに言つたが、つゞいてまたひとつ心配が新たに出て來たといふやうに、『しかし、平賀、この身がもどつて行つては、今夜、落ちようとしてゐられる父上の手足まとひになりはせぬか? 邪魔になりはせぬかな?』

『それは、とても……。』平賀は朝長の様子を見て、『それは、知多へ御一緒に立ちになることはむづかしいかも存ぜぬ、あそこには、大炊もゐることゆゑ、何かと世話をして呉れるには都合がわるいことは御座りませぬ。……。まア兎に角、一度はあそこにおもどりなされませ! そして殿とも御相談になつて、あそこでゆるく御保養なされることが肝腎で御座ります——』

『さうぢやな……。』かう言つたが、しかも朝長はしほれて、『父上はさぞ臍甲斐のない奴と思召すで御座らうな?』

『そのやうなことは御座りませぬ。何んな大剛の者でも、疵を受けては、何うすることも出來ませぬ——』

『いつそ死んだ方がましかも知れぬな……』朝長は深く慨嘆するやうに、『この身のやうなものが生きて居ればこそ、人々の世話にもなる、父上の手足まとひにもなる……。平賀、いつそのこと、この身は死んで了はうか？』

『そのやうな御心配は御無用になさりませ！ 向うにまれば何うにかなりまするほどに——』

『でも、あそこに戻つて、匿まつて貰うたにしても、いつ捕はれの身となるかも知れぬほどに——それもかうした身でなければ、何のやうなことがあつても、戦うて討死することが出来るけれども、一步も自由にならないこの身では、もしあらはれた場合には、をめぐく敵の手に生捕られねばならぬ……。平賀、かうした手疵を負うた身が情ない——』

さう言はれて見れば、平賀も何う言つて好いかわからなかつた。實際、今の場合大炊の身に取つても、この御曹司ひとりやを匿つて置くといふことは容易なことではなかつた。また知多に落ちる人達が伴れて行くといふことも一層出来難いことであつた。義朝がその身より先に先づその二人の曹司を立てた心持なども平賀はよく知つてゐた。『でもまあ、兎に角あそこに一度はお戻りなさりませ！ さうすれば、父上は、何うにかして下さるで御座らう？』平賀は爲方なしにこんなことを言つた。

かれ等は日の暮れる頃までそこで休んで、それから伴れ立つて青墓の方へと戻つて行く事にした。

四〇

義朝はいくら酒を飲んでも酔はなかつた。何方かと言へば、かれは機嫌上戸で、少し盃の數を重ねても、ぢき好い心持になつて了ふのが常であつたのに、今日は何うしてか、暗い佗しい心持が胸の底に鉛のやうに重く沈んでゐて、それを表面に發しさせるやうにしても、それを發しさせるために心にもない戯れを言つたり何かしても、容易にいつもの軽い心持になることが出来なかつた。戯れに言つたやうな言葉も、いつか皮肉になり、愚痴になり、また自暴自棄になつて行つた。さうでなければ人に突きかゝつて行くか、わるく黙つて、唯盃をぐひぐひと呷るやうにして飲むより他に爲方がなかつた。

大炊にしても、延壽にしても、または鎌田にしても、それは無理はないと思はないことはなかつた。しかし、遊女達の賑かな、舞や拍子を取つて面白く歌ひつれて行く歌謡や、舞ふ度に艶やかに後に亂るる長い黒髪や、美しく粧つた黛や、さうした男を楽しませるものがこの席からなくなつて了つては、一層暗い佗しい氣分にこの室が満たされて了はなければならぬのを知つてゐた。大炊は琵琶だの、笛だの、後には鼓などまで持ち出した。玄光は玄光で、何遍となく盃を義朝の前に持つて行つて、『大殿！ この夏には、是非ともこの身をも京へお伴させて下され！ 兄の内記ほどには何んなにしても働きまするで……』など、言つた。次第に、遊女達も酒に亂れてわれを忘れてもしたかのやうに、三人四人づゝ

手を取つて代る代るその室の中を舞つて歩いた。

『殿！ 今日少しもおはづみになりませぬな？』

いくら引立て、やらうとしても、いくら沈んだ気分から浮き上らせようとしても、竟にその效のないのを見て、傍に侍してゐた延壽はかう小聲で囁くやうに言つた。

『む……………』

義朝は唯かう言つたきりだつた。笑ひもしなかつた。

『もはや、當分、お別れで御座りますほどに——今宵ばかりは機嫌よう、この身にも盃を賜らせて下され！』

義朝は黙つて其處にあつた盃を延壽にわたした。大炊が酌をした。

延壽は殿のために、も一献重ねると言つて、また酌をして貰つてぐつとそれを一呼吸に飲んですぐ義朝の方へと返した。

『……………？』

何か言はうとしたが、しかも義朝の口からは遂に何の言葉も出て來なかつた。

また騒がしい舞踊と歌謡とが始まつた。遊女達は流るゝ髪を、亂るゝ衣を、美しい白い肌を、楽しい聲の節奏を少しも惜しみはしなかつた。義朝は唯じつとそれを見詰めた。と、その時、清涼殿の朝餉の

間の淫蕩な光景が——信頼が女房達の膝に頭を當て、酔ひ痴れてゐる光景が、はつきりとその眼の前に浮んで見えた。つゞいて、その信頼も今はもうこの世にはゐないのだ！ と思つた。かれは思はず下唇を噛んだ。

かれは上からある大きな力に壓されて、それを堪へるために肩を張り胸を突きだしてゐるやうな氣がした。否、むしろその力に抵抗するために、一層皮肉に、一層自暴自棄にならなければならぬやうな氣がした。かれは其處からも此處からも簇つて集まつて來る暗い幻影を、罪惡を、報酬を、怨恨を、瞋恚を一生懸命に押へた。

四一

向うの方からひとりの婢が入つて來て、何か囁いたので、鎌田はそのまゝ立つて行つたが、間もなく戻つて來て、今度は義朝の傍へと行つた。

義朝はわるく酔つた顔をそつちへと向けた。

『何うした？』

『平賀が御曹司を伴れてもどつて參られた——』

『誰れ？』

御曹司といふ言葉は聞えたには聞えたが、あたりが喧しいのと、さういふことは思ひ設けてゐなかつたのと、はつきりと頭には入らなかつたのであつた。

『平賀と御曹司——』

鎌田は繰返した。

『大夫進か？』

『さやうで御座ります……』

『何うかしたか？』

『手疵が重うて、とても歩まれないさうで御座ります……』

『うむ——』

かう言つたが、義朝はそのまゝ、傍に置いた佩刀を取つて立上つた。

『何方へ？』

少し向うに離れて、大炊と一緒に琵琶を合せてゐた延壽は、手を留めて俯向くやうにして訊いた。

『なアに、ちよつと用事が——？ さうしてをれ？ すぐもどつて来るほどに——』かう言つて義朝

は鎌田と一緒に向うへと出て行つた。

結び燈臺の灯のぼんやりついでゐる處に、最初に義朝は平賀の躊躇つてゐるのを見出した。

『何うした？』

『戻つて參じました……』

平賀があとをつゞけて言はうとするのを手で遮つて、『大夫進が戻つたといふのは本當か？』

『さやうで御座ります……』

『何處にゐる。』

義朝の調子がいつもと違つて荒々しく且つ興奮してゐるので、答へかねて躊躇してゐると、

『何處にゐるといふのに——』

『殿！ お氣を靜かに持たせられて……。御曹司は、決して臆されたのでは御座りませぬほどに——』

『そんなことは何うでもよろしい——大夫進は？』

『父上！ この身は此處に……』

やがてかういふ聲が向うでして、辛うじて身を起した朝長が、靜かにそこにその惨めな姿を、狩衣も指貫もところどころ泥に塗れた姿を、此處まで來るにすら疵が痛んで平賀の肩に凭れるやうにしてやつとやつて來た姿をそこに現した。

義朝はじつとそれを見詰めた。その眼には涙がにじんだ。しかもかれはとてもその疵の治らないことを知つてゐた。また此處に留めて置いたにしても、大炊や延壽が十分にそれを匿つて呉れることの難し

いのをも知つてゐた。義朝の頭にはいろいろなことが往來した。朝長は武士の子としては、勇ましいといふ點に於ては缺けてゐたけれども、その器量にも、その氣立にも、優にやさしいところがあつて、その眉から額にかけては、會てかれの愛した柏の面影がはつきりと指さされた。義朝は言ふに言はれない、悲痛も單なる悲痛でない、深い暗い心持の簇々と潮のやうに胸にこみ上げて來るのを感じた。かれは下唇を強く噛んだ。

『そなたはそれで何うするつもりぢや？ こゝまで戻つて來た上は、それについての考へもあつたらう……？』義朝はかう言つて、獨語のやうに『兵衛佐ならば、稚いけれども、さうはしなかつたらうに？』

『父上！』

かう言つた朝長の聲は激してゐた。

『父上！ この身は臆したのでは御座りませぬ。途中でも、何遍自ら死なうと思つたか知れませぬ。決して……決して、此處に戻つて來て、長く留まらうと存じたのでは御座りませぬ。それは平賀もよく存じて居ります……』

『まア、宜しい。何もそのやうに言ふことはない。暫らく此處に留まつてゐるのも宜いかも知れない……』

『父上！ 何うか、さうは仰せられずに、しんにこの身をいとしいと思召さば、何卒……何卒御手にかけさせられて下さりませ！ こゝに留まり申しても、この手負では、とても何うすることも出来ませぬほどに——。敵が來れば、をめぐ捕はれの身となるより他に何うすることも出来ませぬほどに……。父上、千波ですら、鎌田の手にかゝつて終りをよく致しました。何卒御手にかけてさせられて、お心を安うせられて、その上で知多へお立ち下されませ！』

『うむ、よう言つた——』かう言つた義朝の眼には再び乙若や龜若の姿が浮んで來た。

『そなたは臆したのかと思つたが、さうではなかつたか？ 矢張、この義朝の子であつたか？ 保元の時に、乙若や龜若が、兄上は何うしてこの身達を殺すのか、助けて置けば、何ぞの時の役には立つのに……？ いつか平家が敵になる時が來るであらうが、その時は何故あの時この身達を生かして置かなかつたと後悔することが屹度來るだらうと言つたが、今こそ思ひ當つた！』義朝は言ふまいと思つたことをつい口に出して了つた。あつい恩愛の涙がはら／＼とその頬を傳つた。

平賀は傍にはゐたけれども、何うすることも出来なかつた。

『大夫進！ 其では好いか？ 覺悟は好いか？ 佛の名を念じたか？』義朝は太刀をキラリと引きぬいた。

『殿！』

かう叫んで平賀がそれに取縋らうとしたと同時に、殆んど同時に、延壽を先に、大炊がばた／＼とそ

こに入つて来た。

『殿!』

かう言つて一番先に延壽がそれに取繼つた。白い腕と亂れた髪と半膝をついた艶やかな顔とが暗く佗しげに興奮した義朝の顔と相對した。

『殿! 本當に何うなすつたので御座りますか? そのやうな……そのやうな……』延壽はその身を震はせるやうにして言つた。大炊もその左の手に取繼つた。

『本當に、まア何うしたといふ……?』

義朝は事の何事であるかを見詰めでもするやうに、暗い顔をしてじつとそこに立盡してゐるが、急に調子をかへて、

『何でもない! 何でもない!』かう言つて抜いた太刀をそのまゝ鞘に收めて『何でもない……。あまりに不覺であるゆゑ、こちらさんがためにやつただけぢや……。別に何事でもないのぢや。』

『それだと言つて、太刀など抜いて……。殿! 殿は——』延壽は聲を顫はした。

大炊は平賀から一伍十什の話を聞いて『さうでせうとも——さうでせうとも、その疵では?』と言つて一番先に其方へへ行つた。朝長はじつとしてゐた。皆なのして呉れるまゝに任せてゐた。かれは全く傷ついた小鳥のやうであつた。羽搏きして飛びたいにも、その疵を治すために何處かかれ家を求めた

いにも、最早さうしたことはかれには許されてはゐなかつた。實際、一思ひにその苦痛から脱れさせてやらうとする親鳥の一撃が、恩愛の中でも最も深い恩愛であらねばならなかつたのである。しかし、大炊にしても、延壽にしても、さうした憂目は見てゐられなかつた。女達は平賀に手傳つて貰つて、そのまゝ朝長を次の室の帳臺の中へと伴れて行つて靜かに寝かした。

そこから戻つて来てからも、延壽は、『まあ殿は! 何といふことを?』と言つて、じつとその義朝の顔を眺めた。

四二

義朝は女達と一緒に賑やかな歡樂の席へと再び戻つて来たけれども、種々のことが氣になつて、そこに落つてゐることは出来なかつた。それにも拘らず、延壽は暫しは逢ふことが出来ない身だから、別れを惜しみたいと言つて、そのまゝ義朝を別な帳臺の方へと伴れて行かうとした。

『もはや支度は整つて居りますから、何も御案じになることは御座りませぬ。亥の刻の鐘の鳴るのを相圖に此處を立さへ致せばそれで好いことになつて居りますから——』鎌田すらかう言つて頻りに盃の酒を遊女達につがせてゐた。

『舟の方は——?』

『大事ありませぬ……。落ちなく手配いたして置きましたほどに——』玄光もその周圍に遊女達を集めて、頻りに何か戯れ言を言つてゐた。

そこに平賀がやつて来て暇を告げた。

『舟まで參ればよろしいので御座るが、却て御邪魔になると存じまして、それでは健やかにゐらせられませ！ また東國で御目にかゝりますほどに。』

『でも、今宵は此處でやどるが好いではないか？』

『つぎの宿までまるつてゐる方が安全で御座りますから——』

『さうか。其ではまた逢はう。』

で、平賀は鎌田にも挨拶してそのまゝ向うへと出て行つた。

延壽は義朝を伴ひながら、

『まだ成の刻にすらなりませんほどに、心配ひは御座りませぬ！』

かれ等は遊女達の騒いでゐる傍をそつと通つて、朝長のゐる室とは反對の方へと廊下を傳つて行つた。そこには、灯の薄暗くついてゐる室の中に立派な帳臺が用意されてあるのをかれ等は眼にした。

それから一時経つた後には、義朝も延壽も最早その帳臺から出て來てゐた。大炊も延壽も出發の用意をするために何彼と忙しく往來した。

ふと氣が附くと、そこには誰もゐなかつた。遊女達も皆それらの室へと入つて行つて了つてゐた。

義朝はじつとして坐つてゐたが、その時、ふと頭に上つて來たのは、それは他ではない朝長のことであつた。かれは頭を振つた。このまゝ此處に残しては置けないとかれは思つた。此處に残して置けば、捕はれの身になつて、恥を衆人の中に曝すばかりである……。かれはそのまゝ太刀を取つて立上つた。

それはある盲目な力——ある目に見えない、たとへば、因果とか、應報とか言ふやうな不思議な力があつて、何うしてもそつちに行かずにゐられないといふやうに、また嫌應なしに引張つて行かれるといふやうに、ふらくとして義朝は引寄せられて行つた。乙若や、龜若の面影が再びかれの眼の前に現はれた。

薄暗い灯のついてゐる廊下をかれは靜かに朝長のゐる室へと入つて行つた。かれはそこに油の少くないつてじつと音を立てゝゐる結び燈臺を見た。暗い物の影の夜風に動いてあちこちにチラチラするのを見た。朝長が眼をぱつちりと開いて、半ば身を帳臺から起して、じつと此方を見てゐるのを見た。曾ては此世にあつてもう今はないそのなつかしい柏の眼と眉と額とを見た。かれはじつと見詰めた。

『何うした！』

『父上！ 何卒、このくるしみから救つて下され！』

『大夫進！』

『父上！ さつきから待つてをりました……。何うか、何うか、おん手にかけてさせられて……。さすれば、生みの恩を二度受けるといふもので御座ります……。父上！』朝長は手を合せた。

『大夫進！』

いきなり義朝は太刀を抜いて、そのまゝ朝長の胸元をぐさと刺した。『父上！ 生みの恩を二度……。』その言ひきらぬ中に、太刀はまたぐさと入つた。三刀刺した時には、血はあたりに迸つて朝長の體はぐたりとなつた。義朝は返す刀で首を掻き切つたが、それを骸にさし繼いだまゝ、衣引き蔽つて急いで此方へと出て來た。誰もそれを知るものはなかつた。

四三

玄光を先に、金丸、義朝、一番あとから鎌田が續いた。かれ等は深い闇の中を一つの松明も持たずに、各自にその前に行くものをのみ頼りにするやうにして歩いた。時には細い里川をそれと闇に透して飛越えたり、また時には、危うく深田の中にはまり込まうとしたり、路を間違へて二三町もあとに戻つてやつとその本當の通りに出たりなどした。かれ等は何よりも人に知られることを恐れた。かれ等は黙つて歩いた。

凍つた土を踏む藁沓の音が靜かにしとくと聞えた。

義朝は何とも言はれない痛恨を感じた。それは何方かと言へば、一種の忿怒に近いと言つた方が好いくらゐであつた。それも自己に對する忿怒——もし大きな力が其處にあつてその自己をすら粉砕して呉れたなら何んなに好いだらうと思はれるやうな忿怒の情に近かつた。かれは薄暗い帳臺の中に骸につぐやうにして残して置いて來た血に塗れた首を頭に浮べた。かれは身も滅びて了ふやうな絶望を感じた。かれは京を落ちる時から、その身の足手纏になるものを一人一人捨て、來たことを思つた。常磐、三人の幼い兒、千波、頼朝、それから朝長、さういふ若い芽生を、若い枝を、その身の落ちるために止むを得ず捨てたり斬つたりして來たが、さてそれでその身は自由になつたらうか。何故、この身はあの六條河原で潔よく討死しなかつたか。何故、この身はあの伊吹の雪の中で自害しなかつたか？ さうすればあの朝長をすらこの手にかけてねばならぬやうなことはなくても好かつたのに……。かう思ふと、そのあとに残つた親の身の方が堪らなくつらく生き難くなつて來るのを感じた。

《今時分は、大炊も延壽もあの帳臺のある室へと入つて行つたらう。そして驚いてゐるだらう。この身の無慈悲を歎いてゐるだらう……》義朝はかう思つたが、それと同時に、いつも押へに押へてゐた追憶が堰を切つた水か何ぞのやうにすさまじくそこに漲りわたつて來た。かれはこの一月の中に捲き起されたすさまじい巴渦をはつきりとその闇の田圃路の中に浮べた。

『御曹司は？』

長い沈黙の後、後から近寄つて来た鎌田はかう小聲で訊いた。

『……………?』

『あそこに匿まつて呉れ、ば、たしかで御座らうが? ……あの疵は大事になりはいたしませぬか?』

『鎌田、あれはもう心安い……』

『何うしてで御座るか』

『鎌田、あれは案ずるには及ばぬ。あれはもはやこの身が手にかけて来た!』

『えッ! おん手に?』

鎌田も流石に驚きの聲を立てずにはゐられなかつた。

二人はそれなり黙つて歩いた。鎌田にしても、何う言つて好いかわからなかつた。また何う訊いて好いかわからなかつた。そんなことを知らない金王丸と玄光との歩いて行く藁沓の音はかなりの距離を持つて、静かに二人の沈黙を縫つた。

空は一面に曇つて、何處を見わたしても、星の影ひとつ閃めいてゐなかつた。夜霧もいくらかはか、つてゐるらしく、をり／＼の間から樹の立つてゐるのや、林のこんもりとしてゐるのや、水田の濶く連つてゐるのなどが見えたが、もはや青墓の灯——延壽や、大炊や、遊女達の混雑と巴渦を巻くやうにそこに見送りに出てゐるた灯の影からは、闇夜の中を一すじにすつと遠く離れて来て了つてゐるのであつ

た。

闇を隈取つて高く立つてゐる槻の並木がやがてやつて来た。そこには小さな村があつた。ある人家の傍からは、犬が二疋も三疋も出て来て吠えた。中にはすぐ足元近くまで寄つて来て、今にも噛みつきはしないかと思はれるほどに吠えた。しかもかれ等は成るだけそれに取りあはないやうにして急いで通り過ぎた。かれ等はそれほど人にあやしまれることを恐れた。

そこで義朝のあとになつて鎌田と竝んで歩いた金王丸は、初めて朝長についての話を聞いた。『えッ?』かう言つて驚いたその聲は、二三間先を歩いてゐる義朝にもきこえた。

しかもそれについて二人は何も話す自由を持つてゐなかつた。かれ等は黙つて歩いた。藁沓の音だけが、唯あたりに際立つて聞えた。しかも金王丸の眼の前には一昨日からのが歴々と浮んで繰返された。それにしても、常磐どのは、あの三人の幼い兒を抱へて何うしたらう? などとも思つた。しかしさうした過去のことよりも、行先のことの方が一層いろ／＼と胸につかえた。(大夫進どのにしても、いづそあそこで失せられた方が好かつたかも知れない。あの疵ではとても何うすることも出来なかつたし、あとからやつて来るといふわけには行かぬし、いつそ……いつそ——)こんなことをもかれは思つた。しかし一番不思議な感じがしたことは、ついさつきまでゐた人がもうこの世にはゐないといふことであつた。それを思ふとこのぬば玉の闇夜にも似たやうな暗い感じが氣味わるくその胸を塞ぐやうにした。

何處を見わたしても、あたりは全く闇で、一點の灯をすらその前に見出すことが出来なかつた。亥の刻はもうとうに過ぎて、何方かと言へば子に近い時刻になつてゐるので、何處の家でももう起きてゐるものとはなかつた。油を惜んで早寝をする百姓は勿論、割合に夜更をする習慣の商人の家ですら、もはや灯をつけてゐるものは何處にもなかつた。

『あ、これでわかつた。こゝまで来れば、もはや川のところまでいくらもない……。もはやあら方來て了つたやうなものぢや。』かう言つて玄光はすた／＼歩いた。

成程、さう言はれて見れば、あたりが濶々としてゐる上に、茫と薄く夜霧のかゝつてゐるのがそれと微かに闇の中に透かして見られた。水の流れる音も何處か遠くでしてゐた。

その水音が漸く近くなつて、濶い河原に添つて歩いてゐるといふことが段々わかつて來たが、やがてぐしの高い草葺の屋根のごた／＼と五六軒かたまつてゐるのが、夜空の中にそれと微かに透して覗かれた。

そこは靜里の船附で、晝間は山の方から下して來る船が柴だの炭だのを載せて通つて行くので、繼ぎだらけの汚ない帆が小さく孕んでゐたり、長い棹を石に突張つて船縁を押して行く船頭の姿が晴れた空氣の中に浮び上るやうに見えたり、また時には、多度山詣での壺装束の女や此處等にはあまり見かけない烏帽子に狩衣を着た男などを載せてた、半管を卸した船がゆた／＼とのんきさうに通つて行つたりしたが、今はしんとして、唯、水の音のコト／＼と微かに岸の石に鳴つてゐるのを耳にするばかりであつた。玄光はその一番向うにある低い家屋の前に行つて、そこで立留つて、トン／＼と靜かに戸をたいた。

中ではすぐ返事がして、つゞいて灯のつけられたのが荒壁の隙間を通してそれと覗かれた。やがて扉は明いて、背の高い船頭が出て來た。

『何うしなすつたかと思つた?』

『もう寝たのか?』

『いや寝たといふでもねえが、さつきから待つてゐるけれど、來ねえで、今夜はもうよしになつたと思つてな、今、寝ようとして、灯を消したばかりだ……』

『でも、まだそんなに遅いんぢやないぞ! 子にはまだならないぞ!』

『さうかな……』船頭はいくらか眠つたと見えて、大きな生あくびをした。

『柴は積んだか?』

『うむ、積むにや積んだが、あまり澤山積んで、人が乗れなくなるといけねえと思つて、好加減にして置いた——』

玄光は急に聲を低くしたが、それと同時に、船頭が此方を、そこに闇の中に立つてゐるかれ等をじつ

と見てゐるのがそれと感ぜられた。玄光ははつきりとは話さなかつたけれども、内密に知多にわたる客だといふことはさつきそれと言つて置いたのである。

暫らく小聲で話してから、二人はまた元の聲に戻つた。

『向うに船があるかな?』

『あるだらうと思ふぢやがな? それはこの船でも海をわたれねえこともねえが、あるなら大きい方が好いな?』

『あるだらう? 大抵——?』

『大抵は作兵衛のところにあると思ふが、まア、しかし、それは行つてからで好いぢや——』

船頭は再び家屋の中に入つて行つて、今度はそこから艫だの竿だのを持ち出して來た。蓑をも着た。皆なあとから歩き出した。

『變な天氣になつたな?』

玄光と船頭とは、竝んで先きに歩きながら話した。

『さうぢやな』

『また雪になりはしねえかな?』

『何ともわからねえな? まだ降り足らねえ模様だぞ!』

丸い組物の中に灯のついた皿を入れたのをブラ／＼船頭は持つて歩いてゐるが、その微かな灯の光が、小さなガン燈でもあるかのやうに、チラ／＼と暗い夜の地上に動いて行つた。先に立つた二人の間にはまたこんな話がつゝいた。

『作兵衛のところにある舟は、いつ見たのかな?』

『わしかな? ……わしの見たのは、もうすつと前だけでも……』

『それでは、あそこにあるかどうかわからんぞ!』

『さうかな? もしなけりや、他をさがせばまたあるぢや。そんなに案じることはあんめい。』

『さうかな——』

また黙つて歩いた。やがて岸に近く、河水が茫と白く闇の中に覗かれて、石に當つて鳴る水の音が靜かにコト／＼と聞えた。

船頭は立留つた。かれは手にした灯を下に置いて、その岸に繋いである舟のところへと櫓と竿とを運んで行つた。

深い闇があたりを包んで、一間先も本當には見えないくらゐになつてゐるので、はつきりとわからなかつたけれども、此方の岸に偏つてのみ水は流れてゐるらしく、そこには、柴を半分以上積んだ舟が一隻、コト／＼と絶えず水の音をその舷に漂はせながら、夜の闇の中に沈み盡したといふやうにして繋が

れてあつた。それは何方かと言へば、舷の低い、底の柔かな、瓜の皮のやうな形をした舟で、浅い河底の石にをりくゝ觸れても、別に危害がないやうに自由につくられてあるのであつた。川はすぐその下で、瀬をつくつて、そこだけザツと際立つた騒音を立てゝゐた。

『好いか？ 乗つても……』

岸に立つてゐた玄光は促した。

『ちよつと待つて下され。少し坐るところがなうてはかなはんでな——』

こんなことを言つて、船頭は積んである柴のかけで何か頬にごとくやつてゐた。さつき岸から持つて行つた灯は、微かに舟の中を照した。

夜風は刺すやうに寒くかれ等の顔を吹いた。

『それぢや好う御座りやすで、乗つてお呉んなされ！』

舟の中から船頭が言つた。

金王丸と、鎌田とが義朝を中に挟んで、そのまゝ跳り込むやうにして舟の中へと入つて行つた。かれ等の眼には、一番先きに束ねた柴の高く積んであるのが先づ眼に映つた。つゞいてそこに權が舷に結びつけてあるのが映つた。櫓と竿とが長く横へて置いてあるのが映つた。そして最後にその柴の束の中に、一ところ空いたところがあつて、そこに筵を敷いて三人が坐るやうになつてゐるのが映つた。

三人は黙つてその中へと入つて行つた。義朝が一番奥に、その次に金王丸、舳に近いところに鎌田が坐つた。

玄光と船頭とは話した。

『番所はしらべが厳しいかな？』

『何アに、大したことはあんめい——』

『夜中でも起きてゐるかな？』

『いつもは、そんなことはねえだが、この二三日、馬鹿にやかましくなつてな。昨日も養老行きのお客様を乗せて行つたら、調べられた。何でも、京で合戦があつたらしいので、それで調べがやかましくなつたと言うだ——』

『ふむ——』

玄光はかう言つたが、『何アに、あそこで調べられたら、この身が出るでな……。誰だつて、この蘆栖の玄光を知らねえものはねえ筈だ——』

『さうとも……おめえさまが出れば豪氣なもんぢや、誰だつて知つてゐるでな……』

玄光は空を仰ぐやうにしてゐるが、『おや！ 雪が降つて来たかな？』

『さうだな。降つて来たやうだな。』船頭も顔を空に向けて、『おう！ ピラ／＼落ちて来た——』

『雪はもう澤山ぢやな。』

こんなことを言つてゐる中にも、灯の置いてある周圍に細かくチラ／＼と雪片の落ちて來るのがそれとわかるやうになつた。

『いゝかや？ それでは出すでな？』船頭はもう一度岸に下りて、杭に繋いであつた纜を解き放ちながら言つたが、その次の瞬間には、かれは舳に立つてじつと水の鳴る瀬の方を見てゐた。舟は下つた。

四四

夜でなければ、種々の荷物を積んだ舟も通つたであらうし、孕んだ帆もいくつとなく上つて行つたであらうし、地方から地方に旅する人達を乗せた早舟も往來したであらうし、岸にはまたところどころに集落や船附があつたりして、揉鳥帽子に奴袴を着けて小さな荷物を肩にかけた旅人が、石原を走りながら、下つて行く早舟をおい！ おい！ と呼びながら追懸けて行くやうな光景も眼にしたであらうけれども——否、その川は海から國の府に入つて行く重要な交通路を成してゐるので、その下流の舟番所のあるところは、府の河港ともいふやうな形になつてゐて、晝は決してこんなさびしい荒涼としたものではないのであつた。岸から岸へと人家が見え、ある船附などには、低い草葺の屋根がごた／＼と七八軒もかたまつてゐて、往きに歸りに船頭達が酒を飲んだり女に戯むれたりしてゐるのを常に見かけた。河

舟も五隻や六隻はいつもそこに繋がれてあつた。

玄光はこの川に添つた船附や、集落や、またその船附からずつと向うに入つて行つたところにあるさびしい田舎町や、そこに住んでゐる此のあたりでも名高い長者や、その町からずつと入つて行つたところにある、例の奈良の帝の一時行幸になつたことのある養老の瀧や、その時つくられた行宮の址や、否、さういふものばかりではなく、そこらに巴渦を巻いてゐる人達の生活をも、何ういふ若者がそこにゐるて何ういふ若い美しい女がその相手になつてゐるといふことをも、否、もつと詳しく、誰の家はあそこの家と何ういふ關係になつてゐるか、また何ういふ親類つゞきになつてゐるかといふことをも、何一つ知らないといふものはないと言つて好いくらゐるであつた。かれは到るところで鷺栖の主人公として通つた。かれの顔を見ると、誰でも下手に出て、玄光さま！ 玄光さま！ と言つた。何か事のある時には、かれは必ずその姿をそのあたりに見せないことはなかつた。

従つて晝ならば、そこでも此處でもかれは聲をかけられたであらう。行き逢ふ船の船頭だちも皆かれに挨拶して行つたであらう。岸から岸へと、船附から船附へと、かれは寄つて立話をして行つたであらう。否、かれに取つては、この川は、尠くとも幼い時からの深い馴染で、其處にも此處にもいろ／＼な記憶をかれは持つてゐた。そこに松があつた。それがあつた年の洪水で根こぎになつて流された。そのすこし下流のところは、かれが幼い時分、青墓に行く往きに歸りに、よく立寄つて瓜を買つて食つた休茶

屋があつたが、そこからは、東と南とに當つて野が遠く開けてゐて、晴れた日にははつきりと木曾の高い山が眺められるのが常であつた。その休茶屋にゐた婆は、とうに死んで、今は代つてその娘がやつてゐた。

それから少し下つたところには、左側の石原の中に、高淵の渡といふのがあつて、そこに藁で葺いた三角の渡船小屋がぼつくりひとさびしさうに立つてゐるのが見える筈であつた。春の日などには、かけらふのたゞよふ河原に渡頭に急ぐ旅客が五人も六人も走つて来て、今出ようとしてゐる舟を手をあけて呼んだりしてゐる繪巻のやうな光景が常に展けられたが、一昨日玄光が通つた時には、その渡船小屋の屋根が半ば雪の中に埋れたやうになつて、いかにも寒さうにひろい河原にぼつくり立つてゐるのをかれは見たが、それにしても昔はその渡場はそこにあつたのではなかつた。もつとずつと上流に——牧田川が西から落ち込んで来てゐるあたりに位置してゐたのであつた。つまり川の瀬がある年の洪水にすつかり變つて、ずつと此方へと寄つて流れるやうになつたのである。そしてその結果として、そのひろい石原が出来た。その藁葺の小さな渡船小屋が出来た。

玄光は闇に透して見て、

『もう、高淵の渡しは通つたな？』

『そこがさうでさ——』船頭は少し上流になつた對岸を指した。

幸に雪はさう大して降らなかつた。灯の周圍にチラ／＼落ちて來てゐる影も次第に少くなつて、今では殆ど止んだと同じやうになつた。

『好い鹽梅だな……。これではあがるかも知れんな？』

玄光は空を仰ぐやうにして言つた。しかも船頭はその返事もせず、頻に竿を使ひはじめた。今や瀬にかゝり始めたのである。そこは一ところ川が曲つて、石原を此方から向うへと水が越して流れて行つてゐるのであつたが、暫らくして舟はその瀬の巴渦の中に入つて行つたらしく、水の音が騒がしくざわついて、飛沫が頻に舷を打つた。舟の底が石に軋る氣勢もした。

しかしその瀬も長い間ではなかつた。そこを通り過ぎると、舟は再びもとの状態に戻つて、水の靜かに淀んでゐるらしい淵が徐かに流れた。船頭は竿を元のところに横たへて置いて、さつきと同じやうに軽く櫂を引いた。

積んだ柴の中では、こんな話が取交はされてゐた。

『酒がすつかり覺めて、少し寒うなつた——』

かう鎌田は言つて直垂を搔き直したが、『殿は如何で御座る。寒うは御座りませぬか？』

『少し寒うなつたな……』

『それではこれをさし上げませう？』鎌田は立つて、そこに置いてある上着——延壽があとを追ふや

うにして金丸丸に持たせてよこした上着を取つてそれを後からかけてやつた。

『御身はどうぢや。』

『この身はこれで澤山!』鎌田はそこにある小篋を取つて着た。

『もはやあの横曾根は通つたか?』

『通りました。』

『それでは、番所もさう遠くはないな?』

『まだ、それでも一里ぐらゐるは御座りませうかな?』

義朝はまた黙つた。頭がぼうとして、さつき迄刻むやうに鮮かに眼の前に映つてゐたいろくな光景も、今はぼんやり遠く遠くなつて行つたやうな気がした。酔覺らしい生あくびが頻りに出て來た。

金丸丸は兩膝を立て、それに顔を突伏したやうにしてゐるが、連日の疲勞が出て來て、いつの間にか深い眠りに落ちたらしく、鼻が微かにそこから洩れてきこえて來てゐた。年若い身には、何んなに危険がその前に迫つて來てゐても、そんなことに頓着してはゐられなかつた。

鎌田もあくびを噛みころしながら、『その代り、こゝさへ無事に通り越せば、あとはもう何の心遣ひもありませんからな……。あとは海さへ越せば好いのですからな。』

『さうぢやな。』

『知多に行きさへすれば、何んなにでもゆつくり休息が出來ますほどに——もはやもう一息……』

『それでも、御身には、えらう世話になつたな!』

『何の? それでも、まア、此處まで御伴れ申すことの出來たのは、この身の心が届いたと申して好いと思ひます……』

『いろく世話になつた!』

心から感謝するやうに、また溜息でもつくやうにして義朝は言つた。それは長い間一緒にゐる鎌田にしても、滅多に耳にすることの出來ないやうな静かな悲しい調子であつた。そしてその調子の中には、頼朝のことや、朝長のことや、細かに悲しく織り込まれてゐるのであるのを思ふと、何う慰めて好いかわからないやうな悲哀を鎌田は感じた。二人はそのまゝ黙つて了つた。

船頭が片手で漕ぐ櫂の音は舷に當つて静かに軋つた。

それでもをりくは舟の通つて行かぬことはなかつた。あるところでは、前から岸にかゝつてゐる船が静かに下り出した。また、あるところでは、府に向つて急ぐ船であるらしく、櫂を五六挺も並べて、ギイト音を立て、上流へと漕いで行つた。岸に繋いである舟の苦の中にぼつ、りひとつ灯の點つてゐるのなども見え出して來た。

玄光もいくらか心配でないことはなかつた。夜だから、大抵は大丈夫だとは思ふけれども——たとへ

調べられるにしても、舟の中まで入つて来るやうなことはあるまいとは思つてゐるけれども、しかも青墓ですらあゝした騒ぎが起つたのであるから、舟を改めるための番所には、何ういふことが待つてゐるか、豫めそれを知ることが出来なかつた。

玄光は船頭に問うた。

『番所には誰がゐるたな？』

『おら、昨日通つたんだが、兵内どのがゐるたやうだつた——』

『今日もさうかな？』

『それは何うだかわからねえが、ことに由ると、内記どのかも知れねえ？』

『内記だと好いがなア。』

『さうぢやな……。兵内どのはいやにむづかしいことばかり言うて、誰にも好かれねえなア。』

『本當にあいつは、いやな奴ぢや、この身もいつか争つたことがある……。』

『さうかな、いやに苦い顔してゐるでな——』

船頭の漕ぐ櫂の音が、ザと水を切つて行つた。西から牧田川を入れてから、水量は前とは比べものにならないほど多くなつて、もはや舟の底に小石の軋るやうなことはなくなつたばかりではなく、養老の山脈のすつと前へ連つてゐるのも、やがてそれと指さされるやうになつた。晝ならば、そこからその

山脈の奥に真白い雪を戴いた鈴鹿の山々の高く連つて聳えてゐるのをはつきりと眺めることが出来た。

『番所を通る時にはな、すべてこの身が應對するでな……。そなたは黙つて知らぬ顔をしてゐる好いからな……。』

『ようがす……。』

船頭は答へた。

雪がまたチラ／＼降り出して來た。灯の周圍には、またその細かい影が落ちて來ては一つ一つ消えて行くのを玄光は眼にした。しかし、かれ等は雪については何を言はなかつた。

暫らくして、鎌田も身を起して玄光の立つてゐるところへとやつて來た。

『どうぢや——』

『……。』

『もうぢきぢやらう？』

『もう、いくらもありませぬな？』

《大したことはあるまいな？》鎌田はかう口に出して訊かうとしたが、止して、じつと下流の方を眺めた。

玄光も眺めた。まだ灯は見えなかつた。人家も見えなかつた。しかし、そこを、その少し折れ曲るや

うになつてゐるところを向うに出れば、そこに橋が竝んでゐる家屋が一面にその河港らしい光景を展開して來るのであつた。米を積んだ船や、魚類を載せて來た船や、山地から遠く下して來た筏や苦を背いたかゝり舟などが混雜と集つてゐて、その向うに、舟番所のある廣場がずつと廣く連つて見えてゐるのであつた。そして船が上つて來るにしても、下つて行くにしても、また河港に入つて行くにしても、皆なそこに行つて一度は調べを受けなければならぬのであつた。

『案ずることはありませんね……この身が、この玄光が引受けましたで——』

かう強い調子で玄光は言つた。萬一のことがあつたらこの刀にかけても殿は匿まつて見せるといふ語氣がはつきりとその言葉の中にあらははれてゐた。

『それぢや、こつちに入つてゐる方が好いかな？』

『その方が好う御座るな……。成るだけ柴のかけに——？』

鎌田は再びもとのところへと入つて行つて坐つた。船は頻りに下つた。

四五

河風の寒いにも拘らず、舳の下とこに立つてゐる玄光の眼には、やがてその川の屈曲して行つてゐるさまが、向うの山脈がゆるやかな傾斜を夜空に劃つて川とおなじ方向に靡いて行つてゐるさまが、

またその岸に混雜とくつつくやうになつて舟や櫓が竝んでゐるさまが、ところどころにぼつり／＼と灯が點綴されてゐるさまが、ことにその舟番所のあたりには、いつもと違つて、篝火が焚かれてあつて、そこにかゝつてゐる舟にも松明が三つ四つその灯の影を長く水に落してゐるさまが、次第にはつきりと映つて來た。(これは困つたな？ 果してあゝしてかためて居くさる！ これでは容易なことでは通れないかも知れんな！) かう玄光は腹の中で思つた。しかし何うすることも出來なかつた。かれは船頭に小聲で言つた。

『これぢや、とても素通りすることは出來んな？』

船頭はそれには答へなかつた。櫓の音が頻りに軽く水に響いた。

夜中のことではあるし、此方の岸に偏るやうにして漕いで行けば、場合に由つては、調べられずにとつと通つて行くことが出来るかも知れないと玄光はさう思つたのであつたけれども——さう出来ることを何より深く願つたのであつたけれども、今はそれはとても出來難いことであることがかれにもわかつた。滅多なことをして疑はれては、却て取返しつかないことになるのであつた。

船頭は櫓を緩めた。

『何うするな？ 向うの岸に寄るやうに漕いで行かうかな！』

『なアに、大事な……』

『それでは、いつものやうに真中を漕いで行つても好いんだな？』

『さうだ——』

玄光はきつぱりと言つた。

櫂の一押しごとに、舟は次第に港の方へと近寄つて行つた。何も彼もはつきりして來た。檣の澤山竝んでゐるのも、苦舟の五隻も六隻も繋がれてゐるのも、舟の底に灯が微についてゐるのも、岸に草葺の屋根が低くごた／＼と連つてゐるのも、何も彼も夜の暗い空氣の中にそれと指さされた。水はたぶ／＼と黒い脈を立て、灯の影が幾條となくそこに落ちて揺いた。

舟番所では、この深夜に櫂の音の水を破つて聞えて來るのは餘程前から耳に留めてゐるが——『何者だ——こんな遅く……？』かう言つて眠い眼を睜るやうにしてゐるが、その舟は別に逃げもかくれもせず、徐かに川の真中を此方へ近く漕ぎ寄せて來て、そこでとまるかと思つたら、さうでもなしに、そのまゝ再び櫂の音を立て、漕いで行くのであつた。

『お——い！』

かうそこから呼んだ。そこにあつた松明の灯がチラ／＼と亂れるやうに動いた。水に落ちてゐる灯の影の夥しく揺くの由つても、番所の舟の此方へと出て來るのがわかつた。

『おい！ その舟！ 待たぬか？』

またその聲が叫んだ。

『お——い！』

かう此方でも應じた。

夜であるにも拘らず、篝火は焚かれてあるその舟番所のさまは、此方からもそこだけ浮き彫りになつてゐるかのやうにはつきりと見えた。五六人も番人らしいものがその篝火の周圍に黒く集まつてゐるのも見えた。

そこにある多くの小舟の中から一艘だけ離れて櫂の音を立て、頻りに此方へと近寄つて來るのを玄光は見た。その舟には松明が三つもつけられてあつた。人數も三人や四人は乗つてゐるらしかつた。

『お——い！ 待て？』

またその舟から呼ぶ聲がした。

小刻みな櫂の音と共に、水に落ちた松明の灯がチラ／＼と碎けて、その舟は次第に此方へと近寄つて來た。

胸を轟かして、それを待つてゐるのは玄光ばかりではなかつた。柴の束の中に深くその身を隠くした人達も、既に事の何であるかを知つてゐた。危難が迫りつゝあるのを、所決すべき時が來りつゝあるのを……。かれ等は闇の中に顔を見合せた。義朝も鎌田も刀を堅く握つたまゝじつとしてゐた。いざと言

つたら、寄せて来た奴等を片端から撫斬にして、その上で潔ぎよく最期を遂げようと決心してゐた。櫂の音が頻りにした。そこからは見えなかつたけれども、その舟は既にかれ等のるる反対の側に近く漕ぎ寄せて來てゐるに相違なかつた。水の動く氣勢も、人の乗つてゐるさまも——否、振上げた松明の灯も積んだ柴の中を通してチラ／＼と見えるやうな氣がした。

『お——い。』

果してもうそこに來てゐた。『おい、その身達は何處から來た——』

その舟は既に此方の舟の右の舷にひたりと漕寄せてゐた。

『……………』

此方では何も言はなかつた。暫し黙つてゐた。

『こら！ 何處から來た舟だ！ はつきり言はなけりや曲事だぞ！』

その時、玄光の聲は高くあたりに響くやうにきこえた。

『何を言つて御座る！ 何處の舟も彼處の舟もありはせぬ。この玄光を見覺てはをられぬか？』

かれは舳のところ急にその姿をあらはした。

『鷺栖の玄光か？』その舟の中のかねてよく知つてゐる平太といふ男がかう驚いたやうにして言つた。

『何？ 鷺栖？』

もう一人の方の烏帽子をした肥つた男もかう言つて、それをはつきり見るために松明を高くかかけた。

『あやしいものでは御座らぬぞ』

玄光の高い聲がまたあたりに響いた。

『しかし、この夜更けに、何うして通るぢや？』

番人達もいくらか聲をやさしくした。

『何うしてと申しても、別にわけも御座りませぬ。』

『しかし、何も、この深夜にこゝを通らでも好いではないか？』

『それでもな、節季で御座るでな——もう今日、明日しか日が御座りませぬでな？ 夜だとして、遊ん

ではをられませぬでな？』

『積んであるのは柴ぢやな？』

『さやうで御座る——』

『それから何處まで行くぢや』

『多度まで行くぢや——』

それで済むのかと思つたら、さうではなしに、烏帽子をした肥つた方の番人が、そのまゝ向うの舟から此方の舟へと乗移つて來た。

『別にあやしいことも御座るまい……。玄光ぬしなら、この身達もよく存じてゐる。別條はあるまい——』かう舟の中に残つた平太といふ方の男は言つた。

『さうぢやな、怪しうはあるまい……。しかしな、これもこの身達の職務ぢやでな。一わたりは調べにやならぬで——』かう言つてその男は舳に行つて、その下のところを松明で照した。玄光ははらくした。もし見破られたら、有無を言はせず、唯、一打に——かう思つてかれは刀の鏢のところを強く握つた。

たしかに見破られたと思つたのは玄光ばかりではなかつた。義朝も鎌田もさう思つた。尠くともその男の持つた松明の灯は、積柴の上を照した。

しかもその男は、深くも調べようとはせず、『向うは柴だな？ よし、よし……。大事ない……。』かう言つてすぐ此方へと引返して來た。

『行くのは、多度までぢやな？』

『さやうで御座る——』

いくらかほつとしたといふ調子で刀を握つた手を緩めながら玄光は言つた。

『や、それでは……。えらう邪魔をしたな。』

松明を持つたその男は、かう世辭を言つて、そのまゝ向うの舟へと乗移つて行つた。

舟に残つた方のもうひとりの男は、すぐ權を押ながら、玄光に向つて、

『歸りは明日ぢやな？』

『そのつもりぢや』

『歸りに寄つて行かぬか？ 兵衛が來てゐるで——』

『都合で寄るも知れん！』

かう玄光が言つた時には、舟はずつと離れて來てゐた。此方の船頭も頻に權を押始めた。水に落ちた松明の灯の影が舟の動くのにつれてゆらくと揺いた。

二つの舟の距離は次第に遠くなつた。しかしいつあとからかれ等が追かけて來るか知れないやうな氣がいつまでもしてゐた。玄光が積柴の方に行つて始めて次のやうな話をしたのは、それからずつと下流まで下つてからのことであつた。

『本當に、あの時ははつとしました。これはとても駄目だと思ひました……。いざと言つたら！ と思つて、これを堅う握りつめてをりました——』

玄光は刀を握る眞似をして見せた。

『本當ぢやつたな？ 此身もさうぢやつた——とていかんと思つた……』
これは義朝だ。

『しかし、油斷がなりませぬぞ！ あとから追うて來はしませぬかな？ こつちの意氣込を見たので、これはとていかなはぬと思つて、一時、あゝして引返つたのではないかな？』まだその疑ひから鎌田は全く離れて來られないやうに見えた。

『もう大丈夫で御座る……。たしかにそれは大丈夫で御座る……。この身もあの時は、ちよつとさう思ひましたが、矢張、見られたやうに此方では思つても、向うでは見えなかつたので御座るな。松明を振上げては見たが、積柴だけしか見えなかつたので御座るな？』

『さうかな……それならよいけれど！』

『それはたしかに大丈夫で御座る。もし、さうであれば、すぐあとから大勢して追かけて來ねばならん。たしかに、大殿の運が好かつたので御座るな！』

『さうかな！ しかし、はらくした。餘程跳り出さうとした！』義朝も笑ひながら言つた。

金王丸も起上つて、船頭のところへと行つて、そこから過ぎて來た上流の方を眺めた。府の津の灯影はまだ遠くにそれと指さされてはゐるけれども、大きく屈曲した川はそこから全く南を指して、山脈と並んでたぶくと音を立て、流れてゐた。そこに鎌田も出て來た。

『舟が追うて來るやうな様子はないか？』

『大事御座らぬ。』

鎌田も一わたり上流の方を眺めた。灯の影も次第に遠く遠くなつて行つた。川もあちこちで支流を容れて、水量も多く、幅も廣く、今では全く大きな河になつてゐた。ザ、ザと水を切る櫂の音が絶えずあたりに響いてきこえた。

鎌田は義朝のゐる方へと戻つて行つたが、始めて心を安んじたといふやうに『それにしても、たしかに見られた！』と思ひましたがな！』

『本當ぢや。』

『これでやつと安心した！』

『でも、まだ、この下流に何かありはせぬか。何でも油島とかいふところがあつたと思ふが、あそこにも番所がありはしなかつた？』

『あそこは何でもありません。』

『しかし、油斷は出來ぬぞ！ まア、これで好いなど、思つて、不意を打たれることもないとは限らぬでな？』

『案ずる事ははや御座りませぬ……。あそこさへ無事に通ればあとはたとへ咎めるところがあつたに

しても、高が知れてをります……。もはや知多に行つたと同じことで御座る……。それにしてもあそこに行つたら、ゆつくり休むのですな？ 一日ぐらゐるはぐつすり寝込まなければ、とてもとのやうな身にはなりません。鎌田は元氣好ささうに莞爾しつゝ言つた。その胸には里に置いてある妻のことがどが頻りに思ひ出されて來てゐた。

『海を越さぬ中はそれでもまだ心が、りぢやな……』

『大丈夫で御座る！ その油島のことなら、何でも御座りませぬ。それに、海にしたところでわけはありませんから……。波は高くはなし、そんなに遠くはなし……』

『どのくらゐあるな？』

『海上四五里もありますかな？ この舟が油島から松田につくのは、夜の明ける頃でせうから、そこで、作兵衛か、源六のところへでも寄つて、少し休んで都合を訊いて、もし舟がなければこれで行つても好いので御座るから……。明日の午の刻か、おそくもひつじの上刻には、内海にはらくに着きますから……。もはや行きついても同じやうなもので御座るな。』

金王丸はその時ふと氣が附いたと言ふやうに、延壽の持たして寄こした小さな包をひろけた。そこには舟の中で食ふために用意された餅だの菓子だのが澤山に入つてゐた。

『すっかり忘れてゐました——』

『あゝ、これは好いものが御座るな。鎌田はそれを手に取つて、旨さうにして食つた。

『まア、此處に來て、やうやく人心地がついたといふものだ——』

義朝も喜んでゐるけれども、しかも何となく憂鬱に見えた。餅も一つ食つただけで止した。朝長や頼朝のことなどがまたしても思ひ出されて來るらしかつた。

『これで、此處に身を暖めるものでもあると好いのだが、それはちと望みがすぎますかな？』

こんなことを鎌田は笑ひながら言つた。

義朝もさう思つた。これで酒さへあつたら——？

『しかしそれももうぢきで御座るな。我慢するのですな？ 知多に行けば、酒だけはいくらでも御座るで——？』

『さうぢやな』

『驚栖ぬし、何うぢや、餅でも食はぬか？』

さつきから舳の方に行つて船頭と話してゐる玄光を鎌田は呼んだ。

暫らくした後には、『まだ、寅の刻ぐらゐるなもので御座りますので一寝入りなさいませ！』かう言つて鎌田はそこに身を横へた義朝の上に上着をかけてやつた。船の底に當る水の音が微かにした。

舳に小さな灯をつけたその舟は、ザ、ザと水を切る櫂の音をあたりに低く漂はせつゝ、右に闇をしき

つてそれと黒く輪廓を見せてゐる山脈に添つて絶えず静かに下つて行つた。

四六

多度山の傍を通る頃には、夜は最早徐かに明け始めて、濶々とした平野の向うに、雪で塗られた高い山や、深い巒を見せてくれたと連つてゐる丘陵や、水田の畔に行儀よく竝んでゐる榛の木立などが微かにそれと指さされるやうになつたが、もう少し下つて、高須、萱野あたりに行つた時には、早くも岸近く鶏の聲がきこえて、川沿ひの百姓家の屋根から朝炊の烟が細く立のぼつてゐるのが見えた。

雪は大して降らなかつたけれども、それでも、岸の枯れ伏した蘆荻や、ところどころに繋がれてゐる小舟などの上を薄白くしてゐた。

舟の中では、起きてゐるものは船頭ばかりであつた。最後まで話してゐた鎌田もつひには舷に頭を寄せかけるやうにして眠つて了つた。中でも一番よく熟睡してゐるのは金丸で、櫓を立てるところに仰向に頭をのせて、烏帽子の落ちたのも知らずに、大きな鼾をあたりに轟かしてゐたが、その傍には、義朝がいくらか身を横に、顔を上着で蔽つて、足を縮めながら、これもすやすやと呼吸を立て、眠つてゐた。玄光も遅くまで起きてゐた方だが、『少し眠くなつて來た。一寢入やらう。』かう言つて、これも舳のすぐ此方の穴のやうになつてゐるところに頭を入れて、半身を外に出しながら、心持好きさうに眠つ

てゐた。そして金丸と鎌田と身を横たへてゐる此方には、昨夜食つた餅や菓子が残りがそこらに一面に散らばされたまゝになつてゐた。

船頭の櫓の音が頻りに曉の静かな空氣の中に響いてきこえた。

段々摩れ違つて行く船の数も多くなつて行つた。今日は節季なので、各自に忙しいと見えて、米を積んだり薪炭を積んだりした船が早くから二隻も三隻ものぼつて行くのであつた。またところに由つては、小さな岸の船着から急いで船を漕ぎ下してゐるものなどをも見かけた。ある船と摩れ違つた時には、船頭同志互ひに知つてゐるので、

『早いな！ 何處へ行くのぢや？』

『ぬしは？』

『府の津までちよつと行つて來るで——』

『それは忙しいな。何しろ、今日一日だでな？』

『ほんによ……。正月になつたら、また遊びに來や——』

『行くだよ。澤山旨いものを拵へて待つてゐろ——』

『よし、よし……』

こんなことを言ひ交してゐる中にも、舟と舟とは互に離れて遠ざかつて行くのであつた。

此處等あたりでは、川は右の丘陵の麓にびつたりくつゝくやうになつて流れてゐるので、そのところどころに點綴されてある屑家も、その屋根から靜かにのぼつてゐる朝炊の烟も、百姓の上さんがせつせと榎火を竈の下に焚いてゐるのも、鶏が二三羽そこらに餌を拾つてゐるのも、枯蘆の中に舟が二隻も三隻も繋いであるのも、何も彼もはつきりと手に取るやうに見えた。あるところでは、その丘陵を此方から向うに越して行く道のうね／＼と迂回してゐるのがそれと指さされて、その峠近くに大きな笠松の靡いてゐるのなどもそれと見えた。

晴れた日ならば、いつも輝かしい朝日がまともに當つて、幾筋にもわかれた水脈がキラ／＼と美しく光つて見たされるのが常であつたが、今朝はあたりは錆色に曇つて、さつきまで微かに見えてゐた遠山の雪も、いつかその雲の中に埋もれつくして了つた。雪がまたチラ／＼と落ちて來た。

油島の船着を通り越した頃には、義朝も金丸も玄光も皆起き上つた。鎌田だけが寢てゐた。

川は驚くほど廣くなつてゐた。それが昨夜出て來たあの川だらうかと思はれるくらゐであつた。それといふのも、油島の少し上流で、左から來る大きな木曾川と合して、溶々として海に向つて流れて行つてゐるからであつた。次第に島が見え出して來た。大きい小さい島が。松の五六本生えてゐる島が。ごた／＼と漁村の人家の重り合つてゐるやうな島が――。そしてその向うにはどんより灰色に錆びた海が遠く展げられた。

『鎌田どの?』

玄光はかう揺り起した。

鎌田はすつくと起上つたが、驚いたといふやうな顔をして、眼を睜つてあたりを見廻した。

『もう松田に來たで御座る!』玄光は言つた。

『おゝさうか?』鎌田はまたあたりを見廻して、そこに義朝が烏帽子をつけてしやんとしてゐるのを眼にして、『おゝ殿ももうお起きになりましたか?……おゝこれは? もう、油島を通つて了つたのぢやな……。これは不覺ぢやつた。本當ぢや、もう松田ぢや』

玄光は鎌田に向つて、

『それで、何うなさるな? 藤六のところにお寄りなさるか? それともまた――』

『さうぢやな……。殿! 殿は何うなさる。殿もたしか藤六を御存じの筈ぢやと思つたが――?』

『わしは知らぬ!』

義朝は頭を振つた。

『さやうで御座つたかな……。あの府でくらべ馬があつた時に、藤六の馬が三番つゞけて勝つたことが御座つたがな……。あの時殿はお出でだつた筈ぢやが?』

『あ、あの鹿毛の……?』

『さやうで御座る……』

『あ、あの馬が藤六か、さうか。』しかも義朝はその騎手の顔は覚えてゐなかつた。

『作兵衛だつて、矢張、殿は御存じないのだから、藤六の方に寄るのが好いちやらう？』

鎌田は玄光に言つた。

『ぢや、さういふことにしませうか！』かう言つて玄光は舷にゐる船頭の方へへ行つた。そこから、左岸に偏つて、ごたぐと人家のかたまつてゐるのが、家々の朝炊の煙が低く屋根の上に漂つて網をかけて干すための棹の縦横に連つてゐるのが、舟が二三隻岸に繋がれて漁師らしい男が二三人かたまつて焚火をしてゐるのが見えた。そしてその向うには、低い島を一つ隔て、長島といふ島の大きく横たはつてゐるのを誰も眼にした。

舟は静かに岸に添ふやうにして下つて行つた。最早そこまではいくらもなかつた。次第に人家も、屋根も、炊烟も、焚火も近く近くなつて行つた。やがてその船着のところへと行つて舟はとまつた。

『それでは、鎌田どのが一緒に行つて下さるか？』

『よし、よし。』

かう言つて、玄光と一緒に鎌田は舟から下りて、濱になつてゐるところを向うへと歩いて行つた。船頭もあとから續いた。

義朝はじつとそれを見送つてゐるが、何とも言はれないわびしさが、憂鬱さが、身も世もあられないやうな、そこに何か眼に見えないものがあつて、その身を深い筭の中に引込んで行くやうな悲しさが、ひととかれの胸を塞ぐやうにした。かれはじつと大きく眼を明いてあたりを眺めた。そしてその黒い瞳には、灰色したわびしい朝の海と空とが映つた。

四七

船の中に留つて待つてゐるのもさう長い間ではなかつた。やがて漁村の一部の長らしい藤六を先に立て、鎌田と玄光とが迎へにやつて來た。

平生ではとても傍には近寄れないやうな武將の訪問を藤六は此上もなく感謝してゐるやうに、喜ばしげに頻に頭を下けて迎へた。

『でも、家まで行つて迷惑をかけるのは大變ぢやで、こゝで接待に預からうではないか？』

かう義朝がいふと、藤六は大地に跪かぬばかりにして、

『何うか、さう仰せられずに——むさくるしい處では御座れど、ぢきそこで御座りますほどに、何うか御出ましを願ひたい……。鎌田どの、何うか大殿にさう申し上げて下されませぬか——』

あとの半は鎌田の方に向いて頻りにその取成し方を頼んだ。

『殿!』鎌田は義朝に向つて言つた。『折角あのやうに申しますから、ちよつとお上りになつてはいかゞで御座りませう? もうこれからは、知多まではわけは御座りませぬで?』

『でもな……』

そんなにしてゐて、また何か大事でも起りはせぬか。それよりは此處で接待に預かる方が案じなうて好くはないか。義朝はさうじかには言はなかつたけれども、さうした意志をその態度でそれとなしに鎌田に示すと、

『本當に、それは御案じは御無用で御座るゆゑに——ちよつとなりお上りになる方が好いと思ひますが——』

『何うか、むさくるしい家では御座りますけれど——』

藤六はまた頭を下けた。

『その方がよろしいと存じます……。すぐそこで御座りまするほどに——』傍にゐた玄光もかう勧めた。

『では——』と言つて義朝は立上つた。藁沓ではなしに、そこに藤六が持つて來て並べた草履をかれははいた。かれ等は半ば低い崖、半ば砂濱になつてゐるやうなところをそのまゝ、集落の方へと歩いて行つた。

汚ない、混雜した、物の腐つた臭氣のわるく鼻を撲つやうなせまい通、低い庇と庇とが重なり合つてそこから朝炊の烟が靡いて來てゐるやうな通、漁師の上さんが汚ない着物の胸をはだけて子供に乳房を含ませたり今起きたばかりの爺がぼんやり立つて此方を見たりするやうな通、それを半分以上歩いて行つたところに、こんな漁村にはめづらしい、これを見ただけでも、この集落の分限者であるといふことのすぐわかるやうな瓦葺の門があらはれて、それを入つた向うには、海の一目に見わたされる、そこからは河口に出入する船の動靜がいかやうにも分るといふやうな室が廊下を取廻してすつと長く連つてゐた。義朝達は中庭からちかかにその室へと案内されて行つた。

そこではかれ等は下にも置かないやうな取扱ひを受けた。縁を取つた疊が持ち出されたり、何年にも取出されたことのない立派な圓座が持ち出されたり、寒いからと言つて、火の活々と起きた丸い火桶が運ばれたりした。しかし義朝は何となく氣が進まなかつた。いかにも憂鬱さうに、いかにも物思はしさうに深く何事をか考へ込んでゐた。鎌田は頻りにそれを慰めるやうにしたけれども、しかも竟にかれをその中から浮び上らせることは出来なかつた。

それはこれまで度々起つたものとは違つて——わざと齒を喰ひしばつたやうな自暴自棄な心持とは違つて、わるく沈み果てた、ともすれば涙を誘ひ出さずには置かないやうな状態に心も身も置かれてあるのを義朝は感じた。

かれ等はそこで酒を飲み、朝餉を食ひ、知多にわたる船の有無をあちこちと訊ねさせたりなどして、巳の刻近くまでゐた。風はなかつたけれども、天氣は雪の降つた翌日のやうにからりとは晴れず、灰色の空がをり／＼暗くなつて、雪片が風花のやうにチラ／＼落ちて來たと思ふと、またすぐにそれが止んで了つたりした。『さやうで御座るな……。今日一日はかうした模様で御座らうな？　しかし大したことは御座るまい……。ことによれば、ひつじの刻あたりからあがるやも知れませぬ……。』かう廊下に立つてあたりを見廻してゐた藤六は言つた。

『さうお急きにならずに、一夜は藤六がやどにもお泊りになつてはいかゞで御座るか？　こゝから内海はわけは御座りませぬで——』

藤六はかうも言つた。

鎌田も立つて海を眺めた。晴れた日ならば、秋葉を祀つた内海の山も、長く灣内に突出してゐる美崎の鼻も、そこからそれと指さすことが出来るのであつたが、現に二三年前に此處に來て、矢張、この室から眺めた時には、奥田濱の鼻の白い砂濱すらも見る事が出来たのであつたが、今日は海も空も灰色に曇つてゐるので、半島の面影も全くその中に包まれて了つて、對岸の大野、常滑あたりの山をすらそれと眺めることが出来なかつた。唯、河口に入つて來る五六隻の船の帆の暗く佗しく浮んでゐるのを見ただばかりであつた。

藤六は頻りに酒を勧めた。しかし義朝も鎌田も落附いてそれを飲んでゐる氣にはなれなかつた。かれ等は他日を誓つた。今度來た時には、是非とも二日も三日も泊めて貰はうなど、言つた。爲方なしに、藤六は玄光や船頭と一緒に知多にわたる船をさがしに出かけた。

しかし生憎なことには、節季の今日は、船が出拂つて、何處にも一隻もなかつた。

『いつもなら、こんなことはないので御座るが、どうも止むを得ませぬ。もう一日こゝにお滞りになられてはいかゞで御座るか？』戻つて來た藤六はまたかう言つて勧めた。

『いや、さうしては居られぬ——』一刻も早く向うに渡りたい鎌田は、玄光を顧みて、『それでは止むを得ぬから、あの船で參らうか？』

『さやうで御座るな……。』

『行けぬことはあるまい？』

『さやうで御座るな。行けぬことは御座らぬが？』

『無理か？』

『いや、この風気で御座るで、行けぬことはないのう？』

玄光はあとの半分を船頭に向つて言つた。

『大事ござりませぬ——』

かう船頭は答へた。

で、その船で渡ることは一決して、皆はそこから出て来た。藤六も濱邊まで送つて来た。もう少し向うに行つて、一江島の濱邊で柴を卸して、それから帆を上げれば、さう好い風とは言ふことは出来ないが、兎に角、追手であるから、さう骨も折れずに樂に向うに着くことが出来るであらうと誰も思つた。岸には藤六やその村の漁師達が竝んで、徐かに水面に浮んで行くその船を見送つた。

次第に船は海へと出て行つた。此處に来ては、もはや權は駄目だつた。船頭は櫓を船尾のところにつけて頻にそれを押した。船は次第にその漁村をあとに残した。

梶島を前にしてぐるりと廻ると、小さな島嶼がまた三つも四つもあらはれ出して、その向うに大きな一江島がひろくとした濱を持つてあらはれ出して来た。

彎曲してゐる濱邊が、枯れた芦荻の雪に白く打伏してゐるのが、海からは見えなかつた松の竝んで立つてゐるのが、次第にそれとあらはれ出して来た。低い屋根の漁師の家も五六軒見え出して来た。

かれ等は取敢ずそこで柴を下さうとしてゐるのであつた。船頭は始めはこの舟で知多まで渡るつもりはなかつたので、歸途に到るところでその柴の束を下して賣つて行かうと思つて来たのであつたが、嫌應なしにさうきめられて見れば、柴の束は何うしても一時何處かに下して置かねばならなかつた。船は靜かにその濱の彎曲したところへと行つてとまつた。

一番先に船頭が舟から上つた。玄光がそれに續いた。

船頭の姿はすぐそのとつ、きの漁師の家へと入つて行つたが、暫らくしてそこから出て来た時には、かねて知つてゐるらしい漁師の男と二人で此方へと歩いて來てゐた。その男は玄光をもよく知つてゐるらしく、そこにかねらの立つてゐるのを見て、叮嚀に挨拶して、

『殿には久し振りでごしたな?』

こんなことを言つて愛想よく笑つた。

邪魔だといふので、鎌田も金王丸も義朝も皆舟から岸に上つた。やがて舟から岸へと踏板がわたされて行つた。

それをじつと見てゐた義朝は、感慨無量といふやうに、

『それでも、この柴の束があつたので、何んなに助かつたか知れぬな?』

『さやうで御座るとも……。この柴の御蔭だと申しても好いで御座るな? それにしてもよく見えなかつたのですな? たしかに見られたと思うたが——』

『さやうぢやつたな?』

『本當にあの時は、びつくりしました——』

傍に立つてゐる金王丸も合せた。

船頭と漁師の男とは、その柴の一束を二人して持つて、せつせとそれを岸に運んで、その松原の角のところを持つて行つて積み上げた。しかし、それはかなり多く積んであつたと見えて、容易におしまひにはならなかつた。二人が何遍も行つたり來たりする度に、舟から岸に渡したその踏板は、ギイ／＼音を立て、弓か何ぞのやうに曲つた。

あたりを見廻してゐた鎌田は、ふとその疎らな松原の奥に小さな華表と祠とのあるのに眼をつけて、そのまゝそつちの方へと歩いて行つた。

義朝も眼をそつちの方へと移した。脊の低い鎌田がずつと歩いて行つて、始めはその華表前で立留つたり何かしてゐるが、その祠の中に入つて行つたと思ふと、急に蹲踞んで叮嚀に跪拜してゐるのが手に取るやうに此方から見えた。(何の祠だらう？ 何を祀つた祠だらう？ あんなに叮嚀に禮拜するのは？) こんなことを思ひながら義朝は見てゐた。

暫らくしてから鎌田は莞爾しながら此方へと戻つて來た。

『何の祠ぢやな？』

義朝は訊いた。

『殿！ 再度の旗上げの好い前兆で御座るぞ！』

『何故ぢや？』

『何だと思召す？ あの祠は？ 正八幡で御座る！』

『正八幡！』

義朝もかう言はずにはゐられなかつた。こんな島に、こんな島の松原の中に、その身達の信仰する神の祠を發見しようとは夢にも思はなかつた。

『本當か？』

『何で偽を申しませう。この身もまさか此處に正八幡がゐますとは思はなかつたので、始めは唯小さな祠があるな！ ぐらるにしか思つてはゐませんでしたが見ると、正八幡では御座りませぬか？』

好い前兆で御座りますな？ 殿！』

鎌田に伴はれて、義朝もそつちへと行つた。

その小さな華表の前に行つた義朝は『ほ！ 成ほどこれは正八幡だ！』かう言つてそのまゝづか／＼とその祠の中へと入つて行つた。

かれは鎌田のやつたと同じやうにして、長い間手を合せて祈念した。松の鳴る音が靜かに頭の上でした。

やがて立上つて此方へと出て來ながら、

『それにしても、何うしてこのやうなところにこの宮が祈られてあつたか？』

『たしかに旗上げの好い前兆で御座るな。遠からぬ中に、東國から京へ攻め上つて行くことの出来るしるしで御座る！』

『兎に角に難有いことぢや。』義朝はかう言つたが、華表の前で振返つて、もう一度手を合せた。

その松原の一角は、さうでなくとも、静かな心持の好いところであつた。恐らくこのあたりの集落の中に源氏に心を寄せてゐるものがあつて、それでかうした静かなところにその信仰する神を祀つたのであらう。そしてそれを鎮守のやうにして、をりくやつて來ては詣で、行くのであらう。さう思ふと、義朝はまた別な意味で一種の心強さを感じた。何も失望することはなかつた。源氏に心を寄せてゐるものは到るところにある。東國に行きさへすれば、再び京に上る程の兵共を集めるのはわけはないやうにすらかれには思はれた。

此方に一步二歩戻りながら義朝は言つた。

『再び京にもどることが出來た曉には、この祠をいかやうにも大きくしてさし上げると申して願ひをかけた——』

『左様で御座つたか？ たしかにこれは好い前兆で御座つた。故義家公も、大祖父の頼義公も陸奥の安部を攻められた時には、いつもこの正八幡の神をその守護神にせられて御座つた……。何にいたせ、かういふところに、この祠のあるといふのは、たしかに不思議で御座るな——』

『さうぢやな』

そこに玄光がやつて來たので、

『一體此處は何といふところぢやな？』

義朝は訊いた。

『笠が森と申しまする……』

『この正八幡の祠は、昔からあつたのかな？』

玄光はちよつとそつちを見たが、『それは正八幡で御座るか？ この身もちつとも存じませぬが？』

『昔からあつたものかな？』

『さういふ話は少しもきませぬがな？』

『里人が祀つたのかな？』

『さやうで御座りませう——これまで少しも存じませぬ。』

玄光も金丸もその小さな祠の前に行つて手を合せた。

舟ではまだ柴を運び出してるたが——舟と岸とを連絡した踏板の上を船頭と漁師の男の行つたり來たりするさまがはつきりとあたりに浮き出すやうになつて見えてるたが、その向うには、どんよりとした海が、ところどころに小さな島を點綴した灰色の海が、岸に打寄せて來る波の音もないやうな海が、疎

らな松の林を透して、靜かに繪のやうに展けられてゐた。義朝も鎌田も黙つてそこに立ちつくしてゐた。やがて氣がつくと、舟では最後の柴の一束をも運び終つたらしく、船頭が頻りにその筵をその真中へと敷き直したりなどしてゐるのが見えた。玄光と金丸丸とは急いでそつちへと行つた。

船頭と漁師の男とは、積み上げた柴の束のところで、猶ほ何か頻りに話してゐたが、やがてそれも濟んだらしく、急いで此方へと走つて來た。今や出發する時は來た。義朝も鎌田も踏板を靜かに踏んで、再び舟の中へと入つて行つた。

疎らな松原の中の小さな祠——それを義朝はもう一度祈念した。舟は船頭の突張つた竿につれて靜かに岸を離れて行つた。

四八

少し沖に出たところで、船頭は櫓を起して、縦横に綱を張つた。帆は上げられたのである。

風にバタ／＼と動く帆布の裾が烏帽子に觸るので、義朝は少し前の方へと身を動かした。鎌田も少し右にその身を寄せた。

『もう安心で御座るな?』

『さうぢやな……』

『それでもよう此處まで來られましたな……?』

『さうぢやな』

義朝はいかにも憂鬱さうに答へた。鎌田は玄光に向つて、

『追手ぢやで、思つたより早う向うに着くぢやらうな?』

『何うで御座るかな?』玄光は考へて、『追手は追手でも、さう強うは吹かぬによつて、早う參りますまいな……。何しろ、あの通り帆を張らしましても、十分にふくらむほど風を受けぬので御座るほどに……』平らな、フワリとした帆を鎌田も見上げて、『さう言へば、さうぢやな……。もう少し風があれば好いのぢやが——。いつだつたか丁度好い追手で、ひと時とかゝらぬ中に、向うに着いたことがあつたが、さういふ時は滅多にはないな?』

『さやうで御座る——』

さうは言ひながら、帆を張つた船脚は矢張早く、時の間に大きい小さな島の點綴されてあるところを向うに出て、二三隻の船の入つて來る河口を遠く此方から見わたすやうな形になつた。雪は最早落ちて來なかつたけれども、空も海も全く灰色に塗られて、一種くらいわびしい氣分があたりに鬱陶しく漲りわたつてゐた。

義朝の胸にはまたいろ／＼なことが思ひ出されてゐた。その癖その浮んで來ることは、皆なばら／＼

で、とてもはつきりとつかむことの出来ないやうなものだつた。ひよつくり右衛門督の首が浮んで來るかと思ふと、今度は雪の中で敵に捕へられた頼朝のことが浮んで來た。それはその海の上に帆を張つて漂つてゐる船ばかりではなく、かれの心も全く灰色のわびしい空虚の中に漂つてゐるやうな氣がした。玄光と鎌田との話は容易に盡きやうとはしなかつた。

『さうか……。そんなに行つたことがないのか？ あのくらべ馬のあつた年なら、もう十年も先ぢやな？』

『さやうで御座る……。何にしても、向うにわたるのは億劫で御座るで——』

『さうぢやな、ちよつとこの海が億劫ぢやな……。行つて見ればわけではないのぢやけれど——』

『あちらには長くるられますか？ それとも——？』

『何うなるかわからぬが、さう長うは居られぬ？ 何にせよ、東國に一刻も早く參らねばならぬでな……』

『さやうで御座るな……。それでは、ぢかに向うに、三河の方へおぬけにならるゝので御座るな？』

『まア、しかし、少しは休んで行くつもりぢや。馬や物の具もあそこで何うかせねばならぬでな——』

『兎に角、あそこに參れば、落附くことは出來ますな。』

其話はこの風にな長く續いた。鎌田は何方かと言へば上機嫌であつた。ほつと呼吸をついた人のやう

でもあつた。かれは藤六が入れてよこした小さな瓶から酒をついでそれを義朝に勧めたりなどした。

沖遠く出ても、風は依然としてなかつた。帆は平でそしてフワリとしてゐた。それは丸で絶望と悲哀と死とを象徴した一羽の怪鳥が灰色の海と空との中間にその翼をひろけてでもゐるやうであつた。靜かに凧いだ海は茫としてゐた。

四九

もはや明日が正月だといふので、海に添つた田舎の小さな集落でも、餅をつく音などが到るところに聞えて、砂の上に揚げられた船の舳にも、小さな注連繩に小松の根を結び附けたものが飾られてあつたりなどした。若者達も多くは漁を休んで、沖に出て行く舟などは一隻も見懸けなかつた。

濱から少し此方に入つて來たところには、半は崖のかけ、半は磯傳ひにすつと繞つてゐるやうな一筋の路があつて、左に行けば野間、右に行けば豊濱といふ形になつてゐるが、その崖の下に小さな酒を賣る店があつて、そこに漁村の若い者どもが五六人も集つて、頻りに酒を飲みながら賭博をやつてゐた。

『さう言へば、京の合戦では、源氏が負けたつて言ふぢやねえか？』

『さうだつてな？』

かう肥えた方の若者が合せると、向うの方にゐた一人が、

『さう言へば、鎌田の殿も何うなつたかわからねえな?』

『あ、野間の婿どんか? あれも源氏ぢやつたな?』瘦せた方が引取つて、『さう言へば、今年の春頃見えてをつたぢやねえか?』

『おぬし、見た事があるか?』

『見たことがあるとも……。立派な侍ぢやつた——。何でも源氏では好い侍ぢや言うでな。今度の合戦にも、何うなつたかわからぬぢや。それにしても、侍なんかになるものぢやねえぞ、やれ平家だ、源氏だつて言つて、いざと言へば、すぐ命のやり取ぢやでな。』

『本當だ……。それから思へば、俺達はのんきぢや。鳥羽の渡合さへ氣を附けりや、舟がひつくりかへつて死ぬやうなこともねえし、漁はいくら獲つても獲りきれねえほどあるし、師崎に舟をつければ、好い女の子もをるしな……。』

『さう言へば、おぬし、あの北濱の女は何うした?』

『るるよ』

『るるはわかつてら。おぬしと何うしたといふのぢや——』

『俺達の手にはおへねえな?』

『意氣地がねえな? 取られて了つたんか?』

『女も好いが……。それよりも、これの方が面白いや——』

銅色をした顔の一人はそこにある賭博の席を指して言つた。

突然、その中の一人が、

『ほ! 噂をすれば影とやらぢや。野間の子息どんぢやねえか。あそこに若い殿が通つて行くぢやねえか?』

『ほ、成程——』

『北濱の歸りぢや?』

『さうぢや、さうぢや』

くしゃくしゃになつた軟かな烏帽子に太刀を帶したまゝ、野間の庄司の子息の景致は、伴もつれずにひとりてくく歩いて行つた。

『待て! 待て! 好いことがある——』そのわかい者の中からかう言つてひとりが飛び出した。

『殿! 若殿!』

向うに歩いて行つた景致の後から呼んだ。

景致は振返つて見て、事の何であるかを知つたといふやうに、頓着せず、そのまゝ歩みを續けて行つたが、あとからは頻に呼んで追かけて來るので、止むなくそこに立留まつた。

『何ぢや?』

『若殿! まことにすまねえが! 負けて、素つ裸になつて、大晦日といふのに、家にも歸れねえでゐるだが、頼みぢやで——』ひよこひよこ頭を下けて、『少し貸してくださらねえか?』

景致は厭な顔をしたが、かうした歸りを見られた上は止むを得ないといふやうに、懐から金を取り出して、それを三つほど投げてやつた。そしてあとをも振りかへらずにすたくと歩いて行つた。

子息の景致がさういふ風にしてそこらを歩いてゐる頃、その父親の庄司忠致は、野間の自分の屋敷からずつと寺の傍を通つて、海岸に近い集落の方へとその歩みを運びつゝあつた。それといふのも、年内にすまして置かなければならない用事があつたからで、さつきもその集落に僕を遣つたのであつたが、何うも思ふやうに話が纏らないので、今度は伴もつれずに自ら出かけて來たのであつた。

かれは何方かと言へば、丈の高い、肥つた、がつしりした體で、五十になつたかならないくらゐの年齢好であつたが、狩衣を着て、小さな古ぼけた烏帽子を被つて、てく／＼行つてゐるさまは、決して、こゝらあたりの金持とも大徳人も見えなかつた。それに、その態度から言つても、わるくこせ／＼したところがあつて、眼と鼻とくしやくしやに迫つてゐる顔のあたりにも慾の深い影がそれとなしに漂つてゐた。かれは到るところで、近處の百姓や、婆や、主婦たちから叮嚀な挨拶を受けたが——あるところなどでは、跪かぬばかりの辭儀を受けたりしたが、しかも、何處となく横柄で、たまさかに歩みをと

どめて立話をするやうな人達に對してすら、『それならそれで好いが、いつまでもぐず／＼しては困るな!』などと言つて、難かしい顔の表情を見せた。

京の合戦の話が此方にも傳はつて來たのは、それは昨日の午の刻の頃で、源氏が負けて大將も部下も何處に行つたかわからないなど、言はれてゐるが、かれ自身にしても、流石に娘の婿の鎌田がその中にゐるので、いくらか氣にかゝらぬことはなかつたけれども、しかもそれを何うしようと言ふのもなかつた。また源氏が負けて、何かにつけて困るとも思はなかつた。表面では源氏重代の家人と名乗つてゐたけれども、それはそのをりにつけての便宜だけで、根が平家出の系統であるだけそれだけ、いざとなれば、何方にでも味方をする事が出来るやうな軽い心持を持つてゐた。

かれの家は、此處に住んでから最早四代を歴て來てゐた。かれの父親といふ人は、純粹な源氏の家人で、そのため、祖父が蓄はへた金銀財寶を半分以上もなくして了つたが、しかしそのために、土地の豪族としては却つてその名聲を高めることが出來て、知多の長田といふ名は、その時代から多くの侍達の口にも上るやうになつたのであつた。従つてその父親の若い時代には、義家に従つて陸奥の軍にもついて行つたほどであつたが、かれの時代になつてからは、武士としてよりも、むしろ土地の豪族としての仕事の方にのみ一層多く心を用ひるやうになつてゐた。かれは父親の亡くした金銀財寶を再びもとのやうに蓄へることのみ骨を折つた。

「朶の刻あたりから、次第に青空が見え出して、今日は晴れまいと思つたにも拘らず、をり／＼日影が明るく林の中にさし込んで來たりなどしたが、かれの姿がその目ざした集落近くにやつて來た頃には、空はすつかり晴れて、一部分見え出して來た海の色も、午前の灰色とは違つて、夥しく鮮かな碧をあたりに擴げるやうになつた。

途で逢つたひとりの老媪は、叮嚀に辭儀をしてから、

『えらう好い夕けになりましたな！ これでは、好いお正月が出來さうで御座る！』

こんなことを言つて杖をつき／＼通り過ぎて行つた。

かれは何方かと言へば、靜かな落附いた心持で歩みを運んでゐた。ある運命がその前にこつそり近寄りつゝあるなどとはかれは夢にも知らなかつた。林の角を出た時には、かれの顔を夕日があかく／＼と照した。

義朝達を乗せた船が、濱川の海に落ちてゐるところからすつと岸の方へと漕ぎ寄せて來てゐるのはその少し前であつた。帆はまだ半揚げられたまゝになつてゐた。

伊勢灣を半横ぎつた頃から、天氣は急に晴模様になつて、夕日はなやかに帆に當つたが、やがては知多の陸地もそれとはつきり見え出して、秋葉山からかけて斜に起伏してゐる丘陵の海の鼻に盡きてゐるのもそれとさやかに指點されるやうになつた。帆の下にかたまつてゐる烏帽子や直垂や指貫や太刀な

ども、午後の澄んだ空氣の中に鮮かに見えてゐた。

『あの岩のところから上るのが一番近いのぢやが、あそこは何うぢやらうな？ 寄せられぬかな。』鎌田はこんなことを言つたが、何うも、そこには波があつて、とても寄せられさうにも思へぬので、爲方なしに、そのむかうの濱川の落ちてゐるところへと向けて舵を取ることになつた。沖には、鳥羽の水門の方に白い波が立つて、雨後の海の色がそれを指されて眺められたが、此方は岸に近くさゞれ波がちよろ／＼と白く打寄せてゐるだけで、此頃にはめづらしい夕暮の風ぎがあたりに展けられてゐた。

濱の向うには、松原が海風に靡いて竝んでゐて、そのかけに五六軒の屋根の低い漁舎があり、そこに一條の路が通じてゐるが、滅多に此處等に見たことのない一艘の船の頻に潮に逆らつて入つて來るのをその漁師や漁師の媼達は不思議さうにして見てゐた。

船は濱川の入口のところでもちよつと流されたが、すぐ取返して、そのまゝする／＼といくらか淀んでゐるやうになつてゐるところへと入つて來た。帆は既にあら方下されてあつた。

『それでは、そなたも、今夜一夜野間に行つて泊るが好いや——』

玄光がかう船頭に言ふと、

『有難う御座る！』と言ひかけて船頭は考へて、『でもな、わし等は此處に泊つて行く方が便利でねえことねえがなア』

『泊るところがあるか?』

『それはある——』

『何うせ、明日は正月ぢや。二三日此方で遊んで行つたら何うぢや。明日歸らにやならんこともあるまいが——』

『正月だ言うて遊んでもゐられねえだぞ?』

『嬢どんが待つてゐるか?』

『……それに、この風ぎは長持ちはあるめい思うぞ?』

『さうか。それもあるな。』

かう言つた時には、船は既にその岸へと着いてゐた。船頭は竿を捨て、岸に上つて、纜をそこにあつた太い杭へと繋いだ。

『こゝからその野間までは、まだかなりにあるのかな?』

かう義朝に問はれた鎌田は振返つて、

『いや、さう離れては居りませぬ。あと小一里くらゐもどらねばなりませぬど——』

『小一里? 随分あるな——』

『何うも此處のところは、船つきがわるうて、いつでも困るで御座る。それでも年に一二度はあのさ

つきの岬の鼻のところは船をつけることが出来るのでは御座るが——』

鎌田も義朝もやがて舟を見捨てた。金丸も玄光も續いて岸に上つた。

そこらの漁舎の人達——男や嬢や子供や年寄や娘達はすなりとそこに竝んで立つてゐた。此處等ではついぞこれまでさうした人達を乗せた舟を見たことがなかつた。かれ等は腰に佩びた太刀や袖を括つた直垂や京風の烏帽子などをめづらしさうにじつと見詰めた。

鎌田は賃金を船頭に渡した。いよゝ野間に向ふ時が来た。かれ等は疎らな松原と漁舎と岸に繋がれてある船とをあとにしてそのまゝ静かに海岸の道を歩き出した。

波が静かに濱に打寄せてゐるのが手に取るやうに見え、更にその向うに伊勢灣の中に散點してゐる大きな小さい島の夕日に彩られてゐるのが見えた。兎に角此處まで来ればもはや大丈夫だと誰も思つてゐるらしく、船の中では絶えず憂鬱にしてゐた義朝すらも、『それでもよく此處まで落ちて来た!』などと云つて、昨夜の積柴の中の光景などをその頭に繰返した。

『もはや案ずる事は御座らぬ。』

鎌田は何遍となく言つた。海岸を通つて行つても好いのではあつたけれども、山越しに行く近路があるといふので、五六町来たところから小道を右へと取ることにして鎌田が先きに立つた。

『おぬしが通つたことがなうては、間違ひはありはせぬかな? 本道を行く方が好くはないかな?』

かう心配さうに義朝が言ふと、

『案ずることは御座りませぬ。この身は通つた事はなくても、村の人などは常に往來するところで御座りまするゆゑに——？ 海に添うて行くのとは、三つのひとつも近う御座りまするゆゑ——』

『大丈夫かな？』

『案じ御座りませぬ——』

鎌田はぐんぐん先に立つて歩いた。

少し行くと、海は松原に隠れて、その代りに今度は小高い丘陵とその丘陵の半腹をぐるぐ廻つて行くやうな路とところに由つてはその小道が笹や篠に埋れて所在もわからなくなるやうなところがあらはれ出して来た。松原の代りに灌木の深く茂つた林があらはれ出して来た。行つても行つても容易に村は出て来なかつた。

半里ほど来たと思ふ頃、義朝は心配さうに言つた。

『また迷ひはせぬかな？』

『大事御座らぬ——』

『矢張少しは遠くとも、あの海岸を行つた方が好かつたのではなかつたかな？』かう言つたが、ふとその向うに、林のかけに、ひたと老いた媼が腰を屈めて枯木を拾つてゐるのを義朝は眼にとめて後につ

いて來てゐる金王丸を呼んだ。

金王丸は走り寄つた。

『あそこに、そら腰を曲けた媼がをるぢやらう？』

『は——』

『あの媼にひとつ路を聞いて見よ。間違つてゐるといけぬほどに——』

そのやうなことをなさらなくとも、大丈夫だと言つて、鎌田はぐんぐん先に立つて歩いて行つたけれども、主君の命令なので、金王丸は林の中を突切つて、そのまゝその媼の方へと近寄つて行つた。義朝も玄光も暫しそこに立留まつた。

此方で見ると、その媼に近寄つて行つた金王丸は、何か二言三言言つてゐるやうな様子であつたが、急に何か腹立しいことでもあつたと言ふやうに、そこにあつた手頃な石を取つて、それでその老媼の頭を打つた。老媼は頭を押へて、忽ち絶え入つて了つたものゝやうにそこに蹲踞んで了つた。

金王丸は急いで此方へと戻つて來た。

『何うしたのぢや——？』玄光は訊いた。

『あまり不吉なことを申すゆゑに——』

『あのやうに年の老いたものをあまりに手荒な？』

『でも、あまりひどいことを申しまするゆゑに——』

金王丸は呼吸をはづませながら言つた。

『何を言つたのぢや?』

義朝は氣に懸るといふやうにして問うた。

『あまりに不吉のことを申せしゆゑ、つひ怵えかねて……?』

『何と申したのぢや?』

『もはやそなたの主君は、この世にはない筈ぢや。かう申すでは御座りませぬか。この身が路をきいたその答へはせずに、すぐにそんなことを申しましたに由つて——?』

『何と言つたと? もう一度はつきり言つて見よ』

義朝にはそれがいかにも氣に懸るといふやうに見えた。

『そなたの主君は、この世にはもうない筈ぢやと申しました……』

『ふむ、この世にはない筈ぢやと……』義朝は頭を振つた。

『あまりに不吉なることを申しまするによつて、年老いたものとは存じたれど、つい手荒なことを致しました……』

静かな濃やかな夕暮がその山間に張りわたつた。

義朝の胸には、その田舎の静けさと楽しさとが深く／＼感じられて來た。かれはいつもに似合はず弱い涙組しい心持になつた。

義朝にはふと鎌倉龜ヶ谷にゐた時分のことが思ひ出されて來てゐた。それといふのも、そこらあたりの地形が——丘陵と丘陵との間に人家の散點してゐるさまや、路が丘から出て集落を越してまた丘に入つて行くさまが非常によく似てゐるからであつたらう。否、海の近いのも龜ヶ谷から由井ヶ濱の方へと出て行く感じをかれに思はせるに十分だつた。彼は現に、そこに、源氏の御曹司としてのかれが馬に乗つたり雀小弓を弄んだりして遊んでゐるのをはつきりと眼の前に見るやうな氣がした。静かな濃やかな夕暮の空氣もかれに一種なつかしい昔の追憶を誘はずには置かなかつた。

しかもかれ等は黙々として歩いた。話して見たところで、鎌田もその時分のことは詳しく知つてゐなかつた。

あとから行つた鎌田は小聲で金王丸に囁いた。

『腹が減らぬか?』

『さやうで御座るな、減りましたな?』

金王丸は笑つた。

『何うぢや——』『何處かで、餅にひとつありつきたいものぢやな』あとの半分は、聞えるか聞こえない

いぐらゐの小聲で金丸の耳元に囁いた。

『ひとつ頼んで見ますか?』

『さうぢやな……。殿だつて、腹が減らぬことも御座るまい。』

『さやうで御座るとも——』

金丸はいきなり一行の先に立つて、そのすぐ向うの家の方へと行つた。

そこでは、丁度一白つき上げて、杵を肩にかけて、蒸籠の糯の蒸されて来るのを主人は待つてゐたらしかつたが、寄つて行つた金丸の要求がそれとわかると、あとから續いて行つてゐる一行の方をちよつと見てすぐかう言つた。

『それはわけのない御用で御座る。此處で食ふだけなら、いくらでも進ませせうほどに——』

『それは有難い。』

鎌田もそれと聞いて急いで寄つて行つた。義朝も玄光も續いた。

玄光は金丸に向つて言つた。

『何うしたのかと思つたら、えらい智者ぢやつたのう……。この身もさつきから、さう思うことは思つてゐたぢや……。餘程この身から言ひ出さうと思つてゐたぢや……。』

『何しろ、この音をきいては、御馳走にならずにはゐられぬぢやな?』

こんなことを鎌田も言つた。

義朝も莞爾してゐた。しかしかれの心は矢張まだ遠い鎌倉の龜ヶ谷の少年時代にもどつて行つてゐた。かれはそこは鎌倉ではないかといふやうな幻影に捉へられた。

『お! さやうで御座るか? 野間の殿の許にお出でになる客人で御座るか? それとは少しも存ぜずに、いろく失禮を致して御座つた——』やがてそれと知つた主人は、かう言ひながら俄に新しい蓆などを其處に持ち出して來た。

『いや、構うては呉れるな? 構うて貰うと、却て固くるしうなるでな?』鎌田はかう言つて、『つい、音を聞いて御馳走になりたうなつたで、遠慮なしに飛び込んで來たのぢやで——』

『唯、何も御座らぬで……お構ひ申すことも何も出來ませぬ……』

かう言つた主人はおづ／＼としてそこに立つてゐた。

『此處は何といふところぢやな?』

鎌田は訊いた。

『内扇と申します——』

『庄司の館までは、まだ餘程あるかな?』

『もはや、いくらも御座りませぬ。すぐで御座ります……』

『半里もあるかな?』

『十町も御座りまするかな。あそこを廻れば、もはや館は見え出してまゐりまするほどに——』主人は向うの丘を指さすやうにして話した。

臼に移された糯は、主人の杵で頻りに搗かれてゐるが、それが終ると、そのまゝ、其處に置いてある蒸籠の中へとぢかに入れられた。貧しい百姓の家では、皿小鉢とでもないものであつた。餅は蒸籠のまゝでそこに運ばれた。

『納豆でも出して上げろや。』かう主人に言はれて、上さんは棧俵の中に造られてあつた納豆を匙ですくつて、それを皿に盛つて、鹽を入れて其處に出した。黒い塊になつてゐる砂糖なども出した。

しかも餓えた一行に取つては、それはこの上ない御馳走であらねばならなかつた。『うむ、これは結構ぢや。』義朝すらこんなことを言つて、そこに出してある納豆の中に箸でちぎつた餅を入れた。

『何に致せ、つき立てぢやで結構ぢやな?』

鎌田は禮を述べるともりで、かうそこに立つてゐる主人に言つた。

『かういふ貧しいものだでな。何の御愛想も出来ませぬでな?——』

『いや、それどころでない。非常に結構ぢや。』

鎌田も餅を長く引張るやうにして食つた。

玄光も金王丸も頻に箸で餅をちぎつた。向うでは、また新しい糯が蒸されたと見えて、ぱつと湯氣の白く立つてゐる蒸籠を上さんが奥から運んで来て、それをそのまゝ、臼の中にあけた。主人は肩にした杵を下して、頻にそれをこね廻し始めた。

暫らくした後には、杵の音が頻にあたりに響いてきこえ、それに竝んで手がへしをしてゐる上さんの頭の頻りに動くのが此方から見えた。夕暮の空氣は次第に家々の烟を籠めるやうになつて行つた。

『もう少し上げようかな?』

搗き終つた餅を取り上げようとした時に主人は言つた。

『いや、もう澤山ぢや……。前のでも、あのやうに残つたで……』

で、一行はそこから立上つた。あとに残つた鎌田が、金を一つそこに置くと、そのやうなものを買うわけはないと言つて、主人は頻りにそれを押し返した、やつてもやつても押しかへした。『野間の殿の家に行かれる客人からさういふものを貰うた言つては、あとでこまるでな——』かう言つて押しかへした。後には鎌田は止むなくそれをそこに放り出したまゝ、此方の方へと来て了つた。暫し行つて金王丸が振返つた時にも、その主人が茫然自失したやうにそこに立つて此方を見送つてゐるのをかれは眼にした。

『田舎の人達はあゝいふ金など見たことはないでな』

鎌田は歩きながら言った。

次第にその山間の村は盡きて、今度はいくらか開けたやうなところがあらはれ出して来た。その崖の大きな松のところを向うに行くと、その主人の言つた通りに、野間の庄の平らな土地が、草葺の百姓家や、疎らな松の林や、その林の向うに見えてゐる寺の屋根などを持つて靜かにそこに展開されて來てゐた。

『お！ もう來ましたぢや』

少し行くと、向うから歩いて來た奴僕らしい一人の男が、不思議さうにして立留つてじつと見てゐたが、やがてはそれとわかつて、『殿ぢや殿ぢや！』と言つて急いで此方へと近寄つて來た。

『お！ 清太？』

『鎌田の殿！ おら、何處か見たことある人だ、人だと思つて立つて見てゐたが、それもその筈ぢや。鎌田の殿ぢや！』傍に見知らぬ大將らしい人のゐるのを見て、叮嚀に辭儀をして、『おう！ 先に行つて、殿の來たことを知らせる！』かう言つてその男は急いで駆け出した。

その向うに寺の杉森のこんもりしたのが見え、尖つた水煙を見せて三重塔の立つてゐるのが見え、長く取廻した築土が見え、草葺の屋根の低い家屋に雜つて棟の高い瓦葺の邸が見え、何處からともなく立ちのぼつた夕炊の煙が茫とあたりに立靡いてゐるのが見えた。

鎌田は義朝の方を見て、『庄司は喜んで御座らう？』

『……………？』

『殿には是非一度來て戴くやうにと常々申して居りましたゆゑに——』

『こんな時でなければな？』

『いや、一層喜ぶで御座らう、何に致せ！ 殿になど來て貰つたといふことは、かれ等に取つて何のやうに鼻うごめかすことになるかわかりませぬゆゑに——』

『何うもな。面伏のやうな氣もするな？』

『そのやうなことが御座りまするものか。のんきにませぬ！ 遠慮することは少しも御座りませぬ』こんな話をしてゐる中にも、かれ等の歩みは進んで、いつかその低い人家の連つてゐる集落へと入つて行つた。こゝらでも餅を搗く音が處々にきこえて、門松の立て、あるのが夕暮の空氣の濃やかな中にそれと見えた。

寺の築土を通り越すと、庄司の邸宅はもはやそこらいくらもなかつた。やがてかれ等は大きな瓦葺の屋根とぐらりと取廻した築土との中ほどのところに立つてゐる門とを眼にした。否、そればかりではなかつた。そこからは清太の知らせによつて、家人奴僕ばかりではなく、忠致父子まで揃つてそこに出迎へてゐるのを誰も眼にした。

忠致は紋のついた黒い直垂に矢張黒の烏帽子をしてゐるが、一行の近寄つて來るのを見ると、いきなり蹲踞つて、叮嚀に辭儀をして、かうした田舎の佻しいところへと立寄られたことの謝意を表した。景致もこれに倣つた。

『鎌田の殿、持つたものを皆な此方におつかはしなされ!』清太はさう言つて、その傍に寄つて來て、かれの持つてゐる荷物や、金丸丸の持つてゐる荷物を皆な受取つて向うへと持つて行つた。

『ようお伴れ申してたまうたな!』皆なして揃うて邸の内に入らうとしたが、ふと鎌田と並んで歩くやうな位置にその身を置いた時、庄司忠致は小聲で囁くやうに言つた。

『やつとお伴れ申した——』

『それで今日は何處から立つておじやつた?』

『昨夜、おそく青墓を立つて、川を下つた。今日は一江から參つた!』

『ほ——青墓を——』

庄司忠致はいくらか豫想外だといふやうな調子で言つた。二三步互ひに黙つて歩いたが、

『船番所は別條なかつたかな?』

『いや、もう少しで知れるところで御座つた——』鎌田はかう言つたが、いくらか案じられるといふ風で、『それで、こゝにも早う知れわたつたので御座るか?』

庄司は點頭いて、『しかし、大したことは御座らぬ。何と云つても、此處まで來れば、もう田舎ぢやて——?』

『さやうで御座らうな? 大事は御座るまいな!』

『まあ、心を安うして……』

また暫し黙つた。義朝は金丸丸と玄光とを従へて、その五六間あとから靜かに歩いて行つた。一方は庭のやうなところがかなり長い間續いた。庭には橘の黄い大きな實が三つも四つも緑葉の中に綴られてあるのを義朝は眼にした。

鎌田と忠致との話は猶續いた。

『まアゆつくり疲勞を休ませて貰うぢや——』

『それが好い、それが好い——此處ならば、さういふことが知れてはるても、田舎ぢやで、さう案ずることはない。ゆるりと休むが好い——』

こんな話をつゞけてゐる中に、やがて家屋の入口のところへと來た。義朝の眼には、大きなぐしの高い草葺の屋根と、それに續いて瓦葺の形よく竝べられてある家屋と、それを兩方から往來の出來るやうになつてゐる屋根を持つた長い廊下が映つた。入口には家人や奴僕が混雜と集まつて迎へてゐるのが見えた。

次第に夕暮の空は暗く暗くなり出した。向うの赤ちやけた石山の松に微かに残つてゐた夕ばえの餘照もいつか消えて、野に放つてある牛の群のぞろ／＼と此方へと走つて來るのが見えた。そしてそれを伴れて下りて來てゐる女の髪を包んだ帛の白いのがそれとあたりに際立つやうに見えた。

そこに混雜と出迎へに出てゐる中に、鎌田は一年前に此處に置いて行つた妻の小金の喜びに輝いた眼を見出すことをあやまたなかつた。

五〇

義朝の眼にいろ／＼なものが映つた。さびしい静かな平和な田舎が映つた。長く邸の周圍を取巻いてゐる築土が映つた。庭の中門のところから廊下がながくつゞいてゐるのが映つた。いくら眞似ても、その田舎らしさは取去ることは出來なかつたけれども、瓦葺の竝べ方や、半蔀のつくり方に京の家屋の模倣されてゐるのも映つた。かれは古い衝立のそこに置かれてあるのを見た。

かれは中門の入口から上つて、長い廊下を通つて、奥深くなつてゐる一室にやがてその身を見出した。そこへ案内して來た忠致は鎌田に言つた。『この向うの室に御通し致すのが好いので御座るが、掃除がして御座らぬので、今日は此處でお寛ろぎ下さるやうにしていたゞきたし！ その代り明日は早う掃除させるで御座らうほどに——』

『さやうで御座るな。向うの室の方が好う御座るな——』

鎌田も立上つて、廊下を向うの方へと行つて見た。そこは廊下づたひにすぐ行けるやうになつてはゐるけれども、蔀がすっかり下されて、あたりは塵埃でざら／＼してゐるので、掃除をするにしても、とても急の役には立たなかつた。

『今日ッていふわけには行きませぬな？』

『まア、今日は此處で、大殿にも許していたゞいて、その代り、明日になれば、すぐ掃除させますほどに……。向うの室は、山が見えて、ちよつと氣持の好い室で御座るが——』

こんなことを言つて、庄司忠致は頻りに頭を下けた。此前、熱田で見た時とは違つて——勿論その間には十年以上の年月が經つてゐるけれども、わるく老いて髪などが半ば白くなつてゐるのを義朝は見遁さなかつた。それに、機嫌を取らうとする態度がイヤにコセ／＼してゐて、話をする度に、伏せた眼を竊に相手に向けるさまなども何となしにその氣に懸つた。『もつと若い、元氣な男だつたと覺えてゐるが、かうも年月は人間を老させるものか……？』こんなことを義朝は腹の中で思つた。

忠致が向うに行つたあとで、義朝は鎌田に向つて言つた。

『それで何ういふことにするな？ 此處にも、さう長く留つてゐるといふわけにもまるるまいが……』

……？』

『御案じめさるな？ 此處まで参れば、もはや大事御座らぬに——』

『それは、まア、そちにはさうぢやらうが——一日も長い方が好いちやらうが、さうかと申して、さういつまでも長逗留も出来ぬでな——』

『殿！ まア、その話は、いづれ明日にでもゆつくりと致さうでは御座らぬか。やつと、此處まで参つたばかりで御座るに、せめて今日だけでも、何も彼も忘れて、ゆつくりお休みなされたがよろしうは御座らぬか？ やつと此處まで参つたので御座るゆゑ——』鎌田は溜息をつくやうにして言つた。

義朝は黙つた。しかもかれは何となしに深い憂鬱を感じた。關ヶ原から青墓に行つた時のやうな張詰めた心持もいつかなくなつて、ともすれば心も魂も體もぐつたりとなつて了ふやうな氣がした。頼朝や朝長や千波のことを考へると、一時は赫となるやうな突詰めた心持になるのが常であつたが、今はさうした力すらもなくなつた。子供達と共に、その身のある部分も消え失せて行つて了つたやうな氣がした。かれは心も體も全く疲れ果てたといふやうにそのまゝそこに横になつた。

『何か夜のもので持たせて参じませうか？』

『さうぢやな？』

『お疲れになつたので御座らう？ 何に致せ、本當にぐつすり眠つたといふことはないので御座るほどに——』

鎌田の命するまでもなく、そこにあるた子息の景致は、そのまゝ立つて婢に夜のものを持つて來させた。

しかしちよつと身を横たへたゞけで、義朝はすぐまた起きかへらなければならなかつた。何故なら、庄司を始め一家の人達が皆なそこに叮嚀に辭儀をしに來たからであつた。庄司の女房などまで其處に出て來た。

金王丸と玄光との室は、すぐその向うの入口になつてゐたが、そこにも皆なはぞろぞろと入つて行つて辭儀をした。後には鎌田の妻もそこにその姿をあらはした。

時を移さず、行器や銚子が大きな臺盤の上に竝べられた。あたりは既に夜になつて、そこにも此處にも結び燈臺が點けられた。

しかも今日は節季なので、家の内は忙しいらしく、家人や奴僕の往來する氣勢が奥の方で絶えずきこえた。庄司もそこにやつて來てはすぐ立つて行つた。『矢張、節季で忙しいぢやな？』かう義朝が言ふと、向うに立つて行つた庄司を見送りながら、『放つて置けば好いので御座るが、何事も人任せには出来ぬ性分で御座るゆゑに——』かう鎌田は舅のために辯解するやうに言つた。

『さやうぢやらうな？ 何と申しても、此處等のことは、庄司でなうては、何うにもならんぢやらうからな？』

『矢張、こまめに百姓の世話までも見てをりますでな?』

『それはさうと、こゝらには、平家は誰が居るな?』

鎌田は考へて、『さやうで御座るな。内海の庄には、他には平家と申すやうなものはない筈で御座るが——山を越した向うには、たしか武豊と申すところに、橘八郎太貞盛と申すものがあつたやうに存じてをりまする——』

『橘?』

義朝は考へて、『この身は知らぬな?……吉田左衛門といふ平家方が此處等にあつたと思つたが、それはこの近くではないか?』

『吉田はずつと北で御座る。かれのをるところは、武豊よりはもつと三河寄の龜崎といふところで御座る——』

『あ、龜崎、さうぢや、さうぢや、さう申したな?』

『それは、このあたりにも、平家方はないでは御座らぬが、皆な小さなものゝみで御座るゆゑ、案ずることは少しも御座りませぬ。たとへ殿が此處にお出でになることがあたりに知れわたつたにしても、何うにもなることでは御座らぬ——』

『まづ安心ぢやな……』

『少しもお心をお置きになるには當りませぬ。六條の住宅も同じで御座る!』

この不用意に言つた一言は、義朝にも鎌田にも千波姫のことを思ひ浮ばせた。しかも二人ともそれについては何一言も言はなかつた。二人は黙然とした。

暫らく経つた。鎌田は黙つて銚子を取つてそこに置いてあつた義朝の盃に酒を満たした。その時庄司忠致がまた入つて來た。

『度々中座して、大殿にも申譯が御座らぬ……』

『そのやうな氣兼はいらぬ。節季で忙がしいのはわかつてをる——』

義朝はかう言つて、鎌田のついで盃をぐつと飲み干して、それを盃臺に戴せたまゝ、忠致の方へとやつた。

『この身に下さるので御座るか? これは忝なう御座る?』かう言つて忠致は一二尺身を退つて叮嚀に色代して、『平日では、源氏の大殿から手づからお盃を戴くなどといふことは望んでも得られぬことで御座る……』

『そのやうに申すな……』

『いや、忝なう……』かう言つて庄司忠致は、その盃を押戴くやうにして、傍から酌をしようとする鎌田の銚子から波々と酒を注いで貰つた。十年前に熱田で義朝に逢つた時には、とてもその傍にも

近寄れぬ身であつたことなどをかれは思ひ出しながら、じつと義朝を見詰めるといふやうにして盃を口に當てた。

五一

星が煌々と光つて、あたりはしんとしてゐた。濱ではをり／＼波の打寄せて来る音が囁くやうに聞えて、砂濱に引上げた船の舳に、年の瀬を送るための注連縄の結えてあるのがそれと白く闇にも見えてゐた。静かではあるが、ひっそりとはしてゐるが、何處かに賑かな気分が漲つて、その家にも、かしの家にも遅くまで灯が見え透いて、何か楽しげに笑ふ聲がした。

酒に酔つて、拍子を取つて、踊つたり唄つたりしてゐる人達の氣勢も到るところにきこえた。

何と言つても、今宵は節季だ。足りやうが足りなからうが、金があらうがなからうが、納め物が十分であらうがあるまいが、兎にも角にも一年の仕事を終つて、また明日からは、新しい年を迎へて働かなければならないのだ。今年のやうなわるい年はもう来るな。新しくやつて来る年は幸福であれ！あのいやな蓋面つくつた貧乏神はもう二度とはやつて来るな。そして其代りに福々したあの恵比須や大黒がやつて来い……。わるいものは西の海へさらりさらり——こんなことを言つて、何處でも皆な酒に酔つたり太平樂を並べたり女に戯れたりしてゐた。女房達は女房達で、わざ／＼三里も四里も行つて、町で

買つて来た女の兒達の正月着の着物を結び燈臺の下でせつせと縫つてゐた。そしてその向うでは、固くならない中にと言つて、晝間搗いた餅に頻りに主人が庖丁を當てゝゐた。

ゆづる葉——それは晝間山から子供達が取つて来た。『おかア、今日は山へ行つてゆづる葉取つて来るだな……』こんなことを言つて子供達は出かけて行つたが、此頃では、近くの山には、その樹が少なくなつたので、ところに由つては一里も山の中に入つて行かなければならないといふことだつた。『こんな大きな好いゆづる葉は、もう近くにはねえぜ！ おかア！ おら、ドン／＼山の中へ入つて行つてやつとこれを取つて来たんだぜ——こんな好い葉を取つて来たのは、おらと平公だけだぜ！』など、言つた。否、その平公はそれを持ちながら歸つて来ると、寺のところで庄司の殿の家人に捉まつて、そのあの方を奪はれて了つたといふのであつた。『おかア、錢くろ！ 正月の錢くろ！』こんなことをその悪太郎は言つた。

神に捧げる山榊なども子供達は折つて来た。中にはそれを籠に入れて、『正月の榊とゆづる葉入んねえか？ ゆづる葉入んねえか？』と言つてそれを賣つて歩く貧しい人達の子供等もあるかと思ふと、ある家では、納物を納めて来るものがまだあるので、門をあけて、小さな篝火を焚いて待つてゐた。と、そこに米俵を山のやうに積んだ荷車が松明に照されつゝ、ガラ／＼と氷つた夜道を此方へとやつて来た。『えらうおそうなりましてな？ 申譯が御座りましねえな。』

一緒について来た老いた百姓は、かう言つてその篝火の傍にその車の梶棒を下した。

『それでもな、まだ子の刻にやらねえだでな……。おそうなつたが、まだ今年は今年だでな。』

『遅いな……。かうやつて待つてゐるのがたまらねえや。太平樂言ふな!』

かう言つて、そこに待つてゐた人達は、老いた百姓に手を貸して頻に車から米俵を下した。

『まだ五俵来るが、それはあとから持つて来るいうてた!』

『人を散々待たせて、その上に、俵が足りねえんか? しやうがねえ奴等だ!』かう言ひながらも、

しかもそれを強いて咎めもせず、一俵毎にかついでそれを向うへと運んで行つた。

さうかと思ふと、つくり酒の銚子を更へて、遅くまで女房相手に管を巻いてゐる爺などもあつた。

『もう、とつさん、好い加減にして寝なよ。』かう女房が何遍言つても、何處に風が吹くといふやうに平氣で同じことを繰返した。

『來年は庄司の殿に言うて、もう少し歩を好うして貰はねば、とても何うにもならんでな!』

『徒勞だよ』

『徒勞なことがあるもんかな? 清太の家などでは、あの上さアが豪いでな、始終、庄司の殿の機嫌を取つてゐるでな。それで好いのぢや。そちのやうなぼんくらではないからな』

『清太の上さアの眞似なんか出来るけえ!』貞操の正しくないので評判な女と一緒にされたのを怒る

やうにして女房は言つた。『お前さ、あの眞似をこのおらにしろつて言ふのけえ?』

『まアさう怒るなよ。物は譬へだ!』

『いくら譬へでも、あんまりぢや……。お前さ、女房を殿に賣つても、歩を好くして貰ひていかね?』

『さういふわけぢやねえ——』

爺は酔ひ痴れた身をぐたくさせて、『あの庄司めは、女には眼がねえな? 何んな女子にでも手を出

すでな?』

『だから、おらにもさうしよと言ふのかね?』

『あやまつた! あやまつた!』爺はぐたりとして、『さうぢやな? そちは操の正しい女子ぢやな。』

さればに由つて、この身も安……。心……。してゐるぢや。あは、あは、……。は——』

『好加減にしなれ——』

女房はぶいと怒つたやうにして向うに立つて行つた。

かうした光景は到るところにあつた。寺の築土の向うにある酒を賣る店では、集落の若い者達がそこにもこゝにも集まつて、賭博をやつてゐるものもあれば、女子と戯むれてゐるものもあるといふ風で、結び燈臺の灯がチラ／＼と隙間洩る夜風に動いた。つい、さつき、其處に酒を飲んでゐた一人の男が、頻りに京の噂をしてゐるが、傍にゐるた肥つた男は、それを耳にして、『それは本當ぢやあるまい、……。ま

さかに、そんなことはあるまい。とてもこゝまでは落ちては來られまい……』と言ふと、他の一人の男は、『おらも見たわけではねえで、はつきりとは言へねえが、庄司の婿どのが來たといふのは本當ぢや……。何でも、今日の夕方に四五人して來たさうぢや。』と言つて、『まア、それは兎に角ぢや。今度は源氏に取つてはえらい失敗ぢや。これでは平家方に裏がへるものも出て來ないとは限るまい……』など、言つて、その人達は京から傳はつて來た種々な物語をした。

しかし、村ではまだ源氏の統領がこの田舎に落ちて來たなど、は夢にも知らないものゝ方が多かつた。夜は次第に更けて行つた。亥の上刻はとうに過ぎた。くつきりと晴れた空には星がキラキラと煌めいて、林の傍を通つて行く路には萱や草の葉がガサ／＼と靜かに動いて、波の音が遠く聞えた。

寺では、今宵は庫裡ばかりではなく、本堂にも灯がついて、夕方から讀經の聲があたりの林を透して洩れてゐるが、をり／＼は鐘を鳴らす音もさびしくあたりに響いてきこえてゐるが、亥の刻近くそれが止んで、暫らくはひつそりとしてゐると思ふと、今度は庫裡から松明を手にした坊主が二人出て來て、急いで本堂の向うにある鐘樓の方へと行く氣勢がした。

節季の鐘をこれから撞かうとするのであつた。

肥つた僧は携へて來た松明を三本集めて地上に立て、さて靜かに鐘樓の上へとほつて行つたが、綱が引かれたと思ふと、撞木は大きく波を打つやうに動いて行つた。鐘はゴォン／＼と鳴り始めた。

その鐘の音は、しんとした闇の中を、星のキラ／＼と煌めく海岸の集落の中を、ところどころに林を持つた丘陵のあたりを、時には震へるやうに、時には振盪するやうに、また時には吼えるやうに絶えずその響を傳へて行つた。何處の家でもそれに耳を傾けないものはなかつた。『あ！ 節季の鐘が鳴りはじめた！』かう言つて取引するものは取引をやめ、小作米を待つてゐる家は篝火を消して門を閉ぢ、酒を賣る店は店で、もはや客を入れないためにその入口の蔀を下した。『もう、好い加減にしるや、鐘が鳴り出したぞや！』酔はない方の客はもう一人の酔つた方の客の袖を引くやうにして言つた。

かと思ふと、一度眠つた子供達がその響に目を覺して、『おかア、あれが節季の鐘ぢやな？』と言つて、じつとめづらしさうにそれに耳を傾けた。中にはそのまゝ起き上つて、母親の針を運ばせてゐる傍に坐つて、何うしても寝ないと言つて、眼を大きく明いて、不可思議のものゝやうに、その一つ一つ深夜の空気を揺かして來る鐘の音にじつと聞き入つてゐるものなどもあつた。翁は翁で、ちよつと眼覺めて、『今年もこれで暮れて行くな——』かう感慨深さうに言つて、そしてまた寢返りをして眠つて行つた。

風のある夜なら、鐘の響はそれに吹散されて、時には微かに、微かに、正確に指折つて數へることは出來ないほどであつたかも知れなかつたが、今宵は靜かで、しんとして、犬の吠える聲が唯遠くできこえるばかりなので、その一つ一つが丘を越え、林を鳴し、鬼瓦に當り、廣野にひろけられて行くのが手

に取るやうにはつきりときこえた。夜おそく此方の丘から彼方の丘へと松明をつけて越えて行く旅客の耳にも、彎曲した海近く碇泊してゐる船頭の耳にも、否、その時には既に酒宴を撤して厚い夜の物の上にその疲れた身を横へてぐつすり一寝入りしてゐた義朝の耳にすら、其數多い鐘の響は入つて行つて、かれはぼつかりと眼を覺した。(お、節季の鐘が鳴つてゐるな)とかれは思つた。かれは枕元にある結び燈臺の灯の影が微かにチラ／＼と天井に映つて動いてゐるのを眼にした。かれはさびしい心持になつた。その身がその鐘の響の中に漂つて浮かんでゐるやうな心持になつた。しかし疲れてゐるかれはまたすぐぐつすりと寝込んで了つた。

寺の鐘樓の下では、三本集めた松明が半分ほど燃えて、赤い火の焰がチラ／＼とあたりの闇を照してゐるが、そのすぐ上のところには、肥つた僧が呼吸をばづませて、頻りに撞木の綱を大きく引いてゐるのがそれと見えた。撞木の動いて行くにつれて鐘は大きくあたりに鳴りわたつて行つた。

松明の傍に立つてゐるたもう一人の僧は、さつきから交代しようかと何遍も言つたが、しかもそれをも耳に入れないやうに、鐘に心も魂も打ち込んだといふやうに、頻りに熱心に撞いてゐるが、やがて疲れ果てたといふやうに、撞木の綱をそのまゝにして、急いでその肥つた僧は下りて來た。『今ので六十五ぢや』かうかれは言つた。かれはスウ／＼呼吸を切つてゐた。

交代した僧の撞いた鐘の音は今までとは違つて、小さく低く、時にはうめくやうに苦しげに鳴つた。

わるく外れたやうな音をすら立てた。

『もう少し力強く——大きく。』肥つた僧はかう下から聲をかけた。

鐘はひとつ／＼鳴つて行つた。

五二

その節季の鐘の音が止んで了ふ頃になつても、庄司の家の居間から臺所の方にかけては、まだ大勢人が出たり入つたりしてゐた。外には篝火が燃えて、松明を手にした人達が何か大聲に喚き立て、出て行つたりなどした。灯が其處にも此處にもチラ／＼と動いてゐた。

『もう、節季の鐘もお了ひになつたぢやねえか? もう大概にして休むといふことにしたら何うぢや

——』七郎太といふ僕のひとりか、かうつぶやくやうに言つと、

『本當ぢやな、おぬしの言ふ通りぢや。明日といふこともあるでな……。元日はまた元日で、さう遅くまでも寝てゐられねえで……』

もう一人の、鬚面の、汚ない衣を着た下人が笑ひながら調子を合せた。

『休みたいやつは休め! 遠慮はいらぬぞ!』

かう向うの方から太い威嚴のある聲が呶鳴つた。それは臺所と居間との間のところで頻りに小作米の帳

面をつけてゐる四十先の肥つた男だつたが、その一喝で、またあたりはしんとして、てんでにその割りつけられた爲事へと戻つて行つた。あるものは納め米の俵を小屋の中へと運び入れる。あるものは正月のかざりをせつせと取りつけてゐる。またあるものは大きな桶へと水を汲み入れてゐる。かと思ふと、そこに、夜鳥を射に行つた僕が、二三羽の山鳥と弓矢とを持つて靜かに入つて來た。

『お！ それは好いものが捕れたな？ 客人をもてなすには此上もないものぢや。』

『よう捕れたな？』

『何處まで行きやつたか——』

さうした言葉がそこからもこゝからも起つた。臺所の方では、筧から水がちよろ／＼と落ちて、そこで婢が椀や行器や銚子を洗つてゐるが、それもいつか濟んだらしく、何か饒舌りながら此方へと出て來た。その此方では大きな圍爐裏に丸太がぶす／＼と燻つてゐるが、それがばつと燃え上る度に、あたりが隅々まで明るくなつて、その向うに黒猫がちよこりと坐つてゐるのがはつきりと見えた。山鳥を射て來た男は、その獲物を柱の釘にかけて、弓矢を向うに立てかけて、『寒い寒い……』と言ひながら、藁沓の儘でその圍爐裏へと入つて來たが、傍にある櫓を二三本折つてくべると、やがてばち／＼と音して火は勢ひ好く燃え出した。

さつきからそこで居眠りをしてゐたひとりの僕は、その音に眼を覺して、じろ／＼とあたりを見廻し

たが、大きなあくびを一つして、

『いつ歸つて來やつたな？』

『今——』

『獲れたか？』

男が黙つて向うの柱を指すと、僕の男はそれを見て、『おう、取れたな……。ようとしたな？』

『上手は違つたものぢやらう？』

『さうぢやな、おぬしの誇るのも無理はないな。夜鳥を射る名人と言はれただけあるな。それにしても、何處まで行きよつた？』

『秋葉の山の下まで行つた。あそこに行けば、いつでも獲物のないことはないでな？』

『おぬしは上手ぢや……』

僕の男はまた大きなあくびをした。

櫓火はまたばつと燃えてあたりを明るくした。そこからは、居間に坐つて何かしてゐる庄司のいくらか禿けた頭がそれとはつきり指されて見えた。

居間で二三人の婢達と餅を切つたり何かしてゐる庄司の妻が、ふつと立つてしらべ物をしてゐる庄司の傍のところへ行つた。

『小金は？』

『さア、知らぬな——』

さういふことは頓着しないといふやうにせつせと庄司は書類のやうなものに目を落してゐた。

『鎌田どのは？』

『休みやつたと思ふが——』

『それでは、もはや、小金も休んだかな？』庄司の妻はかう言つたが、そのまゝ、ところどころに灯の置いてある廊下の向うの方へと行くと、子息の景致の室から今年の秋貫つたばかりの嫁の照壽が燈籠を手にして静かに出て來た。

『母者！』

『お、照壽、そちはまだ休まぢやつたのか？』

『え！』

『小金はもう休みをつたのか？』

『い、え、まだ向うで話聲がしてゐられます——』

『もはや、しかし、夜の物を運び入れたので御座らうな？』

『い、え、まだ夜の物は？ 鎌田さまも起きてゐられませう……』

『呼んでも苦しいあるまいな？』

『たづねて參じませう？』

照壽はばた／＼と氣輕に足音を立て、灯に明るくなつてゐる鎌田達の室の前へと行つたが、

『姉上！』と小聲で呼んだ。

と、小薮がそつと上げられて、そこから今年二十八の、田舎にはちよつとめづらしい、現に保元以前には三年も京に行つてゐたことのある、何處か垢ぬけのした美しい顔をしてゐる小金がその半身をあらはした。

『何か用事で御座るか？』

『母者がもはや姉上は休まれたかときかれまするゆゑ……』

『母者が——？』

小金は廊下へと出て來たが、母親が向うに立つてゐるのを見て、そのまゝ、そつちへと歩いて行つた。近寄つて、

『何か用事でも……？』

『もう休みやつたか?』

『休んだというでも御座らぬが?』

『鎌田どのは?』

『勞れたゆゑ、もはや休むなどと言うて、帳臺の中に入られました。——』

『それでは、もはや、明日にしようか?』

『鎌田どのに用事が?』

『いや、さうでもないが? やつと節季の用事がひと片附きしたでな……。久し振ちやで、京の話でもき、たいと思うたのぢや——』

『起しませうか?』

『いや、もう、折角、休んだものを起すにも及ばぬ。しかし、おぬしは、まだ起きてゐても好いのぢやろ——』

『え、。』

『夜食でもして、それから寝まるが好い……。餅もやつとあら方切つて片附けたでな……。何にせよ、澤山あるのでな。婢達の手にも餘る……。』

『お供餅の方も、もはやすつかり片附けられたか?』

『やうやう片した——』

『それでは——』小金はその室に入つて、まだ目を覺ましてゐる鎌田にその旨を話して、小蔀を下して、廊下の方へと出て來た。照壽と母親とはそこに立つて待つてゐた。

『景致は何う致しました?』

『まだ戻つて参じませぬ。』

『さつき出てまだもどつて参らぬのか?』庄司の妻はかう言つたが、小金のやつて來るのを待つてそのまゝ揃つて居間の方へと戻つて來た。

景致がゐないだけで、家族のものは皆な居間に集まつた。節季の夜食の箸を取つて賑やかに楽しく年を送らうとする古い習慣は、今だに此處あたりの豪族の間に残されてあるのであつた。簡單ではあるが、大きな臺盤がそこに運ばれて、餅を煮た汁鍋や、蛤の焼いたのや、鯛の蒸したのなどがその上に並べられた。庄司と庄司の妻を中心にして、娘や嫁や重立つた女達がそこに丸く席を取つた。

『今年はこれでまだ早い方だぞな……。いつかなぞは、夜食をすませたら、もはや夜が白々と明け離れたことがあつたぞな……。新年の若水を汲んで神棚に上げてから、それから帳臺に入つたこともあつたぞな。』

かう庄司の妻が言ふと、

『去年はもつと遅う御座つた——』一家の取しまりをしてゐる中年の女はかう調子を合せて、『これで、今年は早い方で御座つた。小作の方が順ようすみましたでな。』

『さうぢや、都合よう行きをつた方ぢや。』

皆なの椀には餅の煮た汁が盛られ、庄司の坐る前には、行器と銚子とが置かれた。

『殿!』

まだ頻りに倦まず書類を整理してゐる庄司に向つてかうその中年の女が呼懸けた。

『今、行くで、先きに始めをれ!』

『それでもな……?』

『ちよつとやりかけでゐるでな——』

『もはや、あとになされ——』

今度は庄司の妻が言つた。

庄司は口の中で何か言つたが、その一家のむつまじいまどるには流石に重きを置かないわけには行かないといふやうに、そのまゝあたりに散亂した書類を手早く片付けて、急いで此方へとやつて來た。ふとあたりを見廻すやうにして、

『景致は?』

『まだ戻つて參じませぬ。』

『何をしてをるのぢやな……。夜食だけには、皆なと一つに坐つたが好からうにな?』少し不機嫌に言つたが、銚子を持つて酒を注がうとした照壽の手を却けるやうにして『いや、もう、酒はいらぬ! さつきのがまだ残りをるでな。』

『それでも、お祝ひで御座るほどに? 唯、おひとつなりとも——』

『さやうか。』

今度は機嫌よく盃を起して、波々とそれに注がせた。

小金の坐つてゐるのを見て、

『客はもう休みをつたか?』

『失禮とは存じたれど、疲れをると申して、先きに休み申しました——』

庄司は何か言はうとしたが、止して、そのまゝ盃を口に當てた。皆なは各自に箸を取つた。汁の中の青菜、長く引張つても容易に切れないねばりの強い餅、鍋の中に入れられてある大きな匙、女達の長い髪には灯が薄暗く流れて、いかにも田舎の節季の夜らしい光景があたりにそれと展げられた。下衆達も最早眠りについたらしく、臺所の向うにある篝火もいつか消えさうになつてゐた。

『それでも、よう此處までおぢやつたな?』二三杯盃を重ねたあとで、庄司はかうその妻に言つた。

『本當で御座るな?』

『大事ぢやつたな、海を越すのがな?』かう言つたが止して、『明日は好いお正月らしいな?』

『さやうで御座るな? この間ぢうのわるい天氣もこれできまりましたな? 星屑は降るやうで御座る—』

『好い鹽梅ぢや。』初めの言葉にも似合はず、庄司はそれからそれへと盃を重ねた。

五四

夜食の儀式が済んで、小金や照壽達が向うの方に行つて了つても、庄司は猶ほ盃を口に當て、ゐたが、やがて庄司の妻は心配さうに、

『それにしても、景致は何うしやつたらうな?』

『何アに、そこらに行つて酒でも飲んでゐるのぢやらう?』

『困つたもので御座るな。嫁に對しても濟まぬやうな氣がするでな!』

『若いものぢやで。』

庄司は何か考へてゐるのを押隠すやうにして言つた。

『でも、年越の夜食にはちやんと揃うてゐる貫はねば、家の衰へるもとるだと昔から申してゐるほど

で御座りますゆゑ——もう少しあなたから言つて戴かねば——』

『案ずることはない——』

庄司は盃を口に當てたま、別に何か深く考へてゐるやうな顔の表情をして見せた。

『何か考へてゐることでも——』

『いや、何でもない——』庄司は慌て、元の表情に戻つた。

『何か今日の客のことについて、御心勞でもあるのでは?』

『いや、そのやうなことはない——?』

『平家方がそれと知つて、此方へ兵をむけてまゐるやうなことでもあるのでは御座りませぬか?』

『それは大事ない——』

庄司はつとめてそれを否定するやうな態度を取つたが、急に話頭を改めて、

『小金は喜んでゐるぢやらうな?』

『一年振りで御座るゆゑに、喜んでゐることは論なう御座れど、源氏が負けたのゆゑ、もはや京へも
のぼれぬかなど、申してをりました——』

『異なことをきくやうだが、小金は鎌田を何う思つてゐるぢやな?』

『何うとは?』

『よう思つてをるかな?』

庄司の妻は笑つて、『異なることを仰せある……? めをとであるによう思つてをるもわるう思つてをるも御座るまい——。なでう、そのやうなことをお訊きやる?』

『でも、仲の好いとわるいとはあるものぢや。また同じ仲の好いにしても、いろ／＼あらうと言ふものぢや。ほんまに好きとか、中ぐらゐるに好きとか、あまり好きではないが、めをとであるゆる仲を好うしてゐるとか、いろ／＼あるものぢや。其をきいたのぢや。』

『何のために?』

『別に何のためといふこともないが、ちよつと訊いたのぢや。』

庄司の妻はじつと夫の顔を見詰めた。かの女は何かそこにかくされてあるものがあるのをそれとなしに感じたのである。

『別に仲がわるいといふこともないやうで御座るが……』

『さうかな』

庄司はじつと深く考へ込んだ。暗いある光景、地獄の繪にでもあるやうなシーンが彼の眼に染み込んで浮びあがつて來た。かれはじつとそれを見詰めた。かれは總身が戦えるのを感じた。

これはしかし今始めて起つて來た心の光景ではなかつた。それはさつきめづらしい客が來たといふこ

とを初めて耳にした時、否、もつと正確に言へば、その時にもさうした暗い衝動は起つたには起つたけれど、それよりもむしろそのめづらしい客を門前に迎へてそれを室に案内して行く時、廊下をぞろぞろ揃つて通つて行く時、その時さうした暗い光景が一層はつきりと繪になつてかれの眼に映つて來たのであつた。かれはその刹那、それまで全く夢にも想像しなかつたやうな或る運命が強い力でぢかにかれに迫つて來るのを感じた。かれはそれを何遍となく押返したには押返した。しかも暗い心の光景は容易にかれから離れて行かうとはしなかつた。

『もはやお休みなされ——』いつまでも盃を口に當てゝゐるのでかう庄司の妻は促した。

『さうぢやな……』

しかもかれは猶その暗い心の光景から離れることが出來なかつた。否、その暗い心の光景を一時押し切つて進みさへすれば、進み得さへすれば、その先には眼も眩むやうにはなやかな運命が輝いてゐるのをかれは見た。はつきりと見た。それこそこんな田舎の庄司などに満足して、つまらぬ下人や百姓を相手にその日を送つてゐなくとも好いのであつた。また、こんな土臭い田舎に埋れて一生を終らずとも、京に行つて、何んな立派な贅澤な生活でも出來るやうになるに相違ないのであつた。庄司は放心したやうにして盃を下に置いた。

庄司の妻は、夫が依然として身を動かさないのので、婢や僕を休ませ、あたりをも片付け、散らばつて

るるものを一ところに寄せ集めたりなどしてゐるが、再びそこに來て、

『まだで御座るか？』

『いや、もう寝まる……』

かう言つて庄司は始めてそこから身を起した。かれは酔つた身を、さうした暗い空想を肴にわるく酔つた身をフラ／＼と柱に當てぬばかりにして、そのまゝいつもの自分達の室の方へと行つた。庄司の妻は、『そんなに過ぎられたとは思はぬに、えらう酔うて御座るな！』などと言ひながらその蹠踉するのを支へるやうにして、やつとそれを帳臺の中へと伴れ入れながら、

『景致は放つて置いてもよろしいかな？』

『構はぬは……』

『でも、節季の夜に家をあけるのも困りますれどな？』

『でも致し方があるまい……。裏の扉だけ明けて置け！』

『困つたな？ 照壽のことも少しは考へて呉れると好いのおやが——』かう言つても、夫がそれを相手にしないので、枕を頭に當てたまゝ、すぐ好い心持さうに眠つて了つたやうなので、庄司の妻は、そのまゝ、そこから引返して、元の居間の方へと戻つて來た。かの女は臺盤の上に散らばつた行器や銚子を臺所に下けてから、そこをちよつと掃除して、最後の月の出納の勘定をするために暫しその燈臺の下にそ

の身を寄せた。

妻は全くのんきに、夫がさうした暗い空想に悩まされてゐるなど、は夢にも知らずに、頻にその勘定した金額を綴ぢた紙へと書きつけた。かの女の胸には奥に眠つてゐる客達のことははつきりと上つては來なかつた。何うせ、東國に下つて行つて了ふ人達だから、一日二日忙しい思ひさへすれば、それで好いぐらゐにしか思つてはゐなかつた。そこに、裏の扉が音もせず明いて、子息の景致の姿があらはれた。

『お、歸つておぢやつたか？ 何うしやつたかと思つた——』

『もはや父上は休まれたか？』

『休まれた——』

『今宵は節季ゆゑ、夜明しかと思つたら、さうでもないのぢやな——』景致は暫しそこに蹲踞つてゐるが、『それでは母者、この身も寝まるで——』かう言つてそのまゝ、靜かに向うへと立つて行つた。長い廊下を歩いて行く足音が暫し夜の空氣に響いてきこえた。庄司の妻は、猶長い間その身をその結び燈臺の下へと寄せてゐた。

夜中にぼつかり眼を覺した庄司の頭には、その暗い心の光景が依然として執念深く絡みついてゐた。かれはつとめてそれを押退けて眠るやうにしたが、さうすればするほど執念こくそれが纏つて來て、後

には何うすることも出来なくなつた。かれの眼は次第に大きく闇の中に明いて行つた。かれはじつと暗い天井を見詰めた。

五五

節季の鐘を聞いてから、義朝はぐつすりと寢込んで了つたが、眼が覺めた時には、前の小部はいつかあけられてゐて、静かな元日の日影が晴れやかに縁にさし込んで來てゐるのをかれは見た。雀の百轉りが喧しいぐらゐあたりいきこえた。

義朝は急いで起きて、昨夜庄司の妻が揃へて置いて呉れた絹の直垂を着て、そのまゝ、此方へと出て來た。小部の下のところには、朝の身じまひをする準備がすつかり出來てゐて、腰の高い黒塗の小さな手水盥や、手桶や、柄杓や、新しい手帛等が揃へて出されてあつたが、持つて來てからもはや久しく經つたと見えて、桶に入れられてある湯は半ばは微温くなつてゐるのをかれは發見した。尠くともはや巳の刻近くなつてゐるに相違なかつた。

かれは放心したやうなその姿を朝の明るい光線の中にくつきりとあらはしながら、じつと其處に立つて、見るともなくあたりのものに眼を移した。かれはそこに田舎風に配置されてある庭を發見した。落葉の溜つたまゝ、十分に掃除してない小さな池を、低く這ふやうになつてゐる太い松を、ところ／＼にわ

る／＼凝つたやうに置かれてある石を、そしてその向うにぐるりと住宅を取り巻いてゐるらしい、しかもところ／＼壊れたり崩れたりしてゐる赤褐色の築土を發見した。

否、そればかりではなかつた。その築土を越して、それほど遠いとは思はれないあたりに、こんもりと深くしけつてゐる杉の森をかれは眼にした。

不思議な氣がした。丸で別な世界にでも來たやうな、またその身は長い／＼夢を見てゐて、まだその續きを見てゐるやうな氣がした。そのこんもりとした杉の森の上に一羽の鳶が小さく高く舞つてゐるのをかれはじつと見詰めた。

ふと軽い足音がきこえたと思ふと、それとは豫期せずによつて來たらしい婢の丸顔がひよいとそこにあらはれて、しかも客の起きてゐるのにびつくりしたといふやうに慌て、あとに引かへさうとしたが、さうも出來ずに、いくらか顔を赧らめつゝ、徐かに此方へと寄つて來て、『お目覺で——』と低聲に言つて辭儀をした。義朝は黙つて其方を見た。

婢は微温くなつた湯を取替るために、その桶を下けて廊下を向うへと出て行つたが、再びそこにその姿をあらはした時には、その手にした桶から湯氣が白く颯つてゐた。義朝はまだじつと同じやうにしてそこに立つてゐた。

婢はそこに來て、桶を下に置いたが、やがてその湯を黒塗の腰の高い手水盥に波々と入れて柄杓で適